



Title	開拓農家の連帯性 : 尺度化による調査と分析
Author(s)	金田, 弘夫; KANETA, Hiroo
Citation	北海道大学農経論叢, 18, 281-436
Issue Date	1962-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/10803
Type	departmental bulletin paper
File Information	18_p281-436.pdf



開拓農家の連帯性

——尺度化による調査と分析——

金 田 弘 夫

は し が き

尺度化による社会事象の測定的研究は米国が最も進んでいる。米国では1920年頃よりこの種の研究が盛んに行われるようになった。我国では戦後ようやくこの種の研究が盛んになつてきたが、しかしまだ十分な進歩をとげているとは云えない状態である。

ところが、この種の手法による研究は、実は我国においては米国よりも1足先きに進められていた。故高岡熊雄博士の研究がそれであつて、博士は今より60年前に、或る標識を用いて農業者の貧富の状況を測定する極めてユニークな方式をたてられ、これを実際に適用して、農民と市街地住民との貧富の差を立証された。

また博士はこの種の調査法を、自から Microscopic Research Method と名づけられ、所謂、巨視的観察を内容とする Telescopic Research Method と区別された。時あたかも今世紀の初頭、1900年（明治33年）当時のことである。それ故、社会事象についてのこの種の計量的研究は、我国においては博士の研究をもつて嚆矢とするものであり、また当時においては海外でもあまりこの種の研究は進んでおらず、少くとも1歩先んじていたと思われる。

約60年を経た今日、私は尺度化の方法によつて開拓農家の社会的連帯性を測定し、その特色を分析する研究を企図した。既に着手してから8年の才月を費している。この間、私は一応アメリカの Fessler の方式をよりどころとして、尺度の構成、実地調査、統計的管理、更には結果の分析等々の一連の操作を展開してきたが、この簡単にみえて實際は底の知れない問題の解明には再三にわたつて手を撓ねた。

しかし、その都度、私はこの種の研究が60年も以前に高岡博士によつて展開されたことを想起し、その偉大さに励まされた。

開拓社会についての社会学的研究と云へば、今日いまだに殆んど未開拓領域と云つてもさしつかえない状態である。この未開拓領域に科学的研究を企てることは、開拓農家の発展のためからしても、また学問の進歩の上からしても極めて意義のあることだと思われる。しかし、私共に与えられているあまりにも限られた研究の諸条件は、龐大な労費を必要とするこの種の調査研究には凡そ適合性のないものであり、そこでこのような制約を如何にして克服するかということ自体が1つの大きな問題であつた。その方法として、私は、許される範囲で1つ1つのことを確実に把え、これを累積して限られた条件を最大限に活

用することしか方法がないと思つた。

このような方針にもとづき、開拓社会における農家の連帯性について、一応の測定結果と、一連の分析結果を求めることが出来たので、これ等の研究過程を本稿において明らかにすることにした。後にも論ずる如く、本稿では、私共の独創になるの方式を適用することによつて、問題の解決にせまつた。その結果、連帯性をめぐる数々の特色が発見された。

その成果の1例として、かつて高岡博士が、尺度化の方式によつて、市街地住民と農民との貧富の差を立証された如く、私は、開拓社会における連帯性と既存農村における連帯性との優劣の差を立証することが出来た外、階層的連帯その他についても、開拓と既存との差を立証することが出来た。これ等一連の成果は、博士の嚮導のたまものに外ならない。

本研究に当つては、長期にわたつて、高倉新一郎博士の適切なる御指導を仰ぐことが出来た。また調査対象となつた開拓部落の農家各位をはじめ、既存農村の方々からは常に必要な協力を得ることが出来た。これ等の指導、鞭撻、協力がなかつたならば、この研究は到底ここまで成果をあげることは出来なかつたであらうと思われる。また、連帯性をめぐる理論的研究に当つては、北海道大学名誉教授・小林己智次博士、並びに札幌短期大学学長土屋四郎教授から再三にわたつて極めて有効なる助言と示唆とをたまわつた。

茲にこれ等の方々に対し、記して深謝の意を表わしたい。

1962年3月6日

北海道大学農学部にて

金 田 弘 夫

尚、本稿中、外来語については、常識語化された用語を除き原語を使つた。当然複数形にて表現すべき場合も、文章の体裁上単数形としたことを断つておく。

又、土地面積等については、メートル法とせず尺貫法をそのまま用いた。この点も許容願いたい。

目 次

は し が き	頁
第1章 序 論.....	(287)
——問題の提起とその方法——	
第2章 社会的連帯性の尺度化方式.....	(298)
序 説.....	(298)
第1節 Jansen の「家族の連帯性」の測定方式.....	(298)
Ⅰ 相互作用のカテゴリーの選択.....	(300)
Ⅱ スケールの設定とその吟味.....	(303)
Ⅲ 結果の分析、一家族のサイズと連帯性との関係.....	(305)
第2節 Fessler の Community Solidarity の測定方式.....	(307)
第3章 改訂尺度の構成と測定の予備的手続.....	(322)
序 説.....	(322)
第1節 開拓社会への適用手続.....	(322)
Ⅰ 尺度文章の修正.....	(323)
Ⅱ 尺度値 (scale value) の吟味.....	(331)
Ⅲ 調査地点の選定.....	(335)
第2節 妥当性の検定.....	(338)
——内的一致性の吟味による各問分析——	
Ⅰ 尺度の内的一致性.....	(338)
Ⅱ 臨界比による検定.....	(341)
(1) 方 法 (2) 検 定 結 果	
Ⅲ 信頼度のテスト.....	(347)
第4章 開拓社会における測定結果.....	(353)
序 説.....	(353)
第1節 単位「連帯度」の設定.....	(353)

第2節 連帯性の測定結果	(357)
第5章 開拓部落における連帯性の特色	(365)
——測定結果の分析——	
序 説	(365)
第1節 連帯性をめぐる「内延的課題」の分析	(366)
Ⅰ 平均値による開拓部落の連帯性の一般的特色	(366)
Ⅱ Community のサイズと連帯性	(368)
Ⅲ 領域 (Area) 別にみた連帯性の特色	(371)
(1) Community Spirits (2) Interpersonal Relations	
(3) Family Responsibility (4) Schools	
(5) Churches (6) Economic Behavior	
(7) Local Government (8) Tension Area	
Ⅳ 部落別連帯性の特色	(387)
(1) 新内開拓部落	(388)
(2) 鬼志別開拓部落	(391)
(3) 大与地開拓部落	(393)
(4) 拓北開拓部落	(395)
(5) ニセパロマナイ開拓部落	(397)
(6) 岩尾別開拓部落	(399)
(7) 赤井川、常盤・落合開拓部落	(401)
(8) 共和開拓部落	(405)
第2節 連帯性をめぐる「外延的課題」の分析	(409)
Ⅰ 開拓社会における階層内の連帯性	(410)
Ⅱ 開拓部落の入植以後の経過期間の相違による連帯性の特質	(424)
第6章 結 論	(430)

第1章 序 論

問題の提起とその方法

開拓農家によつて構成されている開拓社会は、或る程度人為的に組成された特殊な社会集団である。この特殊な社会集団における開拓農家の連帯性を、尺度化の方法によつて測定・分析し、その特色を解明することが本研究の課題である。

ここでは、その素材を戦後の北海道における開拓部落に求めているので、先づこの開拓社会の一般的性格について述べ、次に問題を提起する。

開拓社会は1つの創造的な社会である。そこでは、比較的少数の人々が、恵まれない自然的社会的環境を立地として、適住性をもつた新しい生活環境を作り出そうとして、様々な創造的行為がくりひろげられている。開拓の目的は、経済学的には「土地として表現されている天然資源の利用度を高めて、人類の生活を豊かにすることにある⁽¹⁾」と言われる。しかし、農業上の開拓を社会学的に規定すれば、それは、「所与の自然的社会的条件を立地として、これに順応しながら、これを積極的に利用・改造して、新しい共存生活の可能性を実現し、そこに開拓農家の生活を永続的に投映させようとする欲求実現の行為である」と云わねばならない。勿論、このような行為の目的は「理念としての目的」であり、また開拓者の理想としての関心 (interest) でもあつて、現実にはこれと異なる目的観や関心によつて支配されている開拓者もある。しかし本質的にはこのような経済的社会的目的のもとに継続される一連の行為が開拓と云われる行為の本質をなすものである。そしてこのような基本的な理念を1つの関心として、所与の立地に人々が群成し、主に農業を通じて生計をたててゆこうとする地域社会集団が、所謂「開拓社会」と称せられるものである。その群成 (aggregation) の仕方は、移住的であつて、しかも成員の数の少いことをもつて特色とするが、その集団が社会経済的に安定しはじめると、その後は次第に自生的群成 (genetic aggregation) に近い社会に変動する可能性をもっている。しかし恵まれない立地に群成する場合には、また容易に崩壊しやすいという脆弱性をもつ社会でもある。

開拓社会は既存の古い農村社会に較べて、屢々その社会性が疑われ、果してそれが「社会」の名に値するものであるかどうかが怪まれる程である。それはこの社会の社会的歴史が著るしく短かく、規模が小さく、しかも人工的計画的に設営されたむしろ「場所」としての性格が強い為であろう。しかし、開拓社会にみられるものはすべてが新しいものばかり

りではない。これを構成する開拓者は、既に古い社会において生活を営んで来た社会的経験をこの新しい社会においても生かそうとしている。そこでは彼等開拓者の前生涯が圧縮された形をとりながら再生している。すなわち、造られて行く社会がたとえ新しいものであつても、それは旧いものと新しいものが併存し、共に内在する特殊な社会を意味する。このことはまた旧い社会における歴史が、この新しい社会において圧縮されながら弯曲した形をとつて存続して行くことを意味する。

この様な特色をもつた開拓社会にとつて何よりも重要なものは、数少ない成員の相互依存・相互作用によつてもたらされる社会的統一であろう。所詮、開拓社会が移住的混成的要素をもつて合成された設営社会であつてみれば、そこに統一をもたらす契機が介在しなくては其の発展を期することは出来ない。この種の社会的統一のない所に、社会の存続はなく、社会のない所に、人の生活の営みも、開拓農家の営農もあり得ないのである。

しかるに、開拓社会における社会的統一は、この社会にとつて最も必要なものであるにも拘らず、必ずしもその統一性は十分なものと云えない。それはこの社会が極めて若く、むしろ「発端としての社会」という性格をもっている為に、強力な社会的統一をもたらす様な独自の社会的慣習や規範体系を持たず、未形成であるからである。しかし、すべての開拓社会が常に絶対的にその社会的統一の点において脆弱であり、低位であるとは限らない。かの屯田兵村におけるが如く、社会的統一の強かつた開拓社会もある。またかつて北海道に存在した大農場中にも社会的統一の強かつた集団がある。これ等のことを想起すれば、開拓社会はむしろ窮極的な社会的統一を求めて苦悶して行かねばならない社会であるとも云える。従つて開拓社会におけるこれ等の特色、就中その社会的統一の脆弱性は、必ずしも開拓社会にとつて必然的なものでも絶対的なものでもないと思われる。

個々の開拓社会には、それぞれ何等かの関心や価値体系を中核とした統一が存在する筈であつて、この中核を失う時、開拓社会は社会的に disorganize するおそれが生ずるが、現に存在した将来発展する可能性をもつた開拓社会には程度の差こそあれ、そこに当然何等かの社会的統一が存在するものと考えられる。開拓農家の中にはこの様な社会的統一にむかつて積極的に努力するものもあれば、無関心、無気力なものもある。しかし、いずれにせよ開拓社会は一方においてこの様な社会的統一の実現にむかつて闘わねばならぬという宿命的な課題をもつと共に、他方において苛酷な自然、恵まれない社会的経済的条件に対して、これと闘い、それを克服しなければならないという2重の課題を自から担つている。

かくして、社会的統一こそは開拓社会の存続、発展の上からして最も重要な課題であり、これなくして開拓社会は真の社会たり得ない。しかるにこの社会的統一なるものは、

その社会が生み出す社会連帯 (social solidarity) と密接不可分の関聯をもっているのである。何故ならば、相互作用する成員間に純粹の統一性をあたえ、これに凝集をもたらすものこそこの連帯に外ならないからである。社会連帯はまだ幼い開拓社会にとつて最も大切にされなければならない要素である。またそれはこの社会の構成が移住的混成的合成的性格をもつものであればあるだけに一層尊重されなければならない要素でもある。もとより社会連帯は各々の社会内部において生み出される社会の産物でありまた結果でもあつて、他から与えられるものではない。むしろ、自から対しても、他に対しても、自己の社会の統一性と結合の強弱をしめすものがこの社会連帯であり、これこそ社会的統一の表徴としての意義をもつものにほかならない。

この様な理由からして社会連帯は開拓社会における社会的統一を判ずる一つの基準としての意義をもっており、これを通じて開拓社会における社会的統一の程度やその実相を説明することが可能となる。本稿において、開拓社会における連帯性を、とくに課題として取り上げた所以もまたここにある。

麟へつて、戦後の北海道における現実社会としての開拓社会を概観するに、そこには既に論じた如き社会的統一性の点において悩む開拓地が少くない。経済的な面において一応の成果をおさめた根釧のパイロット、ファームですら、この社会的統一の点において多くの問題を孕み、現地はもとより、関係者を憂慮させている。しかもこれと同様或いはそれ以上の問題をもつ開拓地が、北海道の各地に多数散在している。現在北海道には、約1,200の開拓地区が存在し、それぞれ開拓社会を形成している。その中には既存農村の延長としての増反的な開拓地区なぞもあるが、これ等のものを別としても、この中には実に230に及ぶ「不振開拓地区」と称せられる開拓地がある。この不振開拓地区と云われるものの中には、社会的な問題ももち、これに悩むものが少くない。また不振地区と云われない地区においても、その社会的統一を中心とした社会的問題に苦慮しているものも少くない。これは現在残っている開拓地についてのことであるが、この外、既に社会的に崩壊し消滅した開拓地についても同様である。

次に、移住・入植という点についてみると戦後、昭和33年までに43,600戸の農家が北海道の開拓地に入植した。しかしこの中には府県からの移住者もあつたりした為、北海道の風土になじまず、また未完成な開拓社会における生活に耐え得ず離脱した農家の数もまた決して少なくなく、その数は15,000戸を上回ると云われている。現在の開拓農家の総戸数は約28,600戸であつて結局総入植戸数の34%は脱落したことになる。そして28,600戸の開拓農家のうち約7,000戸の開拓農家が、所謂不振地区において日々の生活に喘いでい

る実情にある。

ところで、これ等の開拓農家が北海道の農村において占める比重はどうかというに、それは決して軽いものではない。開拓農家の総戸数は北海道全体の農家戸数の12%を占め、開拓農家の耕地面積は全道総耕地面積の実に21%を占めているのである。

このような状況からして、北海道の開拓農業が北海道農業において占める地位も決して低いものではないために、その重要性が各方面において認められ、その安定策をめぐって種々なる論議が展開されてきた。またこれにともなう立法上の措置をはじめ、行政上の諸制度の制定、財政・金融面における助成の促進、調査研究等々、種々なる対策が講ぜられてきた。これ等の事は本道の開拓農業の重要性からしてまことに当然のことからである。就中、開拓農家の営農に関する研究は案外手広く行われており、その経済的側面についての研究には注目すべきものがある。また開拓農業を国民経済的な観点より考察した論議も活発に展開されており、これ等の論議を無視することは許されない。

しかし乍ら、開拓農家をめぐる諸問題は、問題を経済的の局面のみに限定することによつて解消するものではない。経済的の局面就中その営農的側面はあくまでも開拓農家にとつての1つの側面にすぎず、その基底にはこれをささえて行く彼等の生活がある。それ故に、たとえ、彼等の経済を論じ、営農を考へるにしても、常に彼等が苦しみ悩んでいる現実の開拓農家の生活を前提とし、これを基底におかなくては其の意味を喪失すると思われる。またその経済偏向的な考え方のもつ欠陥を補う上からしても、開拓農家の現実生活について省察を試みることは当然必要とされる。

かかる意味からして、開拓農家の生活の場であり、その共存の場である開拓社会一般についての考察の必要性が生じてくるのである。

開拓社会の研究には、以上の如き実質的な利益があるが、そこにはまだ学問的にも極めて重要な意義がある。第1にこの社会は「発端としての社会」という今日の既存社会からすれば極めて珍しい性格を持つている。しかもその社会過程は短かい歴史の中に圧縮されていて極めて把えやすい。又、その構造の単純さは、この社会の研究を比較的容易なものとするばかりでなく、これによつて社会を貫ぬく諸法則を最もシンプルな形において追求することが出来る。そこには複雑にして難解な、そこに住む人のみが理解しうる様に特殊な意味の社会性は稀薄である。

第2にこの社会は先にも触れた如く、人為的計画的に設営された人工の社会でもある。荒蕪たる荒野に乳と蜜との流れる里を造ろうとするその計画の中には、ありとあらゆる人智が結集される。人類の叡智がこの社会に集中されその将来を支配していくのである。こ

のことはこの社会が人智の正当性を実験しまた実証する場所であることを意味している。しかも失敗すれば多くの人々を不幸におとし入れ、時にはその生涯を台なしにしてしまうという、極めて危険な、2度とやり直しのきかない試練の果される所でもある。それは開拓者自身にとつての試練の場であると共に、あらゆる人智の提供者にとつても極めて重要な実験の場でもある。その人智の内容が科学的知識であるとすれば、開拓社会は科学的な実験の果される場所以外の何ものでもない。これ等の点にこの社会の研究のもつ第2の学問的意義が認められる。

第3に、この開拓社会は、一般社会と一定の関聯をもちながらも、あく迄もその特殊形態としての性格を多分にもつている。開拓社会は農村界の1部であり、農村社会の1部をなすものには違いないが、既存農村とも異なり、むしろ都市に類似した局面をもちながら、また都市とも同一視しえないという特異性をもつている。

従つて、あく迄も開拓社会は1つの新しい類型的な社会とみざるを得ない。もし然りとすなれば、この特殊社会についての研究は、一般社会の研究に対して極めて貴重な素材を提供し、これに寄与するものと考えられる。極めてシンプルな構造をもちながらも旧いものと新しいものとを併有するこの社会の現実、そこから様々なる原理を導き出し、また様々なる原理を実証するのに最も適した素材と云わねばならない。

以上の如く、開拓農家によつて構成される開拓社会の研究には、實際的な面における意義と、屢々忘れられ勝な学問的面上における意義との2つがある。

しかるに、開拓社会を直接対象とした研究、就中科学的方法によつて社会学的に研究した例についてみるに、その例は全く屈指にも及ばない。隣接的な領域では、開拓農家の営農研究をはじめ、行政制度論、人口論、社会誌的考察をはじめ、人文地理学的研究や集落形態論め展開等々が存在する。しかし北海道の開拓社会についての純社会学的考察となる⁽²⁾と、その例は極めて少ない。

尤も、農村社会学における研究の中には、部分的にこれに触れたものはある。しかしこれも体系的なものは殆んど皆無であつて、多くを期待することは出来ない。また開拓社会も農村社会の一部であるから、農村社会(既存の)を支配する原理或いは歴史的な意味における日本社会を理解する原理をもつて、開拓社会の理解に当てはめることも不可能ではない、しかし、これも応々にして、既に出来上つている原理を開拓社会にあてはめ、それがどこまで適合するかを論ずるにすぎない場合が少くない。

前述の如く、開拓社会を既存農村と同日に論ずることは許されない。開拓社会の研究に当つては勿論、既存の様々なる社会理論を参考にしなければならぬが、これと共に現実の

開拓社会そのものを対象とし、そこに妥当性の認められる科学的方法を適用して独自の考察を深めて行くことが肝要である。

本稿における研究はこの様な意図に立脚するものであり、ここで私は、開拓社会における1つの社会的特性を、この社会における最小事実との関聯において把握し、またこの最小事実に戻元して実証的に把える方法をとる。

その1つの特性として、とくに「連帯性」をとり上げた理由は、既にのべた所であるが、ここで私は社会連帯を社会における最小事実としての社会的統一の標識と仮定する。換言すれば社会連帯をもつて開拓社会における最小事実と仮定するのである。これは1つの仮定であるが、しかしこの仮説の設定には理由がある。その理由は社会連帯をめぐる多くの学説中に求められ、これによつて仮説設定の根拠と可能性が与えられる。その例として、ここでは R.M. Maclver の説をあげておく。彼は、この社会連帯(social solidarity)について、

「人をして社会の成員たらしめ、又最後の手段として、人々が互に社会を形成せしめるものこそ、この連帯性 (solidarity) に外ならない」⁽³⁾

と述べている。このことは連帯性こそあらゆる社会にとつて必須不可欠の社会的要件であり、共通の基本的事実と認められる所謂、最小事実たることを強調したものと云わねばならない。同様の主旨の命題が他の学者によつても多数掲げられているが、この命題は論理上、開拓社会にも適用可能であり、ここに仮説設定の根拠を求めることが出来る。この最小事実としての連帯性を媒介にすることによつて、開拓社会の深層に及ぶ理解を求めて行こうとするのが本研究における方法である。このような様式は、原理的には E. Durkheim が「威圧」を、J.G. Tarde が「模倣」を、そして、F.H. Giddings が「同類意識」を、更に G. Simmel が「心的相互作用」をもつてそれぞれ社会の最小事実とし、これを社会学の独自の対象として考察を深めたことと軌を一にする。

ただ、私はここでこの連帯性の実態を出来るだけ客観的に把え、また分析するために、次の如き手段をとり入れることが必要と考えた、即ち

(1) 開拓農家の連帯性を客観的に観察把握する為に、とくに「尺度化」の方法をとり入れる。

(2) 開拓農家の相互依存相互作用の所産としての連帯性を、開拓農家のもつ意識構造の側面より計量的に把える。

(3) 測定結果を可及的に正確に分析し、またその精度を高めるために、あらたに連帯性を単位化する方式をたて、これを「連帯度」と名づけて、これによる分析を進める。

(4) 連帯性と他の社会的経済的特性との関連及び測定結果と既存の学説との関連を明らかにする。

(5) 開拓社会における連帯性の特色の類型化とその原因を考察する。

以上である。そしてこれがこの研究における研究様式の大綱である。

ここで明らかにしなければならぬ問題は、連帯性の把握に当つて何故に「尺度化」の方法をとり入れたかという点についてである。それには2つの中核的な理由と1つの附随的な理由がある。尺度化の方法による現実社会の研究が遅れており、これを開拓社会に適用した例の如きは、我が国では殆んど皆無であるから、ここで試験的な試みを展開するというのが附随的な理由である。これに対し、中核的な理由というのは、この方法が科学的認識の方法即ち研究手段として果して、どれだけ価値が認められるかということ、またこれが対象の特性に相応した方法として有効であるかどうかという2つの点に関連している。そこで、この中核的な理由について少しく説明を加える。

社会学における尺度化の方法論的是非については、既に我が国においても若干の論議が展開されている。その一々の論議については、しばらくおくとしても、これ等の論議は、この方法の価値を疑い、これを否認するものと、これを一定の限界内において容認するものとに分かれる。私は後者の立場をとるものであり、社会事象についての尺度化に或る限度内における実質的な意義を認める。一口に云えば尺度化による認識とは、その対象の社会的事実を、既に構成されてしまつている概念の枠組の中に投入して説明するものではなく、既存の諸概念や理論を仮説或いは前提とし、これに嚮導されることによつて、或る客観的に妥当な基準を求め、この基準を標識化することによつて事象の特性を量的変数におきかえ、これについての客観的な観察を展開する手法であると考え。そこでは質の量への射換が試みられるが、このことは科学的認識の方法として必要欠くべからざる要件である。これによつて社会事象を或る客観化された水準から整序することが出来るばかりでなく、観察者の主観を極力排除して、事実に対する正しい認識に接近する基調が求められる。もとより、これだけで社会的事実についての科学的認識が終るものではなく、この事実に対する「解釈」の仕事がこれに加えられなくてはならない。

又これによつて捉えられた事実についての様々なる特性を「統合」という仕事も果されなくてはならない。いずれにしても、この様な一連の操作を経て到達した認識は、たとえ如何に単純なものであつても、科学的には動かすべからざる事実についての観察的知識であつて、他の知識とは区別するべきものである。それは常に何等かの仮説を前提として出発するものであるから、その仮説の定立が許される限りに於て正しいとされるとい

う限界と、相対性とがつきまとう。場合によっては定立された仮説の正当性が疑われる結果をもたらすこともあるが、このことはかえって尺度化の方法が事実に対して忠実であったことを意味する。その仮説は棄却されて、別の命題がこれに代つて定立されることになる。かくして一定の仮説を前提として出発した尺度化による認識の方法は科学的方法として意義をもつことになる。

このことを社会連帯について云えば、成員の相互依存、相互作用の所産としての連帯性は、これが成員の意識構造に反映する必然性をもつた社会においては、1つの社会的心像という形をとつて把えられることになるから、社会的心像を把えることによつて、当該社会における連帯性の帰趨を明らかにすることが出来る。しかし、この様な心像の実相は、抽象的な意味においては別としても、具体的には必ずしも直接的に把握することは出来ない。そこで何ものかをその為の媒介に求めなくてはならないことになるが、この媒介は、社会連帯をめぐる既存の理論の中から求めることが出来る筈である。

本稿においては、米国の D.R. Fessler が設定した Community Solidarity の概念を容認し、これに従つて尺度化の方法を進めているが、そこに内在する尺度化の可能性は、上述した媒介を一次的な rural community における「共通の価値観念や共通の規範体系」(common value and norm system) に求めることによつて与えられている。即ち所与の社会(一次的共同社会)において一般的に容認されている共通の価値観念や規範体系に対して、その成員が肯定・否定の局面において如何なる一致性があるか、そのままとりの心像を尋求することによつて連帯性は尺度化され得ることになるのである。具体的には、この媒介としての共通の価値観念や規範体系が、連帯概念に還元された形において標識化され、これを通じて所与の社会におけるままとりの心像を解剖して行くことになる。

ここに連帯性を尺度化によつて把えようとする場合における可能性の論拠があるが、この可能性はあく迄も一次的な接触をもつて優位とする primary rural community に於てのみ認められることであつて、都市における連帯性の測定の如きには適用出来ない。ただし、都市における連帯性は農村におけるそれと異なつた原理によつて支配されているからである。しかし開拓社会は明らかに primary rural community の範疇に入るものであるから、Fessler の上述の命題は、開拓社会にも適用可能となるわけである。

尺度化の方法をとつた今1つの理由は、これとの関聯における開拓社会の本質的特色にある。質の量への転換をとまなう尺度化の方法は、当然対象の等質性を要求する。各々の開拓社会が質的に全く異つた特殊な意味の世界であることは、或る程度容認されるとしても、それぞれ本質的に異なることはあり得ないし、またその様な場合は尺度化は無意味なも

のとなる。しかし北海道に現存する開拓部落は、たとえ移住者による混成旅团的性格をもつとしても、府県の農村や村落共同体にみられる様な特殊な社会的異質性の強さは殆んどみられない。極めて等質的と云われているアメリカの農村社会に最も類似しているのが本道の農村であり、この点において開拓社会もまたその例外ではない。むしろ北海道の農村こそ府県とはことなる別の類型に属する社会であつて、海外のそれに共通する可成り普遍的な性格が認められ、かえつて、府県の方が特殊な性格をもつた農村と云わねばならない。

それ故に、等質的な点において共通性をもつ本道の開拓社会にアメリカで構成された尺度化の方式をとり入れることは、詳細な点においては問題があるとしても、基本的には必ずしも暴挙とは云い得ない。むしろ、北海道の開拓社会の特性に最も相応した方法の1つがこの尺度化の方法であるとも云えるのであつて、北海道を素材にするのでなければこの方法はとり難いかも知れない。

これを要するに、認識の方法は当然対象の特性に合致したものでなくてはならないが、以上述べた理由により、この尺度の方法は本道の開拓社会の連帯性を把えるに当つて、その対象の特性に適合した1方法として容認されうと思われる。

尺度化をめぐる基本的問題については、ここでは以上の論議にとどめるが、次に必要なことは、この研究様式に対応した具体的な研究手段を確定することである。

この個々の研究手段については、第2章以下においてその都度明らかにする形をとつていゝが、今ここでその要旨を取りまとめてみると、次の如くである。

第2章においては、連帯性の測定方式の具体的な例について検討する。ここでは家族の社会的連帯性の尺度化を試みた L.T. Jansen の方式と、上述した D.R. Fessler のそれとについて考察する。そして Jansen の説を参考にしながら Fessler の方式をとり入れる所以を明らかにする。

第3、4章においては、調査対象となる開拓社会の選定の問題を取扱う。また実測の予備的操作として、Fessler の方式に対する必要な修正を試みる。就中、尺度文章の修正は国情を異にする関係からして必須である。次にかくして構成された尺度を統計学的に管理し、妥当性、信頼度等を中心とした検定を試みる。とくに信頼度については、尺度の特殊性から来る制約を或る程度まぬがれる為に、別法を講ずる。又測定結果の分析を容易ならしめ、その精度を高めるために連帯性の単位化を試み、新単位、「連帯度」の設定について触れる。

かくして、構成され修正されて出来上つた尺度によつて、北海道の8つの開拓社会(部

落という表現をとつているが、小部落単位で数えると地点数は10となり、地域社会としてみると8つになる)と4つの既存農村に適用し、実測した結果を明らかにする。

第5章においては、測定結果を分析して、開拓社会における連帯性の特性を明らかにする様々の分析を試みる。主に「連帯度」をよりどころとして、測定結果そのものの中に内在する内延的課題と、外的な特性とクロスさせることによつて求められる外延的課題との2つに分けて分析する。これによつて、(a)開拓社会における農家の連帯性をめぐる共通の特色、(b)連帯性をめぐるエリア別特色、(c)部落別特色、(d)階層別特色、(e)入植後の経過期間の相違による連帯性の特色等々の問題を明らかにする。なお、階層別連帯性の特性の分析に当つては、農家の Socio-economic Status の測定結果を素材として、その階層的地位を把握し、上層中層下層の各層における連帯性の特色を、開拓、既存の両農村社会について比較検討する方法をとる。

連帯性については、この外取り上げるべき多くの課題が残されており、またその手段もこれに限られるものではないと思われる。ことに尺度化をめぐる連帯性の概念と、連帯性をめぐる学説との関連の問題については相当深い考察が要求される。

この問題は、極めて重要であるけれども、開拓社会における連帯性そのものについての課題を意味するものではないので、これら一連の問題については、別途に取扱うことにした。又、開拓社会における連帯性の測定結果を、既存の連帯理論と対決させ、理論の正当性を実証したり、またその虚偽性を指摘したりする問題も残されている。しかし、限られた資料で理論の正当性や虚偽性を軽々に指摘することは出来ないで、この点についても慎重を期し、後日の研究にゆだねることにした。ただ問題点として指摘しなければならぬ点については文中にこれを示唆することにした。

以上本章においては、開拓社会における農家の連帯性について、この研究のもつ意義と方法について、その大綱を明らかにした。未開拓領域とも云うべき開拓社会についての社会学的調査研究は極めて困難なものがあり、連帯性の研究だけでも、既に8年の才月を費した。実態調査はもとより、集計・管理・分析に要した労力は全く龐大なものであつた。これ等の過程を顧みて、事実の確認のせつなさを痛感せざるを得ないが、それにも拘らず、私はこの種の手法による社会学的研究を将来一層発展させて、従来の研究における欠を補うと共に開拓社会の理解と進歩に寄与したいと思つている。

註 1 高倉新一郎著「北海道開発の過程」(北海道総合開発の諸問題)ダイヤモンド社、P. 1, 昭和34年。

註 2 北海道の開拓農家或いは開拓部落を社会学的に考察した文献としては、拙著を

除けば、その主なるものとしては次の3つをあげるにとどまる。

塚本哲人、布施鉄治共著「開拓農家の社会と生活の構造」、(開拓農家実態総合調査報告書、第四章、不振開拓農家総合対策資料)、北海道庁、昭和34年1月、54～80頁。

布施鉄治著「戦後におけるムラの形成過程と村落共同化」(村落共同体論の展開、村落社会研究会編、第三章所載)時潮社、1959年、52～86頁。

北海道新聞社、株式会社電通編、「昭和34年度 農村調査報告書」昭和34年、電通北海道支社、(第一部～第七部)。尚、北海道の農地開発関係の資料は比較的豊富であるが、北海道庁編「北海道の農地開発—その現状と問題点—」昭和35年1月、は最も参考になつた。

- 註 3 R.M. MacIver, "Society", A Textbook of Sociology, Chap. II, P. 32, [Farrar and Rinehart, Inc., New York] 1937.

第2章 社会的連帯性の尺度化方式

序 説

前章において、開拓社会における農家の社会的連帯性を尺度化の方法によつて調査、分析する意義についてのべた。また連帯性の現象領域としての開拓社会の一般的特性や、社会的連帯性がこの社会においても意義について明らかにした。これ等の問題は既述の如く、本研究における問題の提起を意味すると共に、その研究様式を規定するものでもある。

これによつて、先ず第1に試みなければならぬことは、開拓社会における連帯性を測定的に把握するのに最も適した尺度化の方式を究明することである。その方式は内外における前例に求めてさしつかえない。ところが、尺度化によるこの種の手法の研究は、米国において最もよく発達しているので、ここではその典型的な例として、Jansen の方式と Fessler の方式とを明らかにする。最も、Jansen のそれは、家族の連帯性についての尺度化の方式を明らかにしたものであつて、参考になるところが少くないが、これを直接、開拓社会における農家の連帯性の測定に用いるわけには行かない。これに対して、Fessler の方式は、primary rural community について構成された community solidarity の測定方式であるので、この方式の方が、開拓社会への適用に最も適合していると認められる。かかる理由から、本研究では Fessler 方式の尺度を利用する建前をとるが、しかし、所詮彼の尺度は国情を異にする米国の社会において構成されたものであるから、これが北海道の開拓社会に適用するためには、これに最小限度の修正を加えなければならない。本稿ではこの最終尺度の構成の問題については次章において論ずることとし、さしあたり、Jansen と Fessler の尺度化の方式について検討する。

第1節 Jansen の「家族の連帯性」の測定方式

社会的連帯性が、人間の社会生活における相互依存的関係の或る「状態」であり、1つの「社会的事実」である以上、この状態や事実についての特性を客観的に把握しようと努めることは可能である。とりわけこの連帯という事象を或る特定の性質に整理して、そこから見出される種々なる状態の相違を、数の関係におきかえて表示することが出来れば、極めて客観的に特性を把握することになるであろう。勿論、それは無条件に可能なことで

はなく、そこには何等かの限界があると思われる。たとえば、意味的に特殊なものについての量えの転換の困難性、単位化、標識化による事実に対する一面的抽象性等々は、この種の手法に一応の限界をあたえる障壁の例である。またこの種の手法は極めて微視的になるが故に、大局的に統合するにはどうしたらよいかという難問も残る。

これ等の困難な問題を前提としながらも、Jansen と Fessler とはこの手法のもつ一般的な限界を可及的に拡張し、その範囲で問題を可成り有効に処理している。就中、Jansen の手法は、家族（一般）の内部における連帯性を極めてたくみに尺度化する方式を明らかにしたものとして、注目に値するものがある。

Washington 大学の Luther T. Jansen は 1952 年 9 月に開催されたアメリカ社会学会の年次大会において、家族の連帯性を測定する方式と、これを適用した結果の分析について注目に値する発表を行つた。その要旨は American Sociological Review(1952)⁽¹⁾ に要約されているので、これを通じて彼の所論の大綱を考察してみる。

家族の連帯性を尺度化するに当つて、Jansen は家族に関する多くの社会学的研究を検討し、その中に或る家族員の方が他の家族員よりも、1つの集団としてより緊密に相互作用するという、家族における成員の相互作用に相違の存在することを発見した。この家族内における相互作用の相違は、家族の統一性 (family unity)、家族の凝集力 (family coherence) 家族の統合 (family integration) と家族の連帯性 (family solidarity) の程度の相違によつて齟らされるものであるとする。従つて相互作用と連帯性とは密接な関係があるので、この相互作用の局面を連帯性との関係において尺度化する時、家族の連帯性の測定は可能になるというのである。そこでは家族の相互作用の相違ということが尺度化の前提或いは基底におかれていることになるが、この家族内における相互作用の相違は次の如きつの範疇に分かれる。

- (1) 家族員相互間の相互作用 (interaction) の程度が、各員を互に惹きつけ合つて一体をなすほど強いもの、或いは家族員相互の社会的距離 (social distance) が非常に短く近いもの。
- (2) 連帯性の観察の場としての家族構成員の相互作用が特殊なタイクをなすもの。
- (3) 連帯性を結果的に齟らす家族員の結合の紐帯 (bonds, ties) の相違によるもの。

以上である。

所で連帯性をめぐる理論の中には、一般に人々の間に「共通の関心」(common interest) (common activity) その他の相互作用が成り立つのは個々の構成員を一体の関係に結びつ (rest) や「共同活動」ける所の紐帯が存在するからだという学説がある。例えば F.H.

Gidding, R.C. Angell, M. Nimokoff 等の説がそれである。しかし Jansen は、この様な家族に結合を齎らす紐帯について観察するのではなく、前述した相互作用の3つの範疇のうちの、2つの部類に属する相互作用めぐつて、家族の連帯性を測定する方式を展開しようとしている。

これによつて連帯性の尺度化をねらう為には、次の3つの段階を踏まねばならない、即ち

- (1) 連帯性の観察を可能ならしめる相互作用の category を選択すること。
- (2) 観察の対象である連帯性を測定する方式をたてること。
- (3) 或る種の相互作用によつて測定的に把えた連帯性と、それ以外の相互作用を通じて把えた連帯性との関聯について検討すること。以上である。

かくして、Jansen は、家族の連帯性を測定するに当つて、その前提として、以上の3つの事項についての考察を必須とみている。しからば各事項について彼はどの様な考察を展開しているであろうか。次にその概要を明らかにしてみる。

Ⅰ 相互作用の category の選択

先ず家族の連帯を相互作用を通じて把えようとする場合、数ある相互作用の categoryの中から、如何なるものを選択したらよいかが問題となる。この点について Jansen は、Angell, Carvan 及び Rank の理論にもとづいて、アイオワ州における家族の統合力を測定した R. Hill の方式と、この R. Hill と並んで、夫婦の統合(和合)を分析した H. Mower 等の方式を参考とし、その方法を折衷することによつて、連帯性を把えるに役立つ8種類のタイプの相互作用の範疇を確定した。即ち、

- (1) 相互「同意」による相互作用 (agreement with each other)。
 - (2) 相互「協同」による相互作用 (cooperation with each other)。
 - (3) 相互「福祉」に対する関心による相互作用 (concern for each other's welfare)。
 - (4) 相互「連帯」による相互作用、即ち、各人が互に associate している場合の相互作用 (enjoyment of association with each other)。
 - (5) 相互「愛情」による相互作用 (affection of each other)。
 - (6) 相互「尊敬」或いは「崇拜」による相互作用 (esteem or admiration for each other)。
 - (7) 相互「利害」による相互作用 (interest in each other)。
 - (8) 相互「信頼」或いは「信用」による相互作用 (confidence or trust in each other)。
- がそれである。

これ等のタイプの相互作用は、いずれも対人的 (inter-personal) である所に特色があり、group symbols (集団象徴) によるものではない。この8つの相互作用の範疇は前述した如く、他の学者の説から誘導したものである。例えば、Angell は1930年に、経済恐慌が50のアメリカ家族に及ぼした影響を明らかにし、経済的危機に対する家族の適合性 (adaptability) と統合 (integration) の相違にもとづく家族の相互作用の相違を強調し、結局、連帯性の強い家族は、危機が家族に対して作用する瓦解的作用に対して、強い抵抗をしめし、連帯性の弱い家族の場合は、弱い抵抗しかしめさないという命題を掲げている。この命題は、統合と適合という2つの相互作用の類型が、危機のもたらす崩壊的作用に対する抵抗手段となつてゐることを物語つている。又、危機そのものが、この場合経済恐慌という要素を内容としているが、この様な危機に対して家族に凝集性と団結とをもたらすものが、家族内における共同関心 (common interest) 愛情 (affection) 及び経済的相互依存 (economic interdependence) であり、これが最も支配的に作用するものであるとすれば、これ等のものから我々は家族の連帯性の標識となるものを容易に撰択することが出来ることになる。

この外、Cavan 及び Ranck の理論も、この撰択の問題に関聯をもつている。即ち、Cavan, Ranck によれば、家族に統一 (unity) をもたらす要素は、次の如きものだという。

- (1) 家族目的の統一 (unity in family objectives)。
- (2) 集団としての家族における善行に対する成員の人格的関心の従属 (subordination of personal interests to the good of the family as a group)。
- (3) 家族の理想に対する凝集 (adherence to family ideas)。
- (4) 各家族員の関心を充足させる家族の能力 (capacity of the family to satisfy within the family circle to personal interests of its members)。

これ等の要素に対して、更に Cavan 及び Ranck は家族の互恵的役割と家族員相互の尊敬容度 (esteem) の存在が、統一家族の特色を規定づけるものであるとしている。又、Cavan は家族の統合力を測定する方式を創定しているが、その後 Hill は彼のスケールを用いてアイオワ州における135の家族の統合力の測定を実施している。Jansen はこの実測を注目しているが、今Hill が採択した尺度項目についてその内容を検討してみると、次の如く、5つの項目より成り立つている。

- (1) 愛情の程度 (degree of affection)。
- (2) 家族員相互間の共同活動の程度 (amount of joint activity of family members)。

(3) 家族の諸目的を達成するために犠牲になる好意の程度 (willingness to sacrifice to attain family objections)。

(4) 一体感或いは家族のプライド (esprit de corps, family pride)。

(5) 連帯性のあらわされる程度 (degree to which solidarity is present)。

以上の如く、Cavan の家族の統合力の測定度尺度は、5つの項目から構成されている。しかし、この尺度化の基準には若干の問題があつた。例えば、数個の項目中には、どちらかと云えば1つの項目に包括され得るものがあるのがそれであり、又、尺度項目の質問調査における questionnaire をどの様に作成したらよいかかわからないということ、また更には、この尺度項目を用いて測定した場合における各項目と全体との total dynamic stability score 即ち「安定度」(各項の全体に対する安定度)を相関係数によつてあらわしてみると $r = .19$ から $r = .77$ までにわたつて分布しており、極めて安定性に欠けるといふ欠陥が L. Dmigan によつて指摘されたことなどが、その主なる例である。

このような難点があるために Jansen は直接 Cavan の項目を撰択しなかつた。それよりも彼は、Angell-Cavan-Hill の3者によつて試みられた統合力の測定方式に基いて夫婦の統合性の測定、分析を試みた H. Mowser の尺度方式の中から、とくに重要な対人関係についての若干の項目に注目をよせ、これを自己の8つの項目範疇の中に投合した。

以上概述した方法によつて Jansen は家族の連帯性を測定するに当つて取り入れるべき基礎項目の撰択を試みたが、かくして出来上つた上述の8つの相互作用の範疇に対し、彼はこれを満足させる約60の質問調査文(項目)を作成した。その詳細については不明であるが、彼はこの60の質問調査項目を Washington 大学の50名よりなる学生に提示し、これを分類させてみた。そして、その分類の結果が、果して彼が最初に設定した8つの範疇と一致するかどうかをテストしてみた。その結果、質問文に曖昧な内容のものがあることが発見されたので、当該文章を除去し、曖昧な性格を出来るだけ掃拭した。またこれを一層徹底させる為に、彼は文章に対する応答(反応)の様式を、次の如き要領で5つの様式に固定する方針をとつた。

例えば「何にお金を使うことが一番大切かということについて、家族の中で意見の一致が生じますか」という質問文章 (questionnaire) に対して、

(1) agree completely (完全な同意あり)。

(2) agree very closely (やや完全な同意あり)。

(3) agree fairly well (一応の同意あり)。

(4) disagree somewhat (やや不一致)。

(5) disagree very much (全然不一致)。

のいずれかの category に応答様式を固定させるのである。

かくして項目の反応をめぐる曖昧性の問題を処理した後、Jansen は、この尺度が果して普通一般の家族の場合と、病人家族の如き特殊な家族との場合ではどの様に異つた反応をしめすかを明らかにしようとし、その為の予備的測定を行つた。その結果を分析した所によると、この尺度は、有効と認められる相当の理由があつたので、これによつて、彼は家族における連帯性測定方式を標準化することにした。

以上が Jansen の家族連帯性の尺度化の前提操作の概要であるが、次に行はねばならぬことは、スケールの統計学的吟味の問題であらう。

Ⅱ スケールの設定とその吟味

Jansen は、既にのべた相互作用の 8 つの範疇を、連帯性を表示する 8 つの indicator と名づけ、各 indicator について得られた反応に基いて、各々の indicator の scalability を吟味する操作を施している。この吟味に際して Jansen は普通の scale analysis の方法を用い、先ず項目の各々に対して試行荷重 (trial weights) を与え、これに基いて算出された coefficients of reproducibility によつて項目の検定を行つている。その結果、8 つの indicator におけるその指数はいずれも 90 %乃至はそれ以上であつたので、更にこれを H technique による検定に施した。その結果は 99 % という指数を得ることが出来たので、尺度全体としてのバランスがあると確認された。

以上の吟味は各 indicator と全体との関係についてなされたものであるが、各 indicator 相互の間では如何なる関係があるかを検討する必要がある。彼はこの問題を corrected coefficients of contingency によつて検討したところ、その係数は、最低が「各人相互の同意と相互福祉についての関心との間にみられる相関々係」……0.56 であつて、

最高は「各人相互の協同と各人相互の福祉についての関心との間にみられる相関々係」0.74 となつてあらわれ、他の係数はすべてこの間に分布することが判つた。

このことは、彼によれば、これ等の標識 (indicator) が、

- (a) 連帯性測定の indicator として略々均等なる有効性を持つものであること、
- (b) 必ずしも絶対的とは云いえないとしても、一応これ等の indicator の間には極端な偏向や「むら」を形成していないこと、
- (c) indicator 相互間に複雑な重複がないから、このスケールによるスコアを総和し、

これをもつて家族連帯性のスコアに使用してさしつかえないこと、

(d) これ等の indicator には非類似性はあり得ず、どれも連帯性の測定目標にむかっていること、

等々の特性をもつものであることを意味するとしている。

更に彼はこのスケールの特性を一層手びろく把える為に、このスケールによる家族の連帯性の測定結果と Charles が行つた「夫婦調和度の調査表」(Marital Adjustment Schedule) による測定結果とを比較し、両者間の相関度の高いことを認めて、尺度の特性を明らかにしている。

尺度の「妥当性」(validity) と「信頼度」(reliability) の問題についても、彼はこの Charles 方式による夫婦の調和度の測定結果と、自分の家族連帯性の尺度による測定結果との双方を対比させ、両者間の相関比を求めることによつて、これを解決しようとしている。とくに注意を要することは、信頼度の検定に当つて折半法 (a split-half test) を用いることは適當ではないとして、これに代るに、夫と妻とのそれぞれの夫婦調和スコアの相関係数と、夫と妻のそれぞれの連帯性のスコアの相関係数とを比較し、間接的に信頼度を推定する方式をたてたことである。この方式によれば、連帯性のスコア相関の方が、夫婦調和スコアの相関よりも一般に高くなつて出なければならぬことになり、そうならなければ信頼度は疑われることになる。これを計算した所、その結果は、夫婦の調和スコアに於ける夫側のスコアと妻側におけるスコアとの相関係数は $r = 0.56$ と出、家族の連帯性のスコアに於ける夫側のスコアと妻側におけるスコアの相関比は $r = 0.70$ となつたという。従つて、この数値によつて上述の要件は充たされていることになるので信頼度の存在が証明されたことになる。

「妥当性」の検定についても、彼はこの両スケールに於けるスコアを素材に用いている。即ち、Jansen はこの点について「小供のいない夫婦」と「小供のある夫婦」との双方について上記の2つのスコアの相関がどの様にあらわれて来るかをみることによつて、この妥当性の検定をなし得るとしている。この手法は更に、家族連帯の測定スコアを、離婚の予測調査に含まれている質問項目に対する応答と対比させるやり方にも転換し得るとしている。

その詳細について、ここでは説明を省くが、いずれにせよこれ等2つの方式による妥当性の検定結果は、いずれもこの家族連帯についての測定スコアが妥当性を有するものであつたという。

以上の如く、Jansen は家族の連帯性を尺度化する為に、先ず、8つの相互作用の範疇

を理論的に認め、これをそれぞれ測定尺度の indicator (標識) に用い、これを満足させる尺度文章を作成した。そして各項目には荷重が施され、これに厳重な検定を施して、尺度の有効性を確認して尺度化を可能ならしめた。就中、妥当性と信頼度の検定方式には独特のものがあり、一貫して外的 factor による検定、即ち外的一致性による検定を試みたところに注目に値するものがあると思われる。

彼は、またこの家族連帯性の測定結果が家族における他の特性とどの様に関聯しているか、この問題についての分析を施している。今その主なる点について考察すると次の如くである。

Ⅲ 結果の分析—家族のサイズと連帯性との関係

妥当性の検定に当つて彼が使用した夫婦の和合度や「家庭的なこと」(familism) の傾向についての諸資料は、結果の分析に大いに活用された。ここでとくに興味に値することは、彼が「家族の連帯性と家族の小供の数及び年令との間に如何なる関係があるか」、「家族の連帯性と家族における権威の分布状態との間に如何なる関係があるか」この2つの点について考察したことである。

Jansen に依れば、この測定結果のしめす所によれば、家族の連帯性と家族の小供の数及び年令との間には反比例的関係があるという一般の仮説を支持しなければならないとされている。即ち、彼は家族のサイズを、

- (1) 小供のない家族
- (2) 小供1人の家族
- (3) 小供2～3人の家族
- (4) 小供4人或いはそれ以上の家族
- (5) 小供はあるがその全部が一緒にいない家族

という風に、5つの範疇に分け、各範疇に属する家族についての連帯性スコアの中心数を求め、その有意差を検定してみた。その結果、連帯スコアの中心数の最も高い家族の類型は(2)の「小供1人の家族」の範疇であり、最も低いものは「4人或いはそれ以上」のものであつたとしている。このことは家族のサイズ、即ち小供の数と家族の連帯性との間には反比例的な関係のあることを物語るものであり、小供が少いほど家族の連帯性は高くなるが、小供が非常に多かつたり、又反対に小供のない家族においては連帯性は決して高いものにはならないことを意味している。

次に年令と連帯性との関係についてみる。この関係を明らかにするために彼は、

- (1) 小供のない家族
- (2) 0才より6才迄の小供のある家族
- (3) 6才より12才迄の小供のある家族
- (4) 12才以上の小供がいる家族
- (5) 小供はあるが全然家にいない家族

という、5つの category に家族を分けた。この場合各範疇における連帯性のスコアの平均値は、前述した小供の数によつて分類した5つの範疇における連帯性の平均値と極めて類似しており、最も高い連帯性を保つ category は、「6才以下の小供のある家族」の範疇であり、最低は「12才以上の小供のある家族」であつたという。この2つの category における平均スコアの有意差は0.02程度で、そこには可成りの有意差が認められる。しかし乍ら「6才以上の小供のない家族」と「12才以上の小供のない家族」とのスコアの平均値には有意差がなかつたと述べている。

このことは、家族の連帯性が家族の構造によつて異なるものであることを意味する。即ち初子が生れると家族の連帯性は高いものとなり、その後小供の数が増したり、或いは年令もかさむにつれて、家族の連帯性は次第に低下して行くという一般的傾向の存在を指摘するものである。又小供が成長して家を去つてしまうと、再び幼児の時の様な高い連帯性を回復することは困難であるという特性が認められるのである。

次に、視軸をかえて「家族における権威の分布と連帯性との関係」についてみる。これについて Jansen は、家族における権威のとり方を所謂、日本風に云う「恐妻家」「停主関白」風の取り方に近いもので処理している。その質問文には「夫と妻とではどちらが関白(天下)か」とか「家族の行事を計画する場合、夫と妻とのどちらが決定するか」という意味のものが含まれている。彼は、この種の質問に対する反応を求めて、家族を次の3つの category に区分した。即ち、

- (1) 夫によつて支配されている方が好ましいとする家族
- (2) 夫婦ともにパラスがとれており、どちらにも偏らない所謂平等主義的家族
- (3) 妻が支配している方が好ましいとする家族

この3つの category に分けたのち、彼は更に各 category に属する家族の連帯スコアを取つて、その平均値を比較した。その結果、連帯性の最も高いのは(2)の所謂夫婦平等主義的家族 (the equalitarian family) であつた。しかし平均値の有意性からすると、(2)は(1)の「夫によつて支配される方が好ましい」とする家族よりも高くない。また(3)の「妻によつて支配される方が好ましい」とする家族の連帯スコアの平均値の有意性は他の2つ

の category における平均値の有意性よりも低く、僅か 0.10 程度であつたと述べている。

このことは、一方に於て、夫の支配或いは夫による切り廻しをもつて好ましいとする家族は、結局、妻がそれを好ましいと思つていることを意味し、従つて、この場合の夫婦の連帯性は当然強いわけであるが、他方、妻によつて切り廻わされている所謂「妻君天下」の家族は、夫の家族に対する結合に何等かの弛緩があるという徴候がみられると思われる。

Jansen の family solidary の尺度化の要領及びその分析結果は凡そ以上の如くである。彼のこの尺度化の要領は、本研究においても大いに参考に値するものがある。また結果の分析によつて彼が定立した家族における連帯性をめぐる様々なる命題は、家族の特性を実証的に把えた研究として注目に値する。もとより各命題はあくまで測定結果を前提としたものであつて絶対視することは出来ない。これと性格をことにする母集団を素材とした場合、そこに異つた結果が出れば、命題は或る程度修正しなければならないであらう。

しかし彼の家族の連帯性の尺度方式が稠密な理論的分析から出発し、それによつて得られた結論の嚮導によつて彼が 8 つの indicator を設定してこれをスケールとしたということ、及び統計学的検定の操作に當つて、従来の形式にこだわらず、大いに創意を容れて工夫したということは、尺度化の方式をたてようとする我々にとつて極めて参考に値するものがある。そればかりでなく結果の分析の手法にも見るべきものがあるので、その長所を充分吸収しておく必要があると思う。

第 2 節 Fessler の Community Solidarity の測定方式

前節において展開した Jansen の family solidarity の尺度化の方式は、一般に家族の成員が自己の所属する家族集団内部において如何なる連帯性を有するか、この点についての尺度化をねらうものであつた。その手法は前述の如く極めて興味に値する多くの特色が見られる。しかし乍ら、本研究において意図するところは、本稿冒頭においても触れた如く、開拓農家の家族内部における連帯性を取扱おうとするものではなく、開拓社会を構成する開拓農家が、自己の所属する社会集団の内部において、互に如何なる連帯性を保つているか、この点を解明しようとするところにある。従つて Jansen の手法は、たとえ開拓農家内部における連帯性を測定するには有効であるとしても、開拓社会内部における農家の社会的連帯性を測定する方式としては直接使用するわけにはゆかない。

しかるに Fessler の Community Solidarity の尺度の方式は、はじめから「社会的連帯」の測定を意図したものであるから、この方式を開拓社会に適用することは可成りの範囲まで許容されるものと思われる。もつとも、この尺度はもともとアメリカにおいて作られたものであるから、そこに、国情の差異からくる不適合性はまぬがれないと考えられる。しかし北海道の農村もアメリカ農村も比較的に事情のよく似た近代に作られた社会であるので、基本的には或る程度符合する可能性があるともいえる。

そこで本節においては、Fessler が設定した community solidarity の尺度化の要領について必要な考察を展開し、これに或る程度の修正を施して本研究において実測に使用する尺度の構成につとめることにする。

米国の Virginia Polytechnic Institute の所員 Donald R. Fessler は、1952年、「共同社会連帯の測定尺度の展開」(The Development of a Scale for Measuring Community Solidarity) と題する論文を発表した。⁽²⁾ この論文によれば、Fessler は社会的連帯性を1つの社会的事実として客観的に測定することを意図し、その為の尺度の構成につとめている。ここで彼は、連帯性を community solidarity という概念構成のもとに限定し、これを尺度化の目標とし、またその嚮導原理としている。

この論文において Fessler はこの community solidarity の概念に対して、所謂定義的表現を与えていないが、しかし、その所論の全体を通じて吟味すれば、彼がこの概念をどの様に考えているかを理解することが出来る。少くとも、この概念が Jansen の family solidarity のそれと異なるものであることは云う迄もない。しかし、この community solidarity の概念は、単に他の種類の solidarity から区別するという取扱い上の概念として作成されたものではなく、この概念の構成に当つては、それ相応の理論的な根拠がある。

彼はこの概念の基礎を E. T. Hiller が展開した primary rural community についての理論に求めている。従つて、この Hiller の理論が Fessler の尺度化の前提理論となり、また仮説となつているわけである。

Hiller によれば、

「一次的農村共同社会 (primary rural community) は、それ自身の社会行動に対して、一連の価値観念 (value) と共通の規範 (common norm) とをもつた社会集団として機能する」⁽³⁾

という命題が掲げられている。しかし、これだけの定義では、Hiller の社会理論に十分理解することは出来ないし、また Hiller の理論は、Fessler の尺度化の基調として重要な地位を占めるので、以下、Hiller の立場について若干の考察を進めてみる。

一口に言えば、Hiller は社会をば文化的に統合された集団であるとする立場に立つ文化社会学者である。1947年に公にした彼の “Social Relations and Structures ; a study in principles of sociology” と題する 1 書は、それ迄の彼の研究を統合した優れた労作の 1 つであるが、本書において彼は一貫してこの文化社会学的立場からの社会の理解をすすめている。

とりわけ、注目に値する議論の 1 つとして、ここで取り上げなければならぬところは、彼がその冒頭において society と community との両社会の概念的関連性を明らかにした点である。彼によれば、community は society の縮図の様なものであるから、society の研究に当つては community の研究を前提としなければならないとし、community は society を反映するものであるとしている。従つて society の理解に当つては、典型的な community を把えこれを素材とすることが望まれる訳であつて、彼はその例としてアメリカのノースウエスト州にある Owatonna という community に素材を求めて、実証的な研究を展開している。この Owatonna という community は、1855年に農業入植がなされた所であるが、その後今日まで約百年を経過するうちに City に迄発展した。彼はこの社会を素材として社会理論の定立につとめているのであるが、今この研究によつて彼が把えた社会の一般的特質を列挙してみると、次の如くである。

- (1) 了解或いは同類意識 (consensus or likemindedness) の能力 (可能性) がある。
- (2) 成員の相互依存 (interdependency) の存在。
- (3) Community 内に集団となつて住居が associate していること。
- (4) 達成させる機能、職業、享受する栄養のちがひによつて個人の地位や分け前がきまること。
- (5) 社会関係を調整する基準、規範が存在すること。

以上 5 つの点が、社会の特質を規定する要素である。この 5 つの要素について Hiller はあまり詳しい説明を与えていないが、いずれにせよ、この 5 つの要素は、社会をして社会たらしめ、集団をして「社会的なもの」たらしめる要件である。これ等の要素はいずれも、人と人との関係の裡に存在するものであつて、従つて、或る共通の目的のもとに人々が努力を結集しようとして個人が導かれる過程、相互扶助や調和、権利義務の確立や帰属感の存立等々はすべて「社会的なもの」に還元される。sociation, sociality, society,

societal, sociable, socialized 等々の言葉には皆この様な要素が包括されている。そしてこれ等の言葉は congregate, collective living という様な現象的な実体行為を裏づけとし、更に、利益に基づく協同 (cooperation), 統一 (unity), 同情 (sympathy), 執着 (attraction), 拘束感 (sense of obligation), 期待に対する責任感 (responsiveness to expectaton) の如き志向性によつて、その可能性が与えられているというのである。従つて “social” ということは、結局において様々なる sociating, federating, uniting 及び何等かの banding together の状態或いは機能をさすことになる。この様な「社会的なもの」は、明らかに個人の相互依存、整合的生活、精神生活と行動とを内容としてゆかねばならない。しかしこの内容は、単なる関係として与えられる内容ではなく、これ等の人間の社会関係を根本的に規範 (norms) という形において完結する性質のものである。換言すればそれは文化的内容であつて、従つて彼によれば、社会の発展とその内容とを根本的に規定するものは、社関関係を規定する形式としての諸規範にその内容を与えるところの「文化」(culture)であるということになる。そこでは、形式としての文化と、内容としての文化とが一応区別されることになるが、彼によると、この「内容としての文化」は次の如きものだとしている。即ち

「文化とは、人間の累積され、学習された思想、趣向及び行動様式であり、また歴史的に発展、変遷累積された理念 (ideas), 衝動的反応 (emotional responses), 行動様式 (ways of action) である」という。

これに対して、「形式としての文化」とは、文化の恒常性の程度 (degrees of permanence) 普及性 (prevalence), 追従性 (obligatoriness) 及び組織性 (organization) の程度を基準として把握されるものであつて、これ等の形式的属性の程度の相違によつて、伝統、伝説、神話、慣習、流行、習俗、法規等々の形式的文化の実体が構成される。彼はこれ等の文化の諸形態を、社会的文化複合体 (social cultural complex) と呼び、それは、非社会的文化複合体 (non-social cultural complex) と区別されねばならないものであるとする。明らかに、社会規範の如きは社会的文化複合体に帰属する関連をもっている。たとえば、家族、社会組織、共同社会、財産、所有、統治等々は社会的規範にささえられて存在するものであつて、この様な社会的文化複合体以外の家族や社会組織、財産等々は、内容のない生物や物の集まりにすぎない。従つて文化こそは、家族や社会組織やその他のものにとつて、その存在の社会的可能性を基本的に規定する本質的要件である。規範の存在しないところに財産や所有・統治の如きものは社会的に存立出来ない。

この様にして、文化は社会的なるものの根源として、これを基本的に規定するが、しか

らば、文化は如何にして社会に統一を与えるものであろうか。Hiller によれば、社会はまた制度と社会的地位とを中心として構成された社会関係の複合的な体系である。多くの人々があつまつて共存生活を営むことを可能ならしめるためには、各人（成員）に相応の地位を与え、その地位に応じた役割と行為とを果させると共に、このことを一般的に規定する体系（system）がなくてはならない。この体系が制度であつて、この制度に従つて人々はそれぞれの地位に応じた役割の達成につとめ、共存生活の実現を可能ならしめて行くのである。ここで云う体系＝制度は、「体制」とも云うべきものであつて、人々はこの体制の具体的内容として、或る共通の価値観念、共通の規範体系を認め、これに従つて行動することを余儀なくされるのである。この体系こそ人々の相互作用の system であつて、これが複数人の共存生活に社会的統一をあたえる根拠となるというのである。

従つて体系は文化の社会的複合体として社会に統一をあたえるものであるから、所与の社会における文化の様式は、その社会の特質を基本的に規定することになる。その文化の様式が異れば社会の特質もかわる。Hiller の社会における文化決定論の根幹はここに見い出されるが、彼によれば、この様にして文化が社会に統一を与えるには、次の如き2つの方式があるという。即ち、

(1) 文化は、個人を或る共通の精神内容に統合させる。即ち、成員に共通の文化がある時は、その成員の性向や関心についても十分な類似性をもたらし、それを中心とした統一の行動を展開せざるを得なくなる。たとえば環境の利用にしても、そこに共通の文化がある時は、類似した方法がとられることになるし、権利や義務についても劃一的な態度がとられることになる。従つてこの種の類似は当然そこに成員の「同類意識」(likemindedness)及び「了解」(同意— consensus)の意識を形成することになる。

かくして、Hiller に於ては、同類意識や同意意識は文化がもたらした社会的統一の所産に外ならない。共通の文化に対する成員の受容と吸収の程度が高ければ高い程、その成員間における社会的統一も大きくなるという関係がなりたつ。

従つて、所与の社会における規範や価値観念の体系に対して、その成員が、これに対して、どの様な consensus をもっているか、その同意の程度如何をみることによつて、その社会の統一性、凝集性を判ずることが可能となるわけであり、またこれよつてこの社会的統一にかかわりをもつ、相互作用の所産としての連帯性を判ずることも出来ることになる。

(2) 文化はまた、人間相互に理解をあたえる基礎でもある。けだし文化は常に個人に対して或る程度劃一的な学習の内容を与えるからであつて、これによつて個人の理解の

基準も等質的なものになり、このことが個人の相互理解の実現を容易にするのである。例えば自分が他人を理解し得るのは、他人が自分と同じ言葉で話してくれるからであり、文化によつて与えられた同一の言語がの如きものなくては両者の相互理解は必ずしも容易なことではなくなるであろう。

ところで、そこに相互理解があれば、人々の間には共通の関心 (common interests) が生れる。そして、そこに共通の関心があれば、人々はこの関心を中心として相互に作用し、必要な社会関係を維持する様になり、更に進んでは、この様な関心そのものを積極的に社会の目標におき、これを成就させようとつとめるようになる。そしてこの種の積極的意図は、個人の欲求そのものが高められて社会的関心に還元されたことを意味する。この社会的関心はまた社会に統一をあたえる目標でもある。

これを要するに、Hiller によれば、社会とは相互理解を基調とした価値体系と、それがもたらす関心によつて統一化された集団に外ならない。かくして冒頭に掲げた Hiller の Community についての命題の定立にあつては、以上概説した彼独自の文化社会学的な社会理論がその基調におかれているのである。

さて、Fessler は primary rural community の概念構成の根拠を以上の如き Heller の理論に求め、この理論の中から community solidarity の尺度化の理論的可能性を誘導している。しかし、この問題について、彼はここで取扱たほどの詳しい説明をほどこしていない。ただ彼は1つの仮説として、「所与の社会 (community) における価値観念や共通の行動規範に対して、その成員間に強い意見の集中がある時は、この社会における相互理解、相互合意の程度も高く、また連帯性も強いが、逆に意見にばらつきがある時は、その community における統一性は弱く、社会的機能も劣り、従つて連帯性も低い」という命題をかかげ、尺度化の前提を構成しているに過ぎない。この命題を前提として、彼はアイオワ州における協同組合のある community と、協同組合のない community との間において、如何なる連帯性の違いがあるかを明らかにする為に、尺度化の方式を展開しようとしたのである。そこで、以下この様な目標のもとに彼がどの様にして尺度化方式を展開して行つたか、その過程を検討してみる。

協同組合のある community と、ない community との間で、果して連帯性に相違があるかどうかを尺度化の方法によつて測定的に把握するためには、先ず2つ以上の primary rural community の比較を可能ならしめる所の指標 (index) を手がかりとして求めなくてはならない。これ等の index は当然、経済学的並びに社会学的水準に従つて選択されなければならないが、差し当たりとくに社会学的に要求されることは、比較される2

つ以上の社会が全く異質なものであつてはならないということである。換言すれば、対象として求められる社会が、少なくとも基本的な生活様式の点において、共通の性格をもつ個人の集団でなくてはならないということである。この様な集団社会は、当然基本的には共通の制度的なもち、これを通じて個人の接触が繰返えされ、しかもその接触が face-to-face といつた極めて一次的な様相のもとに展開されることが多いという規模の小さな community に限定されるという制約のまぬがれない。従つて、この比較は primary rural community を素材にしなければ適当でないということになる。

次に経済学的に要求されることは、協同組合自体がもともと経済的利益を目的として、農家に対する agri-service を行うことを意図して作られたものであるから、個別農家に対する組合の service の機能の1つをとりあげて、これによつて community life における経済的側面を浮彫にすることの出来る指標を求めることである。Fessler はこの様な意図から、次の2つの index を選択した。即ち

(1) A Business Service Index

(2) A per Capita Financial Strength Index である。

Fessler はこの2つの指標に従つて、協同組合のある農村と、ない農村とを比較した所、農家の受ける経済的 service 及び融資上の安定性の双方において、協同組合のある農村の方が無い農村よりも優れていることが判明した。しかし、このことは直ちに協同組合のある農村の方が連帯性が高いという事にはならないし、又1つの community を他の community から区別する決定的要素ともならない。

何故ならば Fessler がさし当つて問題にしようとしたことは、具体的に1つの community と他の community を如何にして区別するかということであり、これとの関連において協同組織のある community とない community との間において連帯性の相違を如何にして把握するかということである。従つて経済的 index だけでは問題は解決しない。ことに community の範囲を規定する要件としては、この経済的 index だけでは不十分である。

この問題は結局、community を primary rural community に限定し、その範囲即ち各 rural community の地域的範囲を社会的に規定することによつて解決する。

Hiller のテーゼからすれば、1つの community を他種の community から区別する要素は「共通の規範体系、価値観念」の存在であるから、これを中心として農村の範囲を規定し、またその範囲に含められる農民の意義を1つの社会的意識として取扱うことが可能となつてくる。しかもこの共通の規範体系、価値観念は、これを直ちに連帯性を測定

する場合における index としても有効であるから、ここでは経済的な index よりはむしろ社会的な index の方が重要となつて来る。

かくして、Fessler は、この様な community に内在する共通の規範体系と 価値観念とを中核として、これに対する意識構造を明らかにし、それを通じて連帯性を抱えようとする。しかし、この方法によつて、仮に community solidarity が測定されたとしても、solidarity の程度の高い community が「良い社会」であり、それに欠ける社会は「悪い社会」であるという風に判ずることは出来ない。何故ならば、この group solidarity は primary rural community における 1つの基準 (index) から抱えられた特性を意味するものであり、それだけで、この社会の全面的な価値的善悪を判ずることに許されないからである。むしろ solidarity の高いのは、“rich”であり、低いのは solidarity が “poor” であるというに過ぎない。

かくして Fessler は community における共通の規範体系や価値観念に対する意識の一致性をもつて solidarity を抱える一応の手がかりとした。しかしながら、意識の側面における所謂、意見の一致即ち consensus ということは、人が意見を述べることの出来る問題であれば、何にでも期待することが出来る。例えば、戦争、共産主義、宗教、教育問題等々についての意見など、問題は殆んど無限に近いほど提出することが出来る。もしも、これ等の問題についての意見の一致が、すべて solidarity につながるものであるとすれば、solidarity の測定標識も具体的には殆んど無限に近いほど用意しなければならなくなる。そこで、この標識選択の仕事のをどう処理するかが次の問題となる。

この問題について、Fessler は、意識を大きく 2つの体系に分けることによつて問題を解決している。即ち、彼によれば意識は、各個人がそれぞれの生活において、その community 自体の中において形成される意識と、自己の所属する community 以外のより大きな外部社会や、community 内部における経験或いは学習以外のものによつて形成される意識とがあるとする。前者は主として、自己の community 内部に於て行われる社会行動についての成員の意識であり、後者は、自己の community という様な限定を直接受けない範疇に属する意識である。community solidarity の index として求められるべき意識の体系は、当然、前者における意識の一致性に求められるべきである。即ち、community 内部における成員相互の社会的行動をめぐる意識の諸相の中に、連帯性の具体的な標識を求めれば、この問題は解決することになる。

しからば、実際問題として、これ等の行動に対する意識を標識化するには如何にしたらよいであろうか。この問題について Fessler は 59 よりなる criteria を設け、community

における社会的行動をめぐる意見を肯定、否定の形をとつた文章に書き改め、都合 118 よりなる文章 (statements) を作成してみた。そして、この 118 よりなる文章を分析して、8 つの社会的行動領域 (area) を発見し、118 の文章を大体等しくなる様にこの 8 つのエリアに配分してみた。その 8 つの領域は、次の如きものである。

- (1) Community Spirits (共同社会の精神, 気風)
- (2) Interpersonal Relations (対人関係)
- (3) Family Responsibility toward the community (共同社会に対する家族の責任感)
- (4) Schools (学校関係)
- (5) Churches (宗教関係)
- (6) Economic Behavior (経済行動)
- (7) Local Government (地方自治)
- (8) Tension Area (緊張領域)

かくして区分された 118 の文章は、予備テスト (pre-test) に使用される尺度文章とされた。Fessler はこの予備テストをアイオワ州の 8 つの農村にある高等学校の学生を対象として展開した。彼はこの高校生に対し、この 118 の尺度文章の内容が、自分達の農村社会に適合する性質のものであるかどうかを問い、その瞬間的な反応を、次の 5 つの段階に分けてマークする方法をとり、各反応の段階にスコアを与えた。

- | | Score |
|----------------------------|-------|
| (1) Very true..... | 5 |
| (2) True..... | 4 |
| (3) Not applicable..... | 3 |
| (4) Untrue..... | 2 |
| (5) Definitely untrue..... | 1 |

次に彼は高校生が与えた反応を上記のスコアによつて集計した結果を素材として、各尺度文章に対する「内的-一致性」(internal consistency) による妥当性の検定を試みた。その結果、118 の文章中、78 が有効性のないことが判明したので、これを不適当と見做して捨て、結局残りの 40 の文章を有効と認めて、これを最終的な尺度文章中にとり入れることにきめた。

また Fessler はこの選定に當つて慎重を期し、これとは別に、尺度文章の重要性を判定する異つた基準をもうけ、この基準に従つて 40 の尺度文章の意味の重要性を約 100 名の大学生に判断させ、それぞれその判定の結果にスコアを与え、点数の多くとつた文章を順に列べて rank order を作つた。次に、この文章の rank order と前述した internal

consistency の検定結果とを比較し、そこに高い相関関係が認められれば、この選定は一層妥当であつたと云うことが出来るので、このテストを実施してみた。結果は上々で、双方の間に高い相関関係のあることが認められた。しかし、これだけではまだ十分とは云えないので、彼は重ねて次の様なテストを試みた。

それは上記のテストに参加した大学生を出身別 consistency に分け、出身地 (home-community) のサイズに従つて、上記の予備テストの結果と、文章の rank order との関係を相関係数によつて求める方法である。このテストを行つた結果、右に表示した如き関係が判明した。即ち、

出身 Community の Trade Center の人口	Internal Consistency と Rank Order との相関
2,500以下	r = 0.85
2,501~ 5,000	0.67
5,001~ 15,000	0.71
15,001~125,000	0.53

このテストは、40の尺度文章の意味的妥当性が、農村出身者の学生と、それ以外の community 出身の学生との間に於て、どの様に高く評価されるかを明らかにするものである。結果は、明らかに、農村出身者による方が、都市出身者（厳密には都市とは云えないが）によるよりも、この尺度文章が自分の出身 community に向けた性格のものであること、換言すれば、この40の尺度文章が、農村向けのものとして妥当性の高いことが明証された。

40の尺度文章は、かくして調査表に組み入れることとなつた。これによつて彼は直ちに「実測」を展開するわけであるが、彼はこの段階をまだ「予備調査」(pre-research)といつている。この実測に當つて問題になつたことは、具体的に調査対象地点である community の範囲或いは境界をどの様にして規定するかという問題があつた。この境界決定の問題について、彼は1953年 Iowa State Planning Commission が定めた“Grocery Trade Area”に資料を求め、この Area の中にある商店がチェックした農家を1つの community の member と見做すと共に、各農家を訪問し、interview によつて各農家とその community に所属しているという帰属意識 (identification) があるかどうかを確かめた。この様にしてこの community の範囲確定の問題を解決した後、彼はその community の内部に住む学生と、その外に住む学生とを対象として、実測を試みた。

既に述べた如く、連帯性は各々の community において、調査票の尺度文章に対して各成員がチェックした結果を統計的に処理し、その全体としての意見のばらつきをみることによつて、数量的に把握される。即ち、各文章に対する合意の程度は、平均値とこの平均値に対する標準偏差の程度をみることによつて容易に捉えられる。平均値に対する標準

偏差が、少なれば少い程、まとまりも高く、連帯性も高いと見做れる。

この連帯性のとり方は、40の尺度文章が8つの行動領域に分かれているので、各領域別に、それぞれの community における連帯性をとることが出来る。又、8つの領域を全部合せた次元において連帯性をみることも出来る。

次に Fessler はこの予算調査の結果を使つて、テストの信頼性(reliability)の検定を試みた。その詳しい方法は不明であるが、ここでは普通の「折半法」(split-half method)を用いている。その結果は満足するに足るものであつたとしている。

以上が、Fessler の連帯性の尺度化の要領であるが、次に測定結果について彼が試みた分析について触れてみる。一般的にいつてこの測定の結果を分析することによつて解明することの出来る面は、大きく分ければ、次の2つになる。即ち

(1) community の各成員が、自己の community における様々な社会行動に対してどの様な評価を与えているかを知ることが出来る。

(2) 各 community 内部における成員の意識構造の中にどれ位の見解(意見)の一致が存在するかを知ることが出来る。

この2つが、それである。前者は community 内部における社会的行動に対する一種の価値判断を意味するものであるが、Fesslerによれば、この尺度文章が連帯性の指標として可能になつてくるのは後者の意味においてであるとしている。従つて前者の社会行動に対する評価意識の構造についてはここでは取扱われないのである。

そこで、問題の分析をあくまで、連帯性測定という目標に絞つて、調査結果を分析して行くと、次のことが明らかになつたという。即ち、実測の対象にえらばれた8つの community のうち、5つは協同組合のある農村であり、残りの3つは協同組合のない農村であつたので、この2種の community における連帯性の取得スコアの平均を chi-square method によつてテストした所、両者の間に有意性の高い差のあることが認められた。即ち、協同組合のある community の方がない community よりも連帯性が高いと断定出来たのである。

しかし、このテストは前述の如く、農村地域における学生を対象としてなされた予備調査をもとにしたものであるから、絶対的とはいえない。本来は各 community における成人 member を対象とし、random sampling の方法を用いて本調査を展開しなければならない。この問題は将来にまたれるのであろうが、成人 member を対象とした本調査

と、学生を対象とした調査の結果を比較してみて、相互に高い相関関係があれば、爾今、共同社会連帯の測定に当つては、当該社会における学生を対象として行つても大過はないであろうと Fessler は考へている。もしこの様なことが許されるならば、この調査に要する時間と労力とは可成り節約されることになるわけである。

測定結果の分析を通じて発見されたことはもとより以上につきるものではない。しかし、彼は結果そのものよりは、それを把える方法により強い関心をしめており、この尺度化の方法について、次の如く述べて、1つの自己批判と効験の一端をほのめかしている。

「これはもともとアイオワ州に於ける一次的農村共同社会内部の連帯性の程度を計測しようとして作られたものであつて、その標識 (index) をなしているものは、もとより完璧な道具として呈示したものではない。恐らくそこには、community を計量的に調査しようとする者にとつて、明らかに欠陥が認められるであろう。しかし、考慮を加えて行けば、これは非常に役立つ性格のものになるであろう。」⁽⁴⁾

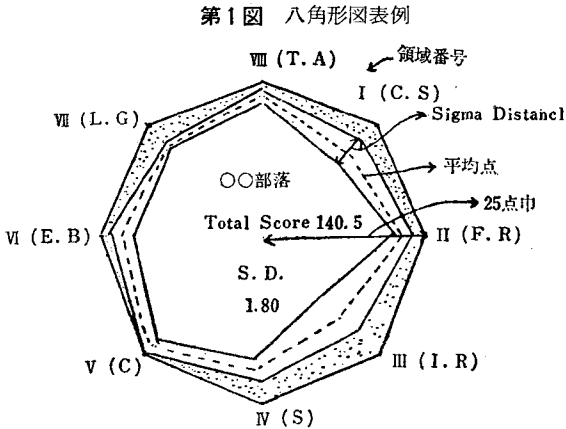
以上が Fessler の community solidarity の尺度化の概要である。彼のこの研究には実際問題として種々なる問題があると思われるが、しかし1つの調査法として注目に値するものがあると思う。就中、この方法を開拓社会(北海道)の連帯性の測定に利用することには、若干の問題があるにせよ、試行に値するだけの価値はあると思う。最も大きな問題は、この場合、標識化された尺度文章の妥当性の問題であろう。しかしこの問題を除けば community の範囲(境界)の問題などは、開拓社会の場合においてはこれを部落単位にとれば簡単に解決する。また調査対象である community の member の規定の仕方も、開拓部落のサイズが小さいから、悉皆調査を展開することが容易で、Fessler が学生などを使つて苦心した様な問題は先ずない。勿論これ以外にも考慮しなければならぬ問題があるが、いずれにせよ、Fessler の方式を開拓農家の連帯性の測定に転用することは不可能ではない。かかる理由から本稿においては、この Fessler の方式をとりあげ、これに必要な修正を加えて、とりあえず実測を試みることにした。

さて Fessler が展開した community solidarity の方式の中で、彼の独創としてとくに注目しなければならないものに「八角形図表」による連帯性の表示法がある。

この「八角形図表」とは、40の尺度文章を前述した8つの行動領域(area)に分属させ

て、その連帯性を示めすスコアを、領域別に正八角形の中に書き入れるものである。八角形の中心点から各角までの距離を目盛つて、最高点25点とし、その中に所与の平均スコアをとる。更に平均値についての「標準偏差」(S P)をその内側と外側とに求め、八角形における各点を結ぶのである。標準偏差の低いエリアでは、巾の狭い八角形の一角が形成されることになり、8つのエリア全部に偏差の低い時は八角形の内側に作られる八角形は可成り円満な形のものになり、この様な形の場合は連帯性も高いことになる。この八角形は、時計廻りの方向にむかつて番号がつけられ、時計の2時に当るところに Area I が位置し、12時の所では Area VIII (Tension Area) が位置する様になる。各エリアは各々5つの尺度文章によつて求められたスコアの平均値がきざまれ、それが放射状にとられる。その点と中心との間には2つの Sigma Distance (標準偏差から求める)がとられる。

今この図表の書き方を例示してみると次の如くなる(第1図)。



註 Total Score は各領域における平均スコアの総和。

S.D. は各領域における「標準偏差」の平均値。

Sigma Distance は各領域における「標準偏差」の2倍。

平均点は各領域における5つの尺度文章によつて取得したスコア母集団平均値。

25点中 八角形の中心点が0でコーナーが25点目になる様仕切る。

この〇〇部落の連帯図表例からすると、全体としては連帯性は高い。とくにVの Churches, VIの Local Government, VIIの Tension Area の各領域における連帯性は高い。連帯性に欠ける最も顕著な領域は IIIの Interpersonal Relations の領域である。しかし、

これは任意に（作為的に）作成したものであつて、実際にこの様な形をとることは稀であろう。

Fessler はこの八角形図表のことを“Community Profile”と呼んでいるが、彼はこの図表によつて、次のことを明瞭にすることが出来るとしている。

- (1) 或る community における連帯性のスコアが、外側八角形でしめされる理論上の最高スコア（完全score）との関連において、それにどれだけ接近しているかがわかる。
- (2) 一つの community における制度化された行動規範に対する行動の差異がエリア別にかかる。
- (3) 各領域における意見の一致、各尺度文章についての意見の分布状態がわかる。

従つて、八角形の内側に形成される八角形が、全体として釣合のとれた well-rounded picture をしめす時は、あらゆる点において、意見にまとまりがあり、バランスのとれた連帯性をもつ community であることになるが、反対に内側に形成される八角形が著るしく歪んだ形をとるときは、各領域における意見の一致性に相対的な均衡はなく、領域によつて合意の程度も異なることをしめすことになる。この様な場合は、成員の行動に対する意識に統一はなく、従つて全体として連帯性にも欠けるということになる。

以上が彼の八角形表示の方法であるが、この表示法は或る程度使用にたえる。しかし、この方法は連帯性を視覚に訴えて表現するものであるから、連帯性をめぐる細部にわたる detail を描き出し、これを判別させるだけの力はなく、凡その傾向が表示されるにすぎない。

また Fessler の方式には、8つのエリアが設定されているが、各エリアの内容が概念的にはつきりしない。従つて各エリアが何を意味するかについては、それぞれの尺度文章の意味を解釈して規定して行かねばならない。

Fessler の方式には、この様な難点も存在するが、しかしこれ等の問題点は、彼自身が述べている如く「考慮を加えて行けば非常に有効なものとなる」可能性がある。

- 註 1 Luther T.Jansen, “Measuring Family Solidarity”, American Sociological Review, Vol.17, No.6, 1952.
- 註 2 Donald R. Fessler, “Scale for Measuring Community Solidarity”, Rural Sociology, Vol.17, No.2, June 1952.
- 註 3 E.T. Hiller, “The Community as a Social Group”, American Sociological Review, 1941, 6 : 189-90.

註 4 Donald R. Fessler, "The Development of a Scale for Measuring
Community Solidarity", *Rural Sociology*, Vol.17, No.2, 1952, p.144.

第3章 改訂尺度の構成と測定の予備的手続

序 説

既に触れた如く、社会連帯とは人々の相互依存がもたらす或る社会的価値に対する意識の連結性である。Fessler はこれを *primary rural community* に限定した場合、既に論じた *community solidarity* の概念のもとに尺度化の可能性の成り立つ根拠とその具体的な方式について明らかにした。その所論は、必ずしも社会連帯の本質をうがったものではないけれども、なほよく社会的連帯性のもつ多くの特性をたくみに把えている。就中この問題を *primary rural community* に限定して処理しようとしたことは、まさに卓見ともおもわれる。

この様な長所は、また彼の尺度化の方式が可成り *universal* なものであるという特色をあたえるところとなつている。もとより、この尺度の *universality* については Fessler 自身殆んど触れていないが、しかし、この尺度の構成が Hiller の社会理論等を基調としているだけに、その底には可成り手堅い原理が流れており、その原理が普通的に妥当する限りにおいて、この手法にもまた *universality* が与えられると考えられる。

もつともさればと云つて、この尺度化の方式を我が国における府県の農村に適用し、その連帯性をはかることには大いに問題があると思われる。しかし乍ら、アメリカ農村における最も事情の類似した北海道の農村或いは開拓社会にこれを適用することは、先にも触れた如く、さほど困難ではないと思われる。

そこで本章においては開拓社会も、Fessler が対象としたアメリカの *rural community* も等しく、*primary rural community* の範疇に属するものであるという事実を前提として、この尺度に最小限度の修正を加え、改訂尺度を編成して、実測に当る準備をととのえ、と共に、なほ実測に当つて必要とされる予備的な手続について考察することにする。

第1節 開拓社会への適用手続

アイオワ州における一次的農村社会を対象として編成された連帯性の尺度を、直接、北海道の開拓社会に適用することは、両者の生活様式、生活感情等々の相違からして、無条件に肯定することは出来ない。しかし、両社会は比較的類似した性格がみられるので、必要な修正を加えれば、これが適用は必ずしも不可能ではない。その修正の基本方針として

は、

(1) アメリカの農村社会と北海道のそれとを比較し、その比較によつて求められる両社会の一般的特色或いは相違についての原理をこの修正で操作にとり入れる方法。

(2) 一度試験的にこの尺度を北海道の農村に適用してみて、妥当性のない点を所謂試行錯誤 (trial-and-error) の方法によつて是正して行く方法。

とが考えられる。ここではこの2つの方法に基づき、一般的水準からして当然適当でないと思はれる尺度文章については、爾前に適当な修正を加えると共に、直ちに現地に赴き農村関係者の参与を求めて、各項についての評定を乞い、必要な訂正を行う方法をとることにした。

この方針に従つて、我々は2つの開拓部落を慎重に選び出し、これについて予備調査を展開し、その結果にもとずいて尺度文章の原文を修正・訂正することにした。

1 尺度文章の修正

Fessler が定めた40の尺度文章は読めば極めて平易な何人にも了承出来る内容のものである。その規範の意味内容は、海をへだてた北海道の農村社会にも通用するものが少なくない。しかし中には疑問と思われるもの、意味の不明確なものもあるので、この点に注意しながら試行錯誤による予備調査を展開し、その結果をみることにした。

その予備調査の対象地点として、慎重に詮考した結果、十勝大樹町所在の「拓北部落」と「共和部落」の2つをとり上げることにした。大樹町の「拓北部落」は実は戦前入植の開拓部落であるが、いまだに開拓地としての性格を払拭しえず、既存農村化しきれないでいる所である。ここでは、いまだに開拓社会としての特殊性が多分にみられると共に、一面、或る程度既存農村的な性格もみられる。従つて、この部落を素材とすれば、或る程度既存農村的なセンスと、開拓社会的な規準との双方から尺度の効果を判定し得る可能性がある。かかる理由から、拓北部落を選んだわけであるが、同地の「共和部落」は拓北部落の隣に位置しながら、全く戦後の不安定開拓地としての典型的な性格をもつ所である。これも対比をする意図からして好適な地点であるので、合せてとり上げることにした。

尚、連帯性の測定は、Fessler にあつては調査票を community のメンバーに配付しこれに書き込んでもらう方式をとつているが、我々は現地に赴き interview による面接聴取り法をとることが適当であると考えたので、肯定文、否定文の形になっている原文の文章のスタイルを全部、肯定の質問文の形におきかえることが必要となつた。この質問文への切り替は簡単な様で決してそうではなかつた。そこで改訂された質問文の表現について

も予備調査を通じて吟味することにした。

予備調査の結果、40の尺度文章をめぐって次の如き問題があることが判明した。即ち

- (1) 尺度文章中には、北海道の農村事情の相違から全然該当性のないものがある。
- (2) 尺度文章を質問文に直したため意味が不明瞭になったものがあり、この為に被調査者から直感的な即答を求めにくいものがあつた。
- (3) 宗教関係、学校関係の尺度文章には、はじめから該当しない性質のものがあつたので、爾前に修正を施してみたところ、概むね適合することが判明した。
- (4) 部落の有力者の参与によるこの尺度文章に対する規範的意義や価値水準としての有効性の判定には、総じて極めて良好なるものがあつた。即ち、この尺度文章を基準として採択しても差しつかえないという判定を得ることが出来た。
- (5) 質問形式をとつた為 Fessler が定めた順序で、聴取を行うことは非常に不便であり聴き取りにくかつたので聴取順序を変更する必要が認められた。
- (6) 聴取に当つて最初から部落の連帯性を測定するのだという調査目的を表明すると、人によつて稀れに作為的に解答されるおそれのあることが認められた。
- (7) 調査員が農家の質問文に対する反応を直ちに間違いなく記録出来る様にする為に調査票のデザインを変へる必要が認められた。

之を要するに、これ等の点について十分注意を施し、必要な修正を試みれば、この方式による連帯の測定は不可能でないという結論に達した。

またこの予備調査を通じて、修正すべき箇所を、どの様な形に修正したらよいか、その内容についても具体的な見透をつけることが出来たので、予備調査は極めて成功裡に終了することが出来た。

そこで、この予備調査の結果に従つて、もとの尺度文章を全面的に修正する操作を展開しなければならないが、全面的修正とは抜本的修正ではなく、原文を出来るだけ尊重しながら必要な改訂を最少限度に行ふことである。

今 Fessler が設定した40の尺度文章の原文と、我々が以上の操作を基調として修正した文章とを対比させると、次の如くである（第1表）。

第 1 表

COMMUNITY SOLIDARITY INDEX SCHEDULE

I Community Spirits [部落の気風精神]

原文→ 5. A lot of people here think they are too nice for you.

使用した
尺度文章→〔9〕 部落の皆さんは貴方をとくに親切にしていると思つている(か)。

5 1

13. People wont work together to get things done for the community.

〔16〕 部落の皆さんは村や部落の為になる仕事を協力してやろうとしない(か)。

1 5

21. The Community tries hard to help its young people along.

〔23〕 この部落では青年たちの生活のことに熱心に意を用いている(か)。

5 1

29. The people as a whole mind their own business.

〔30〕 この部落の皆さんは一般に自分の仕事に熱心である(か)。

5 1

37. No one seems to care much how the community looks.

〔37〕 この部落の人達は、この部落が他人からどんな風にみられても平気である(か)。

1 5

II Interpersonal Relations. [対人関係]

1. Real friends are hard to find in this community.

〔6〕 この部では本当に腹を打ち割つて話の出来る親友を求めることは無理である(か)。

1 5

9. Almost everyone is polite and courteous to you.

〔13〕 この部落の皆さんは貴方を大事に扱つてくれる(か)。

5 1

17. People give you a bad time if you insist on being different.

〔20〕 この部落の人は貴方が何か変つたことをすると辛くあたるとな事がある(か)。

5 1

25. I feel very much that I belong here.

〔27〕 貴方はこの部落の一員であつたことを大変よかつたと思つている(か)。

5 1

34. People are generally critical of others.

[34] この部落の人達は一般に他人に対して批判的である(か)。

1 5

Ⅲ Family Responsibility toward the community [家族の責任感]

6. Family in the community keep their children under control.

[10] この部落の人達は自分のうちの子供をよく監督している(か)。

5 1

14. Parents teach their children to respect other peoples right and property.

[17] この部落の親達は、他人の権利や財産を尊重するよう、よく子供達をしつけている(か)。

5 1

22. Folks are unconcerned about what their kins do so long as they keep out of trouble.

[24] この部落の人は自分の子供がとくに面倒なことを起きぬ限り何をしてても平気である(か)。

1 5

※30. Must people get their families to Sunday School or church on Sunday.

[31] この部落の人たちは、自分の家族を村の年中行事に参加させることに熱心である(か)。

5 1

38. If their children keep out of the way, parents are satisfied to let them do whatever they want to do.

[38] この部落の人たちは、自分の子供が危い所で遊んでいるようなことがなければ何をしても平気である(か)。

1 5

Ⅳ Schools [学校関係]

2. Our schools do a poor job of preparing young people for life.

[2] この村の学校では若い者の生活の足しになるようなことをしていない(か)。

1 5

※10. Our schools do a good job of preparing students for college.

[3] この部落の学校では上級学校の入学準備をよくやっている(か)。

5 1

18. Our high-school graduates take an active interest in making their community a better place in which to live.

[4] この部落出身の高校卒業生はこの部落をよくする為に積極的な関心をも

- つている(か)。 5 1
- ※26. Many young people in the community do not finish high school.
〔5〕 この部落の子供たちは上級学校によく入る(か)。
5 1
33. Most of the students here learn to read and write well.
〔1〕 この部落の学校の生徒は皆勉強に熱心である(か)。
5 1

V Churches 〔宗教関係〕

- ※ 7. The different churches here cooperate well with one another.
〔11〕 この部落(又は村)の宗教団体はお互にうまく折合っている(か)。
5 1
- ※15. Most of our church people forget the meaning of the word
brotherhood when they get out of church.
〔18〕 宗教を信じている人が案外教えを守らない(か)。
1 5
23. The churches are a constructive factor better community life.
〔25〕 この村の宗教団体は部落民の生活向上に建設的な役割を果している(か)。
5 1
31. Every church to be the biggest and the most impressive.
〔32〕 どの宗教団体も自分が一番有力なものになろうとしている(か)。
1 5
39. Most of our churchgoers do not practice what they preach.
〔39〕 宗教を信じている人々が、その教えを実行に移さないというようなこと
がある(か)。
1 5

VI Economic Behavior 〔経済行動〕

- ※ 3. Local concerns deal fairly and squarely with everyone.
〔7〕 この村の店屋では誰にでも不公平なくサービスしてくれる(か)。
5 1
11. Everyone here tries to take advantage of you.
〔14〕 この部落の人達は貴方を少しでも利用してやろうと思つている(か)。
1 5

19. A few people here make all the dough.

[21] この部落では皆んなが苦勞しているのに一部の人が樂をしている(か)。

1 5

27. The people here are all penny-pinchers.

[28] この部落の人達は皆んなお金がなくてピーピーしている(か)。

1 5

※35. Local concerns expect their paid help to live on low wages.

[35] この村で傭主になる人は使用人の賃銀が安くとも生活の足になるからよいと思つている(か)。

1 5

VII Local Government [地方自治行政]

8. Some people here "get by with murder" while others take the rap for any little misdeed.

[12] この部落では一部の人がひどいことをやつて許されるのに、他の人がちよつとしたことをしてもひどい目に逢せられる様なことはない(か)。

5 1

16. This community lacks real leaders.

[19] この部落には眞の指導者なぞいない(か)。

1 5

24. The mayor and councilmen run the town to suit themselves.

[26] 村長や議員たちがこの村を自分の都合のよいように運営している(か)。

1 5

32. A few have the town politics well sewed up.

[33] 少数の人達が村政を牛耳っている(か)。

1 5

40. The town council gets very little done.

[40] 村会議員はさつぱり仕事をしてくれない(か)。

1 5

VIII Tesion Area [緊張関係]

4. The community is very peaceful and orderly.

[8] この部落は非常に平和で秩序正しい(か)。

	5	1
12. People around here show good judgment.		
[15] この部落の人達は一般にもの判りのよい方である(か)。	5	1
20. Too many young People get into sex difficulties.		
[22] 若い人の中で男女のことで悩んでいる人が可成り多い(か)。	1	5
28. You must spent lots of monty to be acctped here.		
[28] この部落に仲間入りをするには大分お金を使って振舞わねばなら い(か)。	1	5
※36. You are out of luck here if you happen to belong to the wrong nationality.		
[36] 仮に貴方が日本人でないとしたら不幸な目に合せられていると思う(か)。	1	5

註

- ① ※ は修正変更した尺度文章
- ② [] の数量は変更した聴取順序, カツコ無しの数字は原文の聴取順序
- ③ 5 …… 1, 1 …… 5, は尺度の意味に対する肯定の場合のスコアの与へ方の方向

以上の如く、本調査測定に当つて修正変更した尺度文章は40項目中8項目である。その内訳は、

- (1) 第3部の「家族の責任感」の領域……1項目
(Sunday School or Church 変更・村の年中行事とした)
- (2) 第4部の「学校関係」の領域……2項目
(College 上級学校, high School 上級学校と変更した)
- (3) 第5部の「宗教関係」の領域……2項目
(Churches を宗教団体とした外, brotherhood の訳語を変えた)
- (4) 第6部の「経済行動」の領域……2項目
(Local concerns をこの村の店屋とした。これが2項目ある)
- (5) 第8部の「緊急関係」の領域……2項目
(国籍のちがいを「もし日本人でないとしたならば」と変更した)

である。

従つて、第1部の「共同社会の気風、精神」(community spirits)、第2部の「対人関係」(interpersonal relations)、第7部の「地方自治」(local government)のエリアにおいては殆んど大きな修正を施す必要がなかつた。

これ等の変更のうち、最も苦心を要したのは宗教関係のエリアにおける文章についてであつた。これは宗教体制の相違に基くものであつて止むを得ないものがある。また、Tension Areaにおける国籍(nationality)のちがひについての取扱にも苦心を払つた。しかしこの「もし日本人でないとしたならば」という表現は、実に功を奏した。この問ひ方に対する反応は可成り直感的に与えられたからである。ただ表現をこの様に変更したことによつて、原文の nationality が、「人種」的意味のものに変わってしまったことは確かである。しかし、原文の wrong nationality ということは、この種の意味を暗示していると思われるので、この修正は凡そ適当であると思われる。開拓社会には他国籍のものなぞある筈はなく、ここでも「もし日本人でないとしたならば」という表現は、實質的にはアイヌ人や朝鮮人を踏にほのめかしていることになる。被調査農家の中には樺太上りの引揚者などが多く、その経験にてらして、ほとんど大部分の者は、この間に対して、「不幸な目にあわされる様なことはない」と直感的に答えていた。

この外、全体に通ずる修正箇所として、“community”を「部落」又は「村」としたり「town」を「村」としたりする変更を試みた。community を、「この開拓地では…」という風に変えてもさしつかえない場合が少なくなかつたが、原則としては、これを「部落」と表現し、まだ部落とはいえない様な特殊な地点、或いはとくに間違いやすい様な場合に限り、「この開拓地では」という表現にかえることにした。しかし、この変更はさして大きな修正ではなく、原理的にも大きな支障をもたらすものではない。

以上の要領によつて、尺度文章に爾前に最少限度の修正を加えたのであるが、これによつて原文からあまりかけ離れた文章に変更する様なことがなく、しかも北海道の農家に最も適合しやすい形のものにすることが出来た。之を要するに、この改訂は、Fesslerの尺度文章を、北海道的な或る合理的経験的水準から変更、整理したことを意味する。

尺度文章の修正は以上の如くであるが、調査票には、次の如き“face-sheet”をつけた。

農家の 世帯主名	No. _____
職業(専・兼別)	Community _____ 部落
	既婚・未婚別

居住限年：約	年	住宅の位置：市街地・それ以外	
Center迄の距離	km	調査年月日	調査員名

この face-sheet は後に調査結果の分析を展開する場合に役立つ。またこの調査において我々は連帯性の測定調査と平行して、農業経済調査、社会調査、生活調査等を総合的に展開した外、Sewell 方式の改訂尺度による開拓農家の Socio-economic Status の測定も実施し、これ等の調査結果と連帯性との関連を分析することの出来る様にした。

Ⅱ 尺度値 (scale value) の吟味

既に述べた如く、Fessler が設定した 40 の尺度文章はそれぞれ被調査農家が与える反応に従つて、これを 5 つの反応の category によつてマークされる様になつている。即ち

vt (強く肯定), t (肯定),
 nd (わからない),
 u (否定), du (強く否定),

がそれであつて、この反応の category に従つて、被調査農家の意識が正しく反映する様に仕組まれている。

ところでこのような反応 category の区別の仕方は、一般に態度測定において用いられているものであり、前述の Jansen の「家族の連帯性」をはじめ、A. H. Brayfield, H. F. Rothe が試みた職場における「職務満足度の測定」等はすべてこの手法を採択した例といえる。とりわけ、Brayfield と Rothe が設定した職務満足度の測定方式はそのまま我国にもとり入れられ⁽¹⁾、2, 3 の職場において実測に供されている。

しかし、これ等の場合、この反応の category にスコアが与えられ、そこに所謂「尺度値」がきめられるが、この尺度値が如何にして与えられ、また何故に妥当であるかを吟味しなければならない。

反応の category を 5 つに区分し、各 category に対して value (尺度値) を与え、被調査者の意見についてのスコアを取る方式は一般に「リツカート法」(Likert Technique) の「簡略法」と云われるものである。正規の Likert Technique は、任意に scale value を与えるものではなく、各意見に対する被調査者の反応の状態を調査後の資料を材料にきめるものである。簡略法は、はじめから積極的態度をしめす反応の category と、より消極的態度をしめす category とを分けておき、これに 5, 4, 3, 2, 1 という scale value をはじめから与えておく方法をとる。

正規の方法と簡略法とではこのような点においてことなる。就中正規の方法では、各意見に対する反応の総和が求められ、これによつて各個人の態度値をきりめという所謂「シグマ値法」(sigma value technique) がとられるので、計算は可成り面倒になるが、簡略法では簡単にすむ。しかし Likert によれば、同一態度について sigma 法で荷重した結果と簡略法によつて採点した結果とを比較した場合、両者間に極めて高い相関関係の存在することが認められ、結局、簡略法を用いても実用的にはさしつかえないと云われている。Likert 法の scale value の基本原理については、ここでは触れない。ただこの方式をとる場合において要求される「条件」について触れる必要がある。その条件とは Likert 法定立の一般的条件であり、また適用上の注意事項である。

今連帯性の測定をめぐつて、是非とも守らねばならない条件(注意事項)については考察すると次の如きものがあげられる。

(1) 質問形式の尺度文章をしてもて反応を求める場合、その反応は常に連帯性を把握する手掛りとして有効なものでなくてはならない。このことを言葉をかえて云うならば、連帯性は一つの事実についての意識のまとまりを媒介として扱えられるものであつて、客観的「事実」そのものの様相を問題にしようというのではないから、直接事実の有無を尋ねる様な質問文は不要であり、これを除外しなければならないということになる。しかし「存在しない事実」について意見を求めることもこともまた無意味であるからこれも排除しなければならない。意見を求めるということはまた「感想」をのべてもらうこととは異なる。従つて感想が述べられる様な性質をもつた尺度文章は排除しなければならない。

之を要するに、尺度文章の内容は、存在する事実についての意識を直接反映する様なものに統一されることが肝要である。

例えば「この部落の生徒の大部分は、勉強に熱心ですか」という尺度文章は、生徒の勉強の態度を事実として調査しようとするのではなく、生徒の勉学態度(事実)に対する被調査者の考え、意見を問うものである。この尺度文章中には、「学校の生徒はすべてからく勉学にはげみ熱心でなければならない」という社会的規範性が含まれている。従つてこの尺度文章はこの様な社会的価値観念がらみて、生徒の態度は如何なるものであるかを判定させようとする作用があると云える。それ故に仮にその部落の生徒が非常に勉強に熱心あるにも拘らず、調査者が熱心でないとして答えてもさしつかえない。それは事実の状態をしらべることが目的ではないからである。また尺度文章中に、事実についての質問文を入れてはならない例として、例えば、「この部落の小学校は創立以来何年になりますか」という様な文章をあげることが出来る。「お宅はいつ入植しましたか」

という類の質問文もまた然りであつて連帯性の尺度文章としては排除すべきである。

(2) 反応の得られる意見であれば、すべてこれを連帯性の尺度文章中はとり入れてよいとは限らない。即ち、測定目標である連帯性と無関係或いは関係のうすい範疇に属する様な意見をもとめることなく、あくまでも同じ意識の次元に帰属する意見を求めなくてはならない。

例えば「奥さんは貴方の気持をよく理解してくれると思うか」というような文章を設け、これに対する強い肯定があつたとしても、それは家族生活における夫婦の満足度をとらえるものとしては有効であるとしても community solidarity を測定する尺度文章としては不適當である。恐らくこのような尺度文章は family solidarity の測定の場合には有効であろうが、しかし community solidarity の次元からすれば少くとも関係のうすいものと云はねばならない。

(3) 同じ意味のことがらでも、これを肯定文で質問する場合と、否定文で質問する場合とでは、相手方の反応の仕方も異つてくる。それは、相手方の質問文の形式に対する心理作用の働き方が異なるからである。それ故に或る1つのことを質問する場合、これを肯定文の形をとつて質問するが、或いは否定文の形をとつて質問する方が適當であるかについては充分考慮しなければならない。と同時に尺度文章が多数の項目によつて編成される時は全部を肯定的文章形態とせず、肯定と否定との両形を半々に用意することがのぞましいと思われる。

例えば、「この部落の人達は、村や部落の仕事を一緒に協力してやりますか」という質問文と「～協力しないですか」という質問文とでは、相手方に対する反応も同一ではない。一般に肯定形の質問文の場合は、直観的に肯定する傾向が強く、否定形の質問文の場合はよく考えて答える傾向が強くそこに意識反応の志向性のちがいが期待される。

そこで本調査においては、40尺度文章中、肯定形、否定形をそれぞれ20ずつ用意して慎重を期した。また否定形の質問文に対する反応を間違えなくマークするために、所与の否定形質問文に対して、「はい」と答えた場合には scale value の配列が1→5となり、肯定形質問文の場合には、5→1となることが調査員に一目にして判かる様に配慮した。

(4) 尺度文章は平易でかつ一義的な解釈が与えられるものでなくてはならない。人によつて解釈が異つてくる様な文章は適當ではない。しかし平易すぎて、意味が曖昧になる様なものであつてもならない。

(5) 尺度文章の数は少なすぎても多すぎても適當ではない。その規模は尺度の信頼性や妥当性等の検定に影響を与えるからである。また反応 category の数も多すぎても少な過

ぎてもよくない。3～5程度が最も適当である。この点尺度文章の数を40とし、反応 category の数を5段としたこの尺度方式は無難であると思われる。

(6) 尺度文章の配列順序についても考慮する必要がある。この問題については先に触れたが、この測定においては予備調査の経験に基いてこれを解決した。一般にはランダムが良いと云われているが、我々の経験としては、セミ・ランダムの方がより良いことが判明した。

以上が scale value を Likert の方法によつ与えようとする場合の尺度文章に対して与えられる条件であり注意事項である。既に設定した尺度文章は、これ等の条件を大方満足させているので、ここで、Likert 簡略法を用いて scale value をとつてもさしつかえない。

このことに関連において、ここで触れておかねばならないことは、「反応 category, nd (判らない)」をめぐる問題である。所与の質問文章に対して「判らない」と答えた場合、その反応には種々なる意味がある。答えることが面倒で「判らない」と故意に答えるものもあれば、「本当に判らない」場合もある。また該当事実がその community にない為に何とも答へようがなく、「判らない」と答える場合もありうる。この scale value は3点であつて肯定・否定の中間値をしめているが、果して、内容に巾のあるこの反応を一律に3点式に処理してよいものであるかどうか疑問である。

先ず応答をわずらわしく思つて故意に判らないと答えた場合について問題にする。この様な場合は、一応「判らない」と取つても、さほど大きな狂は出て来ない。何故ならば、故意に判らないと答える様な者は少くとも自己の community における当該尺度文章についての規定事項には積極的な関心を持つていないからである。関心が強ければ当然積極的な応答が与えられるからであつて、無関心における「判らない」は積極的に考えて「何ともいえない」ということと完全に同一ではないが、一応この態度を同一に扱つてもさしつかえないと思われる。次に該当事実がその community にない為に「判らない」と応答する場合についてみる。このケースは、開拓社会が特殊な社会でありまた歴史が若いだけに案外発生する可能性が多い。例えば、「若い人の中で男女関係のことで悩んでいる人が多いか」という Tension Area における尺度文章の如きは、開拓社会においては最も問題の多い文章である。何故ならば、世代の若い開拓農家の間では、まだ年項の子弟をもたないのがあり得るからである。部落に年項の青年男女をもたない開拓地ではこの尺度文章に対

して、どう返答してよいかわからないのが当然である。この種の問題は宗教関係のエリアでも発生する可能性がある。このことは、尺度文章が「まとはずれ」であることを意味する。しかし該当性のない尺度文章は、予備調査の段階を経て、既に排除されているはずである。それにも拘らず、この様な性質の尺度文章が残っているとすれば、それは調査対象にえらばれた community の特異性によるものと云わねばならない。それは対象が特殊な小地域社会に限定されているから問題になるのであつて、より大きな社会を前提としたならば、この種の問題は大部分解消するものと思われる。そこでこの問題に対する処理の仕方としては、母集団が小 community に限定されている場合は、当該項目を除外すればよいし、他の community と比較を行う様な場合は、一応「判らない」という category に入れておくことにすればよい。後に検定がほどこされるので妥当性の低いものは爾後的に棄却されるから、この段階では、一応この様にと扱つてさしつかえないと思われる。もつとも、この様にと扱つたからと云つて、この「反応 category, nd」をめぐる諸問題が根本的に解決されたわけではない。この問題については、今後一段と考察を進める必要があるが、ここでは、一応この問題を以上の如く処理して、試行錯誤的な測定調査を実施することにした。

Ⅲ 調査地点の選定

さて、以上の基準に従つて scale value の吟味と、これにともなう、尺度文章についての再吟味を施し、尺度の構成が終つたので、次にこの尺度を実際に適用する開拓社会の選定を行わねばならない。

この調査対象地点の選定については、ここでは開拓社会の農家の連帯性を目標としている関係上、出来る限り典型的な開拓地を選ぶべきである。しかし典型的な開拓地と云つても様々なる形のものがあるから、あらかじめそれぞれの開拓社会の特色を出来る限り調べた上で、最も代表的なものを選ぶべきである。また聴取調査を展開する関係上、立地条件が著るしく悪く農家の訪問の困難な開拓地や、この調査に理解と協力を与えてくれない様な地点は出来るだけ避ける必要がある。

これ等のことを考慮に入れ、本研究では、昭和 28 年（1953 年）に前述した如く、拓北、共和の両部落について予備調査を実施した後、翌年より毎年 1 乃至 2 地点の開拓部落について、測定調査を実施し、これを昭和 34 年まで継続した。この間満 6 年の才月が流れている為、時点（調査時点）にづれが生じて来たが、これは我々の調査能力からして止むを得ないことであり、この時点のづれについては、爾後的に出来る限りの調整をはかつて分析にさしつかえない様に配慮することにした。

勿論、調査地点の選定に当つて primary rural community として典型的な性格を有するものを求めたことは云う迄もない。

その結果、10の開拓小部落と、比較の対象として4つの既存農村とをえらびそれぞれについての実測を展開した。この10開拓小部落は、地域差のないところもあるので、これを地域社会集団とみる時には8つの部落に整理される。その結果、開拓、既存合せてこの調査の対象となつた農家の総数は429となつた。

調査は概ね悉皆調査をむねとしたが、不在その他の理由で多少ともこれを満足させない地点もあつた。今、その調査対象地点、調査農家戸数、調査年度等々を一表にまとめてみると次の如くである（第2表）。

第2表 調査地点及び調査農家戸数

開 拓 部 落 名	所 在	調査戸数	調査戸数 総戸数	調 査 年 度
拓 北 部 落	十勝・大樹町	15戸	0.90	昭和28年(1953)
共 和 部 落	“ “	19	0.80	“
大 与 地 部 落	十勝・足寄町	29	0.65	31 (1956)
岩 尾 別 部 落	斜里・知床半島	17	0.65	“
鬼 志 別 A. B. 部 落	天 北・猿 払	23	0.67	32 (1957)
新 内 部 落	十 勝・新得町	11	0.75	“
ニセパロマナイ部落	上 川・士別町	21	0.90	33 (1958)
赤井川 A. B. 部落	後 志・赤井川	50	1.00	34 (1959)
計	-	185戸	-	-

既 存 農 村 名	所 在	調 査 部 落 数	調査農家数	調 査 年 度
前 田 村	後 志・岩内町	4部落	83戸	昭和29年(1954)
発 足 村	後 志・岩内町	2 “	54	“
仁 木 村	後 志・大江村	4 “	30	“
大 野 村	函 館・大野村	2 “	77	30 (1955)
計	-	12部落	244戸	-

調査対象にえらばれた地点は以上の如くであるが、各地点の特色や各開拓部落の一般的な特色については、後に部落社会別に連帯性の特性を分析する項において明らかにすることにする。ただ2、3の点について選択理由を明らかにしておかねばならないことがある。地点の選定に当つては、前述の如く北海道における典型的な開拓地をえらぶということを

基準にして来たが、この中には、現在開拓部落とは云えない様な特殊な地点が介入したことを無視することは出来ない。「新内」がそれで、十勝の狩勝峠のそばにあるこの開拓地区は、極めて戸数が少く、たとえ部落ということが許されるとしても、他の開拓部落にくらべれば、可成り問題のある所である。それでいて入植は戦前になされており、現在はその残留者と、戦後の僅かばかりの入植者によつて占められている。何故にこの様な中途半端な開拓地を対象にえらんだかが問題となるが実をいふと、北海道の開拓地には「新内」の如き性格を持つ開拓地が案外多いのである。「新内」はその一例であつて、一面の代表性をもつ地点であり、このような意味から「新内」とりあげることにした。

また、既存農村についてであるが、この選択には、地域性及び歴史性及び土地利用経営様式等々の一般的特色をにらみ合せて特色のあるものを最少限にえらんだ。即ち「前田村」は、本道にみられる水田稲作、畑作の混作形態をとる最も普通の農村であり、かかる意味において代表的である。「仁木」は果樹園（リンゴ・ブドウ）を経営する農家が大部分を占める農村であつて、その生活水準は可成り高い。「大野」は本道でも最も古い稲作農村の一つであると共に、極めて府県的色彩が強いと云われている所である。また「発足」は現在前田と合併になつているが、開拓と既存とが融合した農村であり、又極めて古い農家と比較的に新しい農家とが混合した形の農村であつてこの点特色がみられる。この様な理由により、各地点をそれぞれ既存農村の典型的なものとしてえらんだわけであるが、既存農村における調査対象農家の選択は前述の如く、先ず部落をえらび後に農家を random sampling するという方法をとつた。

また、実際の調査においては、現地関係者の協力を前提とした外、各農家に対する interview は既に予備的な訓練を施した北海道大学農学部^{ハツタリ}の学生をしてこれに当らせた。調査は原則として、農家の世帯主を対象し、不備な調査については、現地滞在中にこれを発見し、直ちに補完調査を実施して、完璧を期した。又、年度によつて多少異なるが大体において、他の調査と一緒にこの調査を行い、1人1日2～3戸を聴取る様にデザインした。大体30分位で、全部の項目についての聴取りが出来るようにしたが、実際には、質問を契機として問題外の事について演説をうつ様な農家があつたりして、なかなか予定通りには行かなかつた。

次に触れなければならない問題に、対象農家の選択戸数の問題がある。調査は悉皆調査をむねとしたが、それが出来なかつた所もある。しかし粗雑な調査よりは綿密な調査を期待し、出来る限り間違いない調査を能力の許す範囲内で展開することにして無理に戸数を追わないことにした。

以上の如く、この調査対象の選択の手続には若干の問題が残っている。しかし、このことは、この調査研究の価値を全面的に否定することにはならないのであつて、この様な制約を前提としても分析は不可能ではないと思われる。

第2節 妥当性の検定

——内的一致性の吟味による各問分析——

尺度化の操作において、最も重要なのはこの尺度文章に対する妥当性の検定の問題であろう。この検定は、各問分析の形において展開されるが、それは尺度を構成している各尺度文章（各問）が、果して等質的に或る共通の次元において作用しているかどうか、そこに大きな誤差を生じさせる様なものがないかどうかを確かめる手続に外ならない。いまもし community solidarity の方向に対し、肯定的な意識の持主も、否定的な意識の持主も、全く同じ様な反応をしめすが如き尺度文章があつたとすれば、この様な尺度文章は弁別力がなく、むしろ反逆的な作用をもつ項目と云わねばならぬから、これを排除しなければならない。そして、各問が一貫して1つの目的を果す様に、所謂「内的一貫性」、「内的一致性」(internal consistency)を求めて行かねばならない。この吟味が所謂各問分析による尺度の妥当性の検定操作に外ならない。

もつとも、本研究に関する限り、既に Fessler は彼が設定した40の尺度文章について妥当性の検証を試みているし、また本研究において修正した尺度文章も、原文と大差はなく、更には、妥当性の高いものにする為に修正したのであるから、ここで妥当性の問題を取り上げる必要はないと云へるかも知れない。しかし、ここで取上げる問題は、爾前に配慮した妥当性を高めるための措置が、実際に於て果して予期した如く、妥当性のあるものであるかどうかを、統計的に吟味することがらに外ならない。少くとも Fessler が実施した調査の母集団と、我々が実施した調査の母集団とでは、種々なる類似性があるにも拘らず、全く同一のものではないから、この妥当性の吟味は不可欠となるのである。そこで以下この点について検討する。

Ⅰ 尺度の内的一致性

妥当性の検定は、必ずしも「内的一致性」(internal consistency)の吟味による方法に尽きるものとは思われないが、一般にはこの方法が最も広く用いられている。これを「内的一貫性」「内的緊一性」等々という人もいるが、いずれにしても、それは、尺度を構成

している各尺度文章（各問）が一貫して1つの連続体（continum）を測定しているかどうかという、構成尺度の内面的な1次元性（ini-dimensionality）の所在を吟味する操作に外ならない。このことを基調として、尺度化の理論と実際とが可能になつてくるのであつて、かかる意味においてもその重要性は少くない。

就中、community solidarity の如く、或る観念的には考えられるが、具体的に目に見えない事柄について、これを量的に測定しようとする様な問題については、別に或る外在的な規準に照して結果を判断することが出来ないから、その内的尺度そのものの妥当性を検定する方法としては、この内的一貫性の吟味の方法がただ1つの可能性をもつた方式と云わねばならない。既にアメリカでは、社会経済的地位の測定、兵士の志気、黒人に対する態度等々の測定が行われているが、これ等はいずれも或る観念的に考えられることを、量的に測定しようとするものであり、連帯性の測定の場合と同様に、その妥当性の存在を明らかにする規準を外的尺度に求めることは困難であるとされている。ただ、前述した Jansen の Family Solidarity の測定においては、この規準を外的規準（external criterion）に求めて問題を処理しているので、例外と云いたいほど珍らしい事例と思われる。community solidarity についても、これに関係ある定性又は定量的な標識を外的に求めることが出来れば、この外的規準によつて測定された結果と、この尺度によつて測定された結果とを比較し、両者の相関係数或いはこれに代る統計値をもとめて、これによつて妥当性を吟味することが出来る。しかし残念なことに、community solidarity の場合にはこれについての他種の尺度がまだ構成されていないので、外的規準による妥当性の検定は出来ないのである。

またこのような外的規準が、仮にあつたとしても、さらにその外的規準そのものの妥当性が、他の如何なる外的規準によつて与えられたかという風に設問して行くと、結局、遂には外的規準によつては問題を処理することが出来なくなつてしまう。

ただ、研究者の合理的な判断や、1群の適当な判定者、有識者等の参与による判定を求め、これと一致するかどうかによつて判断する方法はあると思われる。しかし、この方法も厳密に云うと補助的手段にすぎないし、またこの様な措置は、出来れば爾前に講じて、尺度文章の作成に際して万全を期すべきものとも思われる。

従つて尺度の一次元性を高める方法としては、この場合、内的一致性による吟味の方が優つており、また残された唯一の方法と考えられる。

このような理由から、本稿においては、その各問分析については、内的一致性による吟味の方法をとることにした。

内的-一致性を吟味する最も普通の方法は“good-poor analysis”と云われているものである。これは測定しようとしている量的特性との相関が高い項目（尺度文章）のみを尺度内に採用しようとするものであつて、その手続は次の如くである。まず、尺度に組み入れようとする1群の項目（尺度文章）に対して任意のウェイトを与えその合計をもつて仮のスコアとする。或る項目が、他の大多数の項目と内的-一致性があるならば、その項目について肯定的に反応し、高い点数をとる者の割合が多くなる筈である。そこで仮のスコアを大小の順にならべ、被調査者に順位をつける。次にその上位1/4と、下位1/4とを取り出す。上位のグループにおける方が、下位のグループにおけるよりも検定しようとする項目（尺度文章）についての反応の肯定率が大きであるならば、この項目は、項目全体のもつ傾向に平行しており、内的-一致性があると認められる。

しからば、この上位のグループにおける肯定反応者の比率と、下位のグループにおけるその比率との差をどの様にして検定すべきであろうか。その方法としては、両者の差を「 χ^2 」検定によつたり、「 ϕ 係数」（ χ^2 を標本の大きさNで割り、平方に開いたもの）を求めてみたりする方法がある外、「臨界比」（critical ratio）による方法、及び「二系列相関係数」による方法などがある。また R. Centers は“tetracholic correlation coefficient”をとりあげた。この方法はn個の項目があつた時、その1つの項目に注目して他のn-1個の項目と tetracholic correlation のを求め、その係数の平均値を求め、その平均値の大きい項目だけを尺度としてとり上げ、これを全項目について繰返す方式のものである。

これ等の方法は、いずれも一長一短がある。しかし、最も無難なのは上記の「臨界比」による方法で、この方法はt検定やF検定よりも可成り厳しい検定法である。t検定やF検定では、甘すぎて効果がない。

これ等はいずれも good-poor analysis における検定法の例であるが、所がこの good-poor analysis による項目分析には、それ自体幾つかの欠陥がある。この欠陥については既に R. F. Sletto, Louis Guttman 等によつて指摘されている。Sletto が指摘したこの good-poor analysis についての欠陥は G. A. Lundberg によつても認められているが、今彼が要約した所によつてみると、その欠陥とは次の如きものである。⁽²⁾

- (1) 標本が小さい時は、各項目の弁別力の大小に偶然誤差が大きく作用するおそれがある。
- (2) 標本の大きさと、項目の数とが小さい場合には、項目の弁別力の測定に際し、その項目がはじめから尺度中に含まれている為に、その項目の弁別力に大きい誤差を招く

かも知れない。

(3) 1つの尺度における全項目に対する臨界比がたとえ統計的に有意であつても、それはすべての項目が単一の共通因子を測定していることの保証にはならない。

この3つの欠陥は、なるほど、この種の検定方式のもつ共通の弱点であろう。しかし、この欠陥は、それ故に、この種の測定を不能にするほど絶対的な欠陥であるとは思われない。何故ならば、第1の欠陥については、大標本をとることによつて解消されるし、第2の欠陥については、Sletto が案出した「置換増分」(displacement increment) による補償法を適用することによつて解決されるからであり、又、第3の問題については、因子分析(factor analysis) を展開することによつて解決される途があるからである。

これを本稿における尺度についてみれば、尺度文章の数は決して少なすぎる様なことはないし、又標本の数も充分であるので、第1、第2の問題はさほど憂慮する必要はないであろう。第3の問題、すなわち項目要素の共通性の問題であるが、今のところ予め様々な尺度を他に求めて因子分析を行うことは出来ないが、1つ1つの項目を尺度と見做しながら因子分析を試みる事が出来るから、これによつて問題を或る程度解消することが出来る、しかしこの因子分析による解決法には全く異存がないというのではない。相関係数を求めて相関行列を作る因子分析の方法は、保証しがたい仮定が含まれている為に、この方法によつてしたならば、用いられる相関係数の種類によつて結果が一致しなくなるという可能性があり、この様な場合は如何ともしがたい。

之を要するに、定性的標識に対する因子分析の問題は極めて面倒な問題であつて、今後の研究にまたねばならない所が少くない。ここでは、この問題を後日に譲ることとし、一応 good-poor analysis の方式をとり入れ「臨界比」による検定を展開することにした。蓋しこの方法が最も容易であるからであり、又信頼のおける方法でもあると思われるからである。

Ⅱ 臨界比による検定

(1) 方法

設定された尺度文章を実際に予備的に適用して求められた資料を素材として、先ず、標本中の相異なる4半分(27%)をとり、両者間に最も大きな差を生ずる項目(尺度文章)が弁別力のある有効な項目として選ぶことにする。この操作を行うために、全調査票を総スコアの高低別に順にならべる。次にこれを2分して更に略々平行になる2つの調査票の群を作る。次にその1群を総スコアの高い順に配列し、上位27%(第1分限) 下位27%(第

4分限)をとる。両者の中間は当然2分されて第2分限と第3分限とが作られる。この操作が終つたならば、次に各項目(尺度文章)につき、上位群をしめるものが取得したスコアと下位群(第四分限)をしめるものが取得したスコアを、それぞれ平均値として算出し、各平均値の「有意差」を検定する。検定の結果、有意差のない項目はチェックする。

次に、このチェックされた項目を今1度検定にかける。はじめに2分した群のまだ使っていない群について、このチェックされた項目のスコアをとり、その標準偏差と分散とを計算し、これによつて信頼係数(r_y)を算出してみる。この信頼係数は、はじめに使つた群についても計算し、これを r_x とする。 r_x と r_y とを比較してみて、 $r_x < r_y$ であるならば、項目に妥当性がないものとして、この項目を尺度から削除することに決定するが、 $r_x > r_y$ であつたならば、この項目はまだ有意性があるものとして削除を保留する。

従つて、この方法では、項目の検定は、最初不合格になつたものについては再度の検定が行われることになる。

次に、この検定における平均スコアの有意差の算出方式、信頼性係数等々の算定方式を明らかにしておく、次の如くである。

(1) 有意差(2つの百分率の差の標準誤差)

$$\sigma \text{ difference} = \sqrt{\sigma_{p_1}^2 + \sigma_{p_2}^2}$$

(2) 臨界比(critical ratio)

$$C.R. = \frac{\text{2つの百分率の差}}{\text{(1)における差の標準誤差}} = \frac{\text{差}}{\sigma \text{diff.}}$$

(3) 信頼性係数(τ)

$$\tau = \frac{n}{n-1} \left(1 - \frac{\sum v^2}{\sigma x^2} \right)$$

n = 意見の数 σx = 総 score の標準偏差

$\sum v^2$ = 各意見の分散の総和

この2つの平均値の差の統計的検定法については標準的な統計学や社会調査の本に屢々述べてられているので、ここでは、これ以上の説明をくりかえさない。⁽³⁾

尚、前述した如く、臨界比による検定法以外の方法として、本研究では χ^2 検定、 t 検定、 F 検定もあわせて実施してみたが、いずれも甘すぎて使用にたえなかつた。

(2) 検定の結果

臨界比による項目(尺度文章)の有意性の検定結果は次表に掲ぐる如くである。この検

定に当つて、その母集団をなした標本数は151戸であつて、その内訳は次の如くである。

大 与 地 29戸 新 内 11戸 知 床 17戸
 ニセバロマナイ 21戸 鬼 志 別 23戸 赤 井 川 50戸

第3表 臨界比による項目検定結果

I. COMMUNITY SPIRITS

尺度文章 No.	上位限sd 〔 〕平均	下位限sd 〔 〕平均	スケールの d の 値	平均との差	合 否	再検定 結 果
No. 5	2.5884 〔4.107〕	1.1224 〔3.50〕	0.95	0.60	不合格	不合格
13	0.7399 〔4.45〕	1.1361 〔2.75〕	0.60	1.70	合 格	-
21	1.0618 〔3.65〕	1.0049 〔2.30〕	0.67	1.35	"	-
29	0.8047 〔4.55〕	1.1874 〔3.70〕	0.65	0.85	"	-
37	0.6249 〔4.10〕	0.9631 〔2.85〕	0.52	0.27	"	-

II. INTERPERSONAL RELATIONS

尺度文章 No.	上位限sd 〔 〕平均	下位限sd 〔 〕平均	スケールの d の 値	平均との差	合 否	再検定 結 果
No. 1	0.7937 〔3.90〕	2.1089 〔2.55〕	0.50	1.35	合 格	-
9	0.4769 〔4.35〕	0.7078 〔2.70〕	0.38	1.65	"	-
17	0.7810 〔4.20〕	1.0049 〔2.30〕	0.65	1.90	"	-
25	1.2046 〔3.50〕	0.6826 〔2.20〕	0.65	1.30	"	-
34	1.0295 〔3.20〕	0.7483 〔2.20〕	0.57	1.00	"	-

III. FAMILY RESPONSIBILITY

尺度文章 No.	上位限sd 〔 〕平均	下位限sd 〔 〕平均	スケールの d の 値	平均との差	合 否	再検定 結 果
No. 6	0.975 〔3.75〕	0.7681 〔2.10〕	0.57	1.65	合 格	"

No. 14	0.955 [4.05]	0.9206 [2.45]	0.64	1.60	合格	-
22	1.045 [2.90]	0.8944 [2.00]	0.63	0.90	"	-
30	0.663 [4.40]	1.1079 [3.15]	0.57	1.25	"	-
38	0.647 [4.20]	0.6946 [1.95]	0.44	2.25	"	-

IV. SCHOOLS

尺度文章 No.	上位限sd []平均	下位限sd []平均	スケールの d の 値	平均との差	合 否	再検定 結 果
No. 2	0.8062 [4.10]	1.1180 [2.45]	0.65	1.65	合格	-
10	0.6689 [4.05]	1.2450 [1.35]	0.68	2.70	"	-
18	0.9000 [2.71]	1.0500 [2.00]	0.64	0.70	"	-
26	1.2083 [2.80]	0.3570 [1.15]	0.63	1.65	"	-
33	0.6689 [4.05]	0.9790 [2.80]	0.55	1.25	"	-

V. CHURCHES

尺度文章 No.	上位限sd []平均	下位限sd []平均	スケールの d の 値	平均との差	合 否	再検定 結 果
No. 7	0.7274 [3.35]	1.0720 [2.50]	0.55	0.85	合格	-
15	0.8881 [3.10]	1.1521 [2.65]	0.67	0.45	不合格	合格
23	1.0295 [2.80]	0.4680 [1.30]	0.54	1.50	合格	-
31	0.7348 [3.60]	0.8640 [1.95]	0.54	1.65	"	-
39	0.9219 [3.50]	1.3219 [2.45]	0.70	1.05	"	-

VI. ECONOMIC BEHAVIOR

尺度文章 No.	上位限sd []平均	下位限sd []平均	スケールの d の 値	平均との差	合 否	再検定 結 果
No. 3	0.9205 [3.95]	0.9003 [2.75]	0.60	1.20	合 格	-
11	0.8124 [4.20]	1.1153 [2.65]	0.65	1.55	"	-
19	1.0488 [4.00]	1.2788 [2.30]	0.77	1.70	"	-
27	1.3820 [2.70]	0.5726 [1.65]	0.65	1.05	"	-
35	0.9273 [3.80]	1.1272 [2.65]	0.68	1.15	"	-

VII. LOCAL GOVERNMENT

尺度文章 No.	上位限sd []平均	下位限sd []平均	スケールの d の 値	平均との差	合 否	再検定 結 果
No. 8	0.9949 [4.10]	1.2382 [2.55]	0.75	1.55	合 格	-
16	1.3711 [3.65]	1.6425 [2.05]	1.00	1.60	"	-
24	1.0715 [3.95]	1.7104 [2.45]	0.90	1.50	"	-
32	0.7683 [4.25]	0.9715 [2.45]	0.57	1.80	"	-
40	1.0085 [3.35]	1.120 [2.20]	0.65	1.15	"	-

VIII. TENSION AREA

尺度文章 No.	上位限sd []平均	下位限sd []平均	スケールの d の 値	平均との差	合 否	再検定 結 果
No. 4	0.7995 [4.05]	0.8826 [2.40]	0.55	1.65	合 格	-
12	1.0677 [3.60]	0.6689 [2.55]	0.60	1.05	"	-
20	1.2844 [3.85]	1.0399 [2.25]	0.75	1.60	"	-

No. 28	0.4582 [4.70]	1.0536 [3.95]	0.50	0.75	合格	-
36	0.7011 [4.30]	1.1874 [2.70]	0.65	1.60	"	-

第4表 信頼性係数による不合格項目の再検定

不合格項目 No.	上位限sd []平均	下位限sd []平均	スケールの d の 値	平均との差	信 頼 区 間		再 検 定 合 否
					上限	下限	
No. 5	0.6596 [4.11]	1.0908 [3.90]	0.62	0.20	0.82—0.42	不 合 格	
37	0.8029 [3.80]	1.0610 [2.65]	0.65	1.15	1.80—0.50	合 格	
15	0.9933	0.9165	0.75	0.85	0.10—1.60	合 格	

注 「上位限s.d.」——標本をA, B 2群に分けた場合, A群における上位限(全体の25%)のスコアのS.D.。[]内はスコアの平均値(5点満点)。

「下位限d.s.」——同上の方法による下位25%のスコアのS.D.。

「スケールのdの値」——「二つの平均の差を検定する図表」における値。

「平均との差」——上位限のスコアの平均と下位限のスコアの平均との差。

第3表によつて明らかなる如く, 当初に修正を加えて作成した40項目の仮の尺度文章は殆んど, 有意性があると認められた。この有意性は, 本表の「スケールのdの値」の欄における数値と「平均との差」における欄の数値とを較べてみて,

「スケールの値」 < 「平均との差」

ならば, この項目(尺度文章)は, 弁別力のある有意な項目と判定される。逆に「スケールのの値」の方が「平均との差」よりも大きい時は, その有意性は疑わしいものと見做され, 一応尺度への採用を保留し, 再検定に掛けることになる。

第1回目の検定の結果, 不合格となつた項目は, 第3表によつても明らかなる如く, 次の3項目であつた。

- 1 No. 5 「部落の皆さんは, 貴方をとくに親切にしているか」
- 2 No.15 「宗教を信じている人が案外教へを守らないか」
- 3 No.37 「この部落の人達は, この部落が他人からどんな風にみられようと平気か」

そこで, この不合格になつた3項目について, はじめに2分した標本の未使用の1群に

ついて信頼区間の算定によつて再検定を施してみる。その結果は第4表（前掲）の如くであつて、No.5、No.37の2項目は合格となつた。

かくして、No.5の項目だけは2度目の検定においても不合格となつたので、この項目を、本尺度から削除することにし、残りの39項目をもつて本尺度を編成することになつた。

No.5の「部落の皆さんは貴方をとくに親切にしていると思つていらっしゃるでしょうか」という質問文章は、仮の実測即ち予備調査をした時から、最も懸念された項目の1つであつた。実際にこの質問を発してみると被調査者は、質問の意味がよくのみみ込めないらしく、直観的な反応を期待することは無理であつた。このような質問は、質問をする者にとつても、非常に聴きとりにくく、当然、その妥当性をはじめから疑われた。しかし、後に検定を実施するのであるから、この文章に項目としての妥当性がないならば、検定の時に爾後的に仕末がつく筈であると思ひ、果してその通りなるものであるかどうかを一度実験してみようという意図から、にこの文章を捨てずに残しておいた。

検定の結果は、最初から懸念されていた通り見事落第したので、我々は安堵すると共に検定そのものの効験が如実にしめされたと思つた。

このような次第で、No.5の尺度文章を除外し、残りの39項目をもつて尺度を構成したが、この為に、第1領域の community spirits のエリアだけは、項目(尺度文章)が4項目編成となつてしまつた。他のエリアはすべて5項目編成であるから、このエリアだけは、4項目を以つて、5項目にかわる働をさせることが必要となつてきた。この代替補正をどの様にして行ふかは、1つの問題であると思うが、ここでは便宜上、4つの項目の取得スコアに1.25という指数を乗ずることによつて一応問題を解決することにした。新たに代替項目を作る必要もあるが、これは今後の課題とし、ここでは、以上のような処理を施して、先へ進むことにした。

臨界比による尺度文章の妥当性の検定は以上の如くして、一応の結論が出たので、検定に合格した39の文章について、改めてスコアを取り、連帯性の計測に入るのが次の仕事となる。しかし、ここで妥当性の検定とならんで、是非とも試みなければならない今1つの検定がある。信頼度のテストがそれである。

そこで、次にこの信頼度の検定についてのべることにする。

Ⅲ 信頼度のテスト

尺度のもつ信頼度 (reliability) は、妥当性の検定と共に、尺度の安定性を吟味する標

準的操作として極めて主要である。妥当性の検定とは、前述の如く、尺度化に際して作成された当該尺度が、果して測定しようとしている（目標にしている）当の特性を誤まらずに測定しているかどうかをテストすることであり、信頼度のテストとは、その尺度が尺度化計画の範囲内において、同一の被調査者に対して繰返し行われた場合、常に同様のスコアが得られるであろうかどうかを吟味することである。この2つの検定は、尺度の安定性を保証する上において非常に大切である。

信頼度は、普通「信頼度係数」(confidency coefficient)を求めてあらわされる。この信頼度係数は調査を2回繰返し、同一の条件のもとで、同一の対象に対し、同じ調査を繰返へして行つた場合、果して同一の結果が得られるかどうかを、2回以上の調査の測定結果の相関係数によつて求めるものである。その方法として、従来考へられているものに、

- (1) test retest method (反復法)
- (2) alternative-forms method (交替形式法)
- (3) split-half method (折半法)

の3つがある。このうち最も普及しているのが、split-half method であつて、この方法は、尺度文章を奇数番目と偶数番目の2つに区分し、両グループのスコア間の相関係数を求めて、両者の間に高い相関があれば、信頼度はあると見做す方式のものである。元來信頼度は、同じ調査を2度以上繰返えし、同一結果になることを期待して求められるものであるが、調査を2度以上繰返えすことが出来ないので、1回の調査によつて、2回調査したのと略々同一の比較が出来る様に考案されたのがこの折半法(半折法)である。

この split-half method による検定は Fessler 自身が既に試みたところである。

しかし、この方法によれば、尺度文章を2分するから、半減した形において検定を試みることになるので、充分とは云えない。そこで、この半減のもたらす欠陥を補うために、Sperman-Brown は、一つの補正式を創案し、これによつて問題を解決しようとした。この方式を Sperman-Brown の公式と云つている。

ところが、奇数と偶数の組合せは、標本の構成の仕方如何によつていくらでも変わるからこれをたつた1回のテストによつて代表させることが果して許されるかどうかが問題である。Sperman-Brown は、2部分(group)間の分散の「相等性」を仮定し、これを前提としているから、この補正式の存在理由があるが、しかしその前提になつている仮定はあくまで仮定であつて絶対的ではない。

折半法にはこのようなところに問題が残されているが、これ等はむしろ統計学的に厳密

を期する場合における問題であつて、実際においては、この折半法によつて問題を処理して大過ない。

従つて、ここでは、この折半法によつて、信頼度の検定を試みる。ただ、前述の如く、本稿における連帯性の尺度文章は8つのエリアに分かれ、各エリアごとに原則として5つの尺度文章が割り当てられている。各エリアごとに、尺度文章にNo.をつけて、これを奇数群と偶数群とに分けたのでは、各群の項目数があまりにも少なすぎて意味がないと思われる。さればと云つて、40の尺度文章を通して、奇数、偶数群に分けて検定を試みるということになると、各エリア別の信頼度のテストが出来なくなるおそれがある。そこで、この連帯性の測定尺度の場合においては、普通の split-half method を直接適用することには問題があるのでそれ以外の方法によつてテストを試みなければならない。

Split-half method には色々な変形がある。例えば、無限回の繰返しを予定し、これに対する推定値をもとめる方式をとつた Guttman の方法や、これとは違つた意味の信頼係数をもとめることを考えた Kuder-Richardson (この方法は split-half method の欠陥を補正するための方法ではあるが折半法ではない) の方式、或いは、split-ballot method 等なぞがその例である。しかしこれ等の方法はいずれも長所はあるが、それぞれ弱点をもつている。就中、この split-ballot method の如きは、標本を全く同質的な2群に分割し、内容は同じだが質問文章の言葉づかいや順序、或いは「前口上」等々を異にした A. B. 2種の質問票を作成し、これを各群に適用して、その結果を比較検討する方法であつて、極めて妙をえている。しかし、この方法をとるならば、本研究の場合は最初から調査をやりなほさねばならないことになる外、A. B. 2種の質問票の作成、各問の妥当性の検定その他に大変な手間をかけなければならないので、本研究の場合には適用するだけの余裕がなかつた。

またこれ等の変形はいずれにしても、エリア別に信頼度をテストする場合方法としては適當ではない。

そこで、我々は、一応普通の split-half method を用いて、信頼度のテストを施し、後に、試案として、その変形を創案し、これによる検定を合わせて実施する方法をとることにした。

今、普通の split-half method による信頼度のテストを行つて、これを Sperman-Brown の公式にて補正した結果を明らかにすると

信頼度係数 (Sperman-Brown)

$$r_s = 0.975$$

となつた。これは1.00に近いほどよいので、これによる信頼度は充分存在すると認められる。

次に、予備的に試案として適用したテスト法と、その検定結果についてのべると次の如くである。

先ず、考え方の問題であるが、前述の如く、信頼度とは、尺度そのものが、常に同一対象を同一条件にて繰返し適用された場合、常に一致した結果が得られるその一致の程度を意味するものであるから、この原則を満足させ得るような方式を考えればよいことになる。split-half method は、その便法として1回の調査によつて、この原則を満足させる方法であるが、これは前述の如く、項目を2つの群に合け、両群を使用することによつて、あたかも2回の調査を行つたと同様の結果を期待しようとするものである。ここで我々が考へた方法は、項目ではなく、標本を任意に2つの群に分け、この2つの群を使用することによつて地点別に信頼をとる方法である。この方法によれば、領域別に信頼度を検定することが出来るので、1つの長所がある。

まず、尺度文章に任意に番号を付し、奇数群と偶数群とに2分する。次に両群間におけるスコアの相関係数をとつて、無限の組み合わせによる結果に近かずける為にその為の補正式である Sperman-Brown の補正式を借用して信頼係数を求める。この場合、標本が奇数群と偶数群とに分けられるが、この2つの群が、それぞれ同じ様な性格をもつた母集団であれば、各群における各項目に対するスコアの取得の傾向は同一のものになる筈であるから、この仮説にもとずき、1回の調査で、性格を等しくする2回の調査を行つたのと同じ結果となる訳である。ただこの方法では、標本に対する番号の打ち方が、幾通りもあり、それによつて母集団の構成も変つてくるから、これを1回の区分によつて代表させるところに無理がある。しかし、分割されて出て来る2つの群は、あくまでも、最初の標本と同じ性格のものであることが必要とされ、その様な性格の2群だけを使用すればよいことになるから、この問題はさほど意に介するにたらないであらう。

しからは、奇数群と偶数群との標本群がはじめの母集団と同じ性格をもつ群であるかどうかを吟味するには如何にしたらよいか。これを統計的に処理するには「分散によるF検定」と「平均値についてのt検定」の2つを併用すればよいであらう。ここでは、この2つの方法によつて、派生群の、もとの母集団に対する等質性を地点ごとに吟味することにしたが、所与の地点における標本数があまり小さい場合は誤差が大きくなるので、これを除く必要がある。結局429の標本中から、規模の小さな「新内」は除かねばならないから、これを除外した、418戸について、地点別に、奇数群と偶数群との等質性を検討することにした。

今、その検定を行った結果を1表にすると、第5表の如くである。

第5表 同一母集団の2分割による等質性の検定

地点	分散による F 検定				平均値による t 検定		
	自由度	Fの値	Fの5%水準	比較	tの値	自由度	5%水準のtの値
鬼志別	11	1.236	2.80	<	0.916	< t [22. 0.05]=2.07	
大与地	13	1.481	2.60	<	0.683	< t [26. 0.05]=2.06	
ニセパロマナイ	9	1.616	3.18	<	1.054	< t [18. 0.05]=2.31	
知床(岩尾別)	8	1.002	3.44	<	1.750	< t [16. 0.05]=2.12	
赤井川	24	1.895	2.00	<	1.486	< t [48. 0.05]=2.01	
前田	40	1.309	1.69	<	1.207	< t [80. 0.05]=1.99	
大野	37	1.411	1.81	<	0.266	< t [74. 0.05]=1.99	
共和	8	3.338	3.44	<	0.082	< t [16. 0.05]=2.01	
拓北	6	3.056	4.28	<	0.218	< t [12. 0.05]=2.18	

(奇数群と偶数群との2つの集団のF検定, T検定による同一性の吟味)

第5表によれば、1つの母集団を2つの群に任意に分割した場合における、各派生群の同一性の比較は「分散」と「平均値」の2つをとつて吟味されているが、9つの地点すべてに於て、分散、平均値についての検定の結果は、派生両群間に有意な差のないことを示めしている。派生両群間に有意差のないということは、両群が非常によく似た構造をもつた集団であるということの意味する。いまもし、奇数群と偶数群とが同様の性格の母集団であるとすれば、各群をそれぞれ単独に使つて信頼度をしらべることによつて、1回の調査で2回の調査による検定を行ったとはほぼ同様の結果が得られることになる。更にまた、2群が同一性に富んでいると認められる以上、連帯性をめぐる各項についての取得スコアもつの略々同一のものとなる筈であり、もし同一のものに近づくならば、尺度に信頼性はないということになる。しからは、果して、両群のスコア間にはこの様な一致性が認められるであろうか。

今、地点ごとに、奇数(A群)と、偶数群(B群)との2つの母集団相互における連帯性をめぐる測定値の的一致性向を確める為、両者のスコアの相関係数をとつて、更にこれを Sperman-Brown (S-B.) の公式によつて補正してみると、次の如くなる(第6表)。

第6表の信頼度係数によれば、いずれの地点も、信頼度係数は高く、殆んど1.000に近い数値になつて出ている。もともとこの係数は、1.000に近づくほどよいのであつて、私見によれば、恐らく0.900以下であつては信頼度は認められないであろうと思う。しかるに本表ではそれ以下のものは全くないから、この手法による信頼度は充分であると認められる。

第6表 2群分割法による信頼度係数

地 点	S. - B. 信頼度係数	2群の 相関係数
鬼 志 別	0.985	0.971
大 与 地	0.998	0.996
ニセパロマナイ	0.995	0.992
岩 尾 別	0.965	0.932
赤 井 川	0.970	0.942
前 田	0.988	0.974
大 野	0.993	0.986
共 和	0.983	0.967
拓 北	0.964	0.931
Ave.	0.982	0.966

この方法を「一応「2群分割法による信頼度の検定」と称しておくが、この方法は明らかに split-half method の変形である。この方法によつてこの尺度におけるエリア別の検定を試みることも出来ると思われ

るが、ここでは、その算定を省略する。
しかし、この方法は、全くの試案であつて、充分なものとは云えないと思う。将来更に、理論的にも統計的にも考察を深めて、より完璧なも

のにする必要が痛感されるが、ここでは一応参考迄に試験してみた。

註 1 藤巻道夫著「糸魚川市が行つた職場意見調査、職務満足度調査」広告研究

1959年6月号 全国広報研究会刊。

註 2 ランドバーク著、福武直・安田三郎訳「社会調査」1953年 335頁 東大出版会。

註 3 村田宏雄外共著「社会調査の技術」昭和30年 260~262頁参照 誠信書房。

註 4 5項目編成のエリアにおける数値を、4項目で代替させる為には、爾後の操作においても、適当な補正を行わねばならない。1.25倍式の適用は先ずもつて止むを得ない方法であらう。

第4章 開拓社会における測定結果

序 説

前章において、開拓社会における農家の社会的連帯性を測定するために必要な尺度化をめぐる予備的諸手続について検討した。その結果、ここで改訂した尺度文章は、40項目中1項目をのぞいていずれも尺度文章として有効なることが、統計的にも略々確認することが出来た。

そこで、次には早速この尺度によつて開拓農家の連帯性を測定する仕事に入り、その測定結果を明らかにしなければならない。本章においては、この測定結果を明らかにする仕事に当てるが、ここであらかじめ、分析の基礎になる新単位「連帯度」の設定についてすべてしておくことにする。

第1節 単位「連帯度」の設定

云う迄もなく、計量的方法は事象をば合理的な「単位」によつて分析するところに妙味があり、またそれを本来の使命とするものである。単位は従つて、分析の道具として極めて主要な要素をなすものであり、分析の成果は、かかつてこの単位の有効性如何にあるとも云える。単位が小さく、しかも精密なものになればなる程、計量分析そのものの精度も高くなり、かつ純粋なものとなる。精度が高まるとか純粋なものになるということは、単位の設定によつて、観察の対象となる事象の側面が、現実の他の諸々の側面から見事に切り離されて、或る限定された形において把握されるからである。かかる意味から、単位の設定は、対象がもつ現実的な具体性や複雑性に対立しながら、不必要な要素を捨象し、これを抽象的な形に転換し、更にこれに対する分析思索の純粋性を高める上からして必要欠くべからざる操作である。

尺度化によつて *community solidarity* を実測しようとする場合においても、単位の設定の必要なことは云う迄もない。合理的な単位を設定しなくては、雑然とした調査結果を整序することが出来ないばかりでなく、せつかくの調査結果を詳細に分析することも出来ない。対象の比較は、特性把握の手段として、科学的に最も主要性をもつた方法の1つであるが、これとて、すぐれた単位による整理が行われていなくては容易に行うことは出来ない。ことに、地点別、部落別に *solidarity* の相違を比較しなければならない課題を

先天的に担っているこの種の研究の如きにあつては、連帯性の程度を表示する単位の設定は不可欠である。

既に述べた如く community solidarity の測定において、Fessler はその測定結果の表示法として「八角形図表」による手法を創案した。この方法は、測定結果を地点別に表現する方法として、とくにその特性を「視覚」に訴えてあらわすものであつて、そこには一応興味に値するものがある。しかし乍ら、結果を、図表に描き、これを見る人の視覚に訴へて判断させる方法では必ずしも正確を期することが出来ない。見方によつて判断も異つて来るし、また詳述な点については、これを図表にあらわすことは出来ない。まして、数個の部落についての連帯性をエリア別に比較したり、全体として比較したりする問題になると、この図表では大体の相違しかわからず、精密な比較分析は殆んど出来ない。

この欠陥を克服し、測定結果の比較分析を可能ならしめるためには、どうしても、連帯性の強度をしめす単位の設定が不可欠となる。

そこで、本稿においては、この要求をみたす為に Fessler が与えなかつた連帯性の強度をあらはす新しい単位を設定し、これによつて、爾後の分析を容易ならしめるようにつとめた。

既述の如く、連帯性は調査地域社会において農家が取得した各尺度文章における反応のスコアの平均値と、標準偏差との2つの要素をからみ合せて把握するものである。この2つの要素をからみ合せて連帯性をみるということは、当然この2つの要素の相関値をもつて連帯性をあらわすことを意味する。Fesslerは この「からみ合せ」を図表に対する視覚による判断にゆだねているが、しかし、図表をよく見ていると、次の様な疑問が生ずる。例へば、「平均値が高く、標準偏差も大きい場合」、「平均値は低いが、標準偏差が小さい場合」とでは、一体どちらの方が連帯性が強いのか、一該には判断しかねる。即ち、尺度文章に対する反応の category とその scale value は、好ましい反応が5点であり、好ましくない反応が1点となつて、連続しているから、好ましい反応の多い場合は、平均値は高くなるが、しかし、意見のばらつきをあらわす標準偏差(S.D.)、或いは Sigma Distance は平均値の高低によつて決定されることなく様々の形をとつて現われるから、一体どちらが連帯性をあらわす決定因子なのか判らなくなつてくるのである。この疑問について、再び Fessler の考え方を想起して判断してみると、彼はどちらかと云えば「ばらつき」の程度をあらわす標準偏差や Sigma Distance が少なければ少いほど連帯性は高いとし、反応意見の志向性（好ましい反応か、好ましくない反応か）については、これをあまり重要視していない様である。

もし然りとすると、このような取扱い方は明らかに矛盾していると云わねばならない。何故ならば、好ましい反応とは、所与の社会における共通の行動規範や価値観を反映する個々の尺度文章に対して肯定的な態度をもつ場合に与えられるものであるから、成員全部が、これに肯定的に反応した場合には、最も理想的なまとまりがあると見るべきであるのに、仮に成員全部が否定の反応を下した場合も同様に、S.D. が低い故に同一のまとまりがあり、かつ連帯性があるとすることは、玉石混淆のそしりをまぬがれないと共に、最初の community solidarity の命題にも相反するのである。

そこで、反応の肯定性はこれを連帯性の要素から捨象することは許されないから、これと、意見の「ばらつき」をしめす S.D. とをあく迄も相関させた形において連帯性の強度をあらわすことが必須となるのである。

この要求をみたすべく、ここに創定したのが、「連帯度」(solidarity degree) という単位である。それは次の如き関係から求められる。

先ず、平均スコアと S.D. との関係を次の5つの類型におさめる。

- (1) 平均値が高く、S.D. は低い場合
- (2) 平均値が高く、S.D. も高い(大きい)場合
- (3) 平均値は低く、S.D. は高い場合
- (4) 平均値は低く、S.D. は低い(小さい)場合
- (5) 平均値も、S.D. も高くも低くもない場合

この類型において、連帯性の強度の最も高いと考えられるものは(1)の「平均値が高く、S.D. は低い(小さい)場合」であり、最も弱い場合は「平均値が低く S.D. は高い(大きい)場合」である。このことは、平均値とS.D.とを相関的に対決させることを意味する。これによつて連帯性の強度が決定されるとするならば、この対決を数量的に可能ならしめる方式を設定すれば、単位がとれることになる。その方法として、

今、もし S.D. をとりあげ、これを2乗した(sigma distance)値を、スコアの平均値と対比させ、その比率が1対1になる点を考えるならば、この点は、あまりにも S.D. が大きく、平均値はこれに敗けてしまう状態を意味するから、一応この点をもつて、連帯度の最も弱い「O点」に当るものとする仮定をもうけて次の如く公式化することができる。

即ち、

$$\begin{array}{c} \text{連帯度 (Solidarity Degree)} \\ = 1 - \sqrt{\frac{\text{S.D.}^2}{\text{Ave. Score}}} \end{array}$$

である。

これは、標本における分散の程度(S.D.²)を平均スコア(Ave. Score)に対比させ、その

比率を平方に開いて、これを1.0より差し引き、残った数値をもつて連帯性の強度を表示する指数とするものである。

この方式によれば、「ばらつき」が少く、平均スコアの数値(25.0より高くならない)が高くなればなるほど、指数の値も1.0に近くなってでる。しかし、低い方は0.0以下にもあらわれる可能性があるから、マイナスの連帯度が出る。すなわち、S.D.の値が非常に大きく、平均値が極端に低い場合、連帯度は負の指数となつて出る。この負の連帯度は、当該社会における成員が、所与の規範に対して極めて不統一で低位な評価しが与えていないことを意味し、場合によつては、非連帯的傾向をもつおそれがあると判断される性質のものである。

連帯性の強度をあらわす単位として、我々は「連帯度」の算出方式を、以上の如き方式の設定によつて求められる数値によつて表現しようとした。しかし乍ら、この単位における0点は絶対的^{ゼロ}ではなく、相対的に固定された0点に過ぎない。と同時に、この単位の表現には、次の如き約束が含まれている。即ち、

この単位によれば、平均値が或る程度大きく、S.D.が或る程度小さい場合における連帯度と、その逆の場合とでは、或る点において均衡し、連帯度は等しい数値となつてあらわれる。

例えば、

連帯度

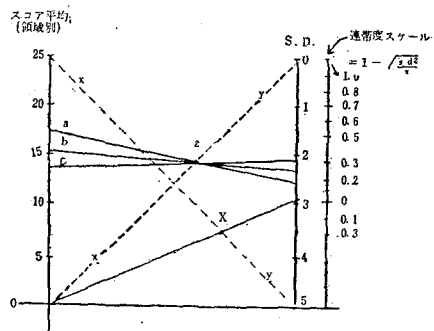
- | | | | | | | | |
|-----|----------------|-------|-------|------|-------|-------|------|
| (1) | 領域 score (平均値) | 16.8, | S.D. | 2.53 | | 0.38 | |
| (2) | " | " | 15.4, | " | 2.43 | | 0.38 |
| (3) | " | " | 13.6, | " | 2.28 | | 0.38 |

の場合、各々の連帯度はいずれも0.38程度となり、3つの数値のもたらす連帯度はほとんど同じものになる。(1)は(3)より

も平均値は高いが、S.D.は大きい(ばらつきが大きい)から、従つて平均値は低いが、ばらつきのあまり大きくない(2)(3)の場合と連帯度はほぼ同じになつてしまうのである。

今この関係の一般式を図示して考察してみると、次の如くである(第2図)。

第2図 「連帯度」の特性



第2図は、連帯度の特性をしめしたものである。今、 a, b, c , 3つの場合につき、それぞれ、領域別の連帯スコアの平均値と標準偏差 (S.D.) とが異なると仮定し、左軸に平均値 (score) をとり、右軸に S.D. をとつて対決させ、更に右に連帯度をしめすスケールをとる。次に、 a, b, c , 各平均値と a, b, c , 各 S.D. とを左右各軸に求めて、それぞれこれを直線にて結ぶ。一方領域別スコアの軸における最高点 25.0 と S.D. 軸における最低 5.0 の点並びに領域別スコア軸における最低点 0 と S.D. の最高 0 をしめす点とをそれぞれ直線にて結び $x'y'$, xy とする。すると、前に引いた a, b, c , の線は xy の線と交叉するが、この交叉点がほぼ一点に集中する。この点を z とし、 z 点が右軸の連帯度のスケールにおいて、何点をしめすかを讀むと、ほぼ 0.3 ということになる。同様にして、平均値が 12.5 以下の場合には、 $x'y'$ と交叉する点は求め、この点を X 点として、右のスケールで讀んでも、同様の値が期待される。

この様にして、連帯度には、これを規定する平均値と S.D. との値が相互に異なるのに、或る点において連帯度が等しくなるという欠陥がつきまとつている。

しかし乍ら、私見によれば、ここで定めた連帯度なる単位は、連帯性のスコアと意見のばらつきの相関値として、連帯性の相対的な強度をあらわそうとするものであつて、その値は絶対的な強度ではない。また、この連帯度に、この様な欠陥があるからと云つて、比較分析の単位として全然利用価値がないと断定する必要はない。要は、このような特性をあらかじめ充分考慮に入れておいて、単位を活用することが肝要であると思われる。

これを要するに「連帯度」は所与の community における望まれたる価値観念或いは行動規範に対する成員の肯定的意識をめぐるとまりの程度を、平均スコアと標準偏差とを相関させて数量化したものであるということが出来る。これは連帯性の強度を或る程度あらわすものであるが、それには連帯性の本来の意味を前提としてその値を解釈することが必要であつて、かくしてこそ、この単位は連帯性の比較分析の用具として有効性を発揮するのである。

そこで、次にこの単位を使つて、開拓社会における連帯性の実測の結果を明らかにしてみよう。

第2節 連帯性の測定結果

尺度化による連帯性の測定結果について、ここでは開拓社会における連帯性の特色を、既存農村におけるそれと比較において検討するために「開拓の部」と「既存の部」とを一応分けて検討することにする。

先ず、開拓の部における調査地点及び調査農家戸数であるが、それは、前述の如く、十勝、大与地開拓部落(29戸)、新内開拓部落(11戸)、共和開拓部落(18戸)、拓北開拓部落(18戸)、斜里、知床半島、岩尾別開拓部落(33戸)、天北、鬼志別、A B開拓部落(35戸)、上川、ニセバロマナイ開拓部落(24戸)、後志、赤井川、常盤・落合開拓部落(50戸)の8地点よりなつており、その総調査戸数は185戸である。

次に、既存の部における調査地点及び調査対象農家戸数について、重ねて明らかにすると、函館の大野村(77戸)、後志の仁木町(30戸)、旧前田村(83戸)、旧発足村(54戸)であつて、4地点、244戸となつている。開拓、既存合せた標本数は429となる。

次にこれ等の開拓、既存の両社会における連帯性の測定結果を地点別に明らかにしてみると、次表の如くである(第7表)(第8表)。

第7表

開拓部落における連帯性の測定値

地(部 戸 総 調 査	落 ス コ 時 期	点 名 数 了 期	領域別								Ave.	
			領 域 別 連 帯 値	I C.S.	II I.R.	III F.R.	IV S.	V C.	VI E.B.	VII L.G.		VIII T.A.
後 赤	井 (50戸)	志 川	Score	18.4	15.8	17.0	14.0	14.9	15.1	15.7	17.1	16.0
			S. D.	2.78	3.34	3.28	3.31	2.61	3.16	3.30	2.96	3.09
			連帯度	0.350	0.159	0.205	0.116	0.324	0.187	0.168	0.285	0.224
				<u>128.0</u> S.34								
知 岩	尾 (17戸)	床 別	Score	17.1	12.7	14.5	13.1	13.6	15.5	14.0	16.2	14.6
			S. D.	3.63	2.49	2.38	3.61	2.28	2.30	2.91	2.79	2.80
			連帯度	0.122	0.301	0.375	0.003	0.383	0.415	0.222	0.307	0.266
				<u>116.7</u> S.31								
十 大	与 (29戸)	勝 地	Score	17.3	14.7	15.4	13.9	14.7	15.3	15.1	16.8	15.4
			S. D.	3.13	3.06	2.43	3.13	1.36	2.49	3.14	2.53	2.66
			連帯度	0.248	0.202	0.381	0.160	0.645	0.365	0.192	0.383	0.322
				<u>123.2</u> S.31								
天 鬼	志 (23戸)	北 別	Score	17.8	15.7	14.7	12.7	13.0	15.6	14.6	17.3	15.2
			S. D.	2.80	2.11	2.68	1.83	2.56	2.59	2.79	2.15	2.44
			連帯度	0.337	0.468	0.302	0.487	0.289	0.344	0.270	0.483	0.373
				<u>121.4</u> S.32								
十 新	勝 内		Score	16.9	15.8	14.5	14.5	13.5	16.7	15.7	18.1	15.7
			S. D.	1.63	2.37	2.90	3.11	2.06	1.45	1.98	1.16	2.08
			連帯度	0.604	0.405	0.237	0.182	0.439	0.644	0.501	0.727	0.467
				<u>125.7</u> (11戸) S.32								

地 部 落 名 点 名 期 ア 期	領 域 別 連 帯 値	I C.S.	II I.R.	III F.R.	IV S.	V C.	VI E.B.	VII L.G.	VIII T.A.	Ave.
上 川 セ バ ロ マ ナ イ 121.1 (21戸) S.34	Score	17.5	15.9	13.6	13.3	12.1	15.1	14.8	18.8	15.1
	S. D.	2.26	3.42	3.14	2.68	3.01	2.02	2.71	2.69	2.74
	連帯度	0.460	0.143	0.148	0.267	0.135	0.480	0.297	0.379	0.289
十 共	Score	16.6	17.7	13.8	16.6	14.1	16.5	16.8	18.0	16.3
	S. D.	3.41	3.41	4.99	2.94	2.81	2.87	3.22	2.33	3.48
	連帯度	0.163	0.259	0.343	0.279	0.257	0.293	0.213	0.451	0.132
十 拓	Score	18.2	19.4	15.1	17.1	13.9	16.9	15.7	20.7	17.1
	S. D.	1.98	3.33	3.93	2.58	3.43	2.32	2.57	2.20	2.79
	連帯度	0.537	0.245	0.010	0.377	0.080	0.435	0.352	0.516	0.317
總 平 均	Score	17.5	15.9	14.8	14.4	13.7	15.8	15.3	17.9	15.7
	S. D.	2.70	3.18	3.22	2.90	2.52	2.40	2.83	2.35	2.76
	連帯度	0.353	0.208	0.162	0.234	0.319	0.395	0.277	0.441	0.298

第8表

既存農村における連帯性の測定値

地 農 村 名 点 名 期 ア 期	領 域 別 連 帯 値	I C.S.	II I.R.	III F.R.	IV S.	V C.	VI E.B.	VII L.G.	VIII T.A.	Ave.
函 大	Score	17.2	17.7	16.5	15.9	15.1	16.4	16.1	18.6	16.7
	S. D.	3.17	2.87	2.91	2.31	2.51	2.49	3.52	2.85	2.83
	連帯度	0.236	0.317	0.283	0.421	0.354	0.386	0.123	0.341	0.308
後 前	Score	17.3	18.9	16.8	17.3	14.1	17.6	16.6	19.1	17.2
	S. D.	3.09	2.79	2.71	2.53	2.04	2.51	2.26	2.62	2.57
	連帯度	2.257	0.355	0.339	0.391	0.455	0.403	0.431	0.402	0.380
後 仁	Score	17.2	16.8	16.3	16.9	13.7	17.3	16.8	17.9	16.6
	S. D.	2.77	2.82	2.64	2.26	2.01	2.49	2.81	2.38	2.52
	連帯度	0.331	0.313	0.347	0.425	0.454	0.401	0.314	0.436	0.381

地 農 村 名 数 期 別 連 帯 度	領 域 別 連 帯 度	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	Ave.
		C.S.	I.R.	F.R.	S.	C.	E.B.	L.G.	T.A.	
後 発 136.7 (54 $\bar{7}$) S.29	志 足 Score	18.8	16.8	16.5	15.9	15.1	17.5	17.4	18.7	17.1
	S. D.	2.20	2.55	2.33	2.42	2.49	2.40	2.87	2.95	2.53
	連 帯 度	0.494	0.377	0.425	0.390	0.360	0.428	0.313	0.319	0.388
総 平 均 139.5 (244 $\bar{7}$)	Score	17.6	17.6	16.5	16.5	14.5	17.2	16.7	18.6	16.9
	S. D.	2.81	2.76	2.65	2.38	2.26	2.47	2.87	2.70	2.61
	連 帯 度	0.330	0.341	0.349	0.414	0.406	0.405	0.259	0.375	0.364

連帯性をあらはす測定結果は以上の如くであるが、本表における数値を取扱うに当つては、次の点に注意する必要がある。

- (1) 「スコア平均」(Score)における数値は、最高25.0、最低5.0が限界となり、中間値は15.0となつて、15.0以下は「否定」、以上は「肯定」となる。
- (2) 「地点別総平均」「領域別総平均」はともに算術平均である。「連帯度」は「Score」と「S.D.」より算出するが、計算では4捨5入しない Score値、S.D.をもとにして出した。従つて小数第3位は不確定である。Score値、S.D.については、小数点2位又は3位で4捨5入した。
- (3) 「S.D.」は平均値に対するスコアのばらつきの程度をしめすものであつて、S.D.の値が小さければ小さい程、当該平均値がもつ意味に対する肯定性は強く、又それを中心とした意識のまとまり或いは連繫も強いことを意味し、逆の場合は、これと反対の傾向をもつことを意味する。
- (4) 「連帯度」 $= 1 - \sqrt{\frac{sd^2}{\bar{x}}}$ は最高1.00で0点は相対的にしか固定されておらず、負の値も出る特性をもつ。連帯度0は連帯度が皆無であるということ意味するものではない。

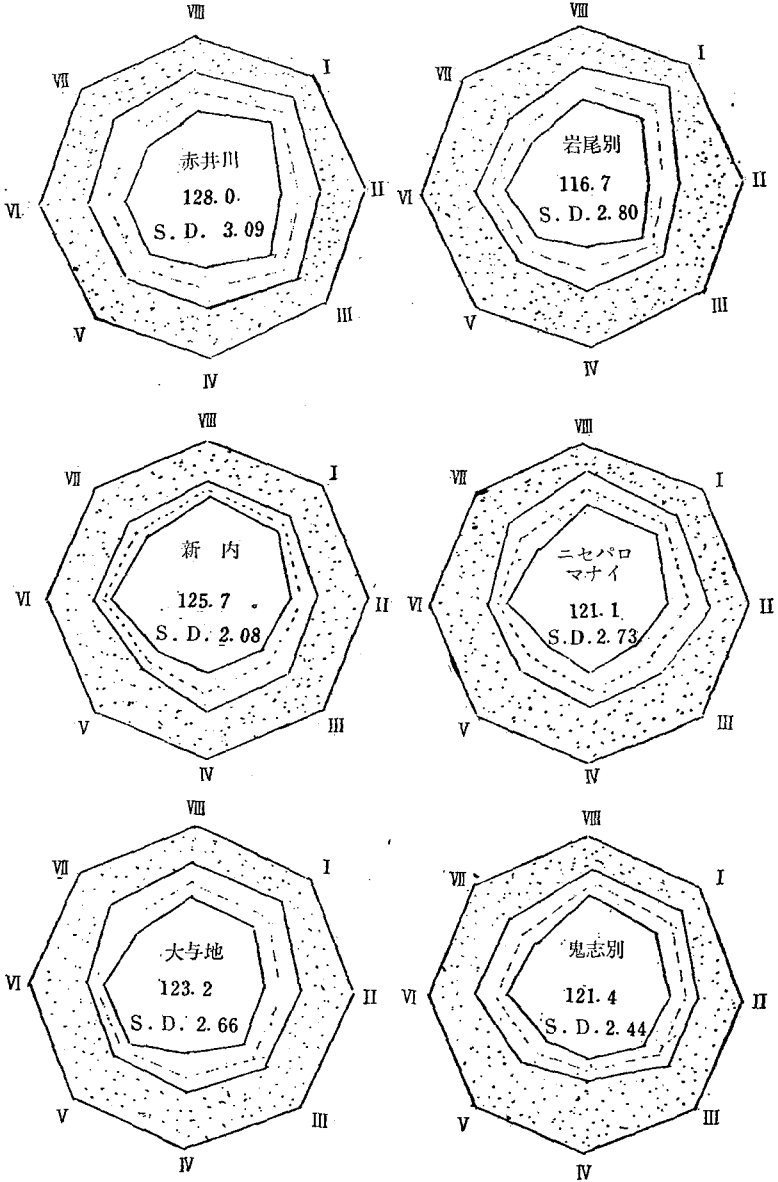
—x 連帯度とは、非連帯的おそれのある傾向をさしている。これ等の指数は倍率でみるよりも、間隔差でみる方が適當である。

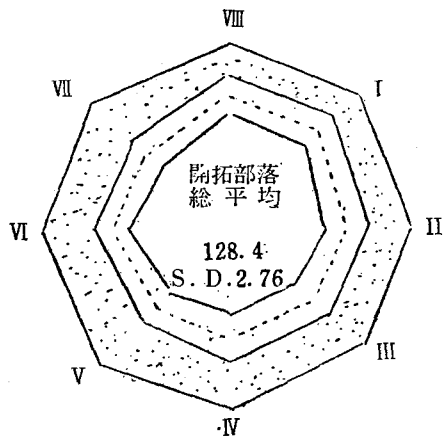
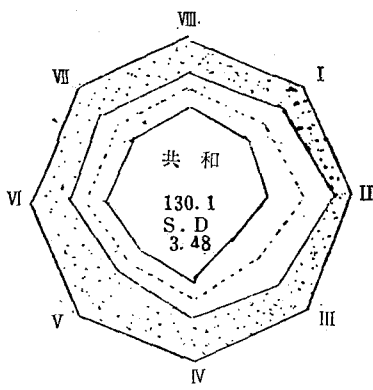
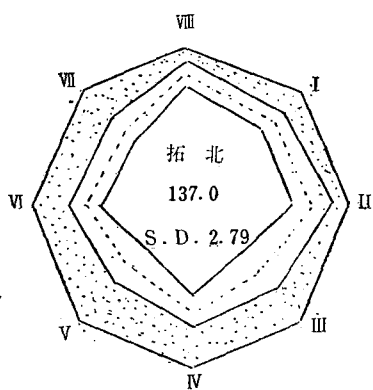
以上の注意事項は、求められた連帯性を数値に還元して、各部落にあけるこれが分析を展開する上において留意しなければならない条件である。この条件の故に数値そのものは相対化される。

次に、Fessler の手法に従つて、上述の測定結果を、八角形図表によつて表示してみる

と、各地点における特色は次の如くなる。(第3図, 第4図)

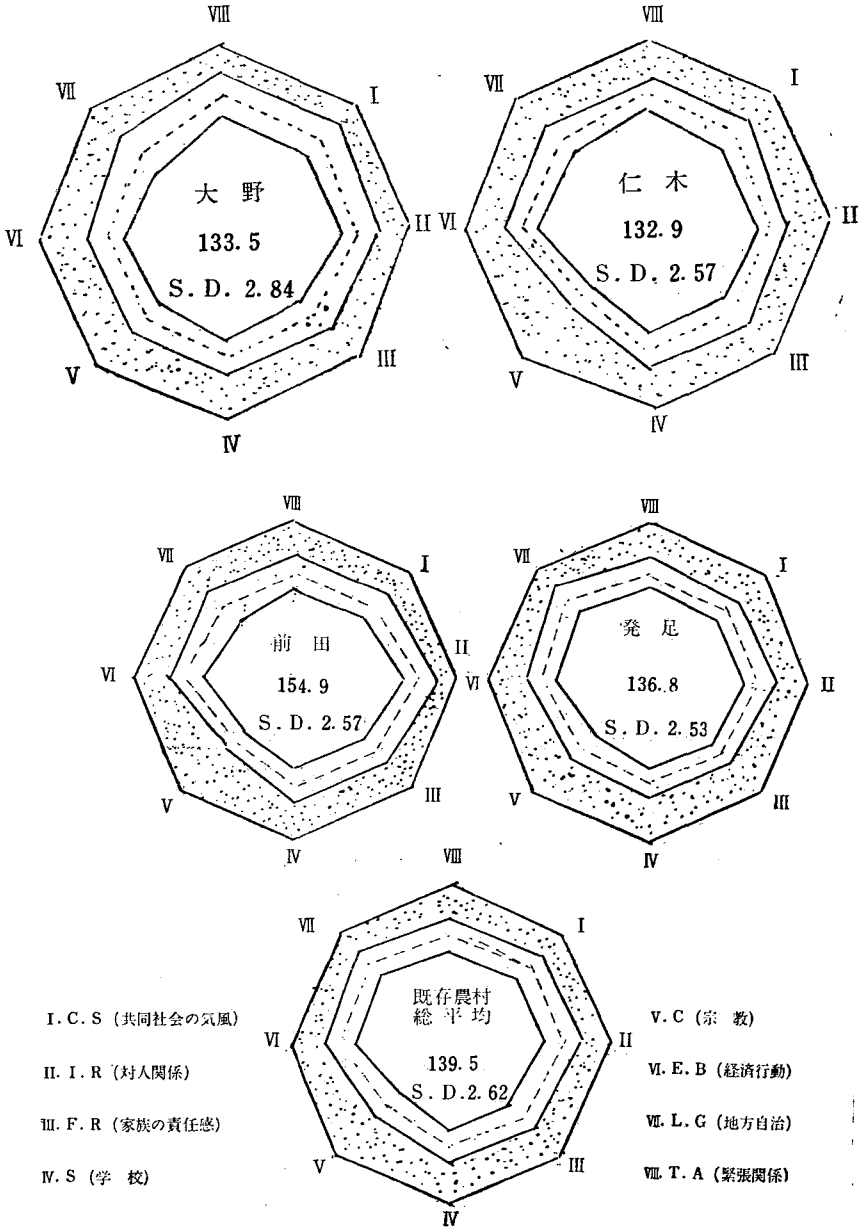
第3図 開拓部落の連帯性





第4図

既存農村の連帯性



以上、13の八角形を描くことによつて、開拓、既存の各地域社会における連帯性の特色がほぼ明らかにされた。これによれば、八角形によつてしめされる連帯性は各地点によつて様々であることが容易に視知される。しかし、実際にこの八角形をえがいて感ずることは、既に触れた如く、各地点、各エリアにおける連帯性をめぐる微妙な差を、適確に書きあらわすことが殆んど不可能であるということである。それ故に、この八角形は極めて大雑把な表現になるわけであつて正確なものではない。またこれを視覚にたよつてみる場合にも、錯覚やその他の支障がともない勝であろう。従つて結果の分析を、この図表のみにたよつて展開することは些か危険であると言わねばならない。

しかし、この八角形図表によつて、大体の傾向、凡その特色を把握することは出来るから全然、無駄な表現とは思われない。ことに、開拓の部における如く、部落によつて、連帯性の特色を著るしく異にする場合には、8つのエリアの各々及びその全体の形相を overallに把えるに極めて適していると云わねばならない。従つて、以下の分析においては、あく迄この八角形図表の物語る所に従い、これを参照しながら比較考察する必要が認められる。

註 1 「連帯値」中「連帯度」の算出に当つてはArea I の Comimunity Spirits の領域だけは4項目（他は5項目）となつていたので、補正を要する。

はじめから Score を1.25倍し、S.D. をそれで計算してもよいが、次の式を使つてもよい。

$$1 - \sqrt{\frac{\sum (1.25S_i - 1.25\bar{X})^2}{n}} \\ \frac{1.25 \text{ Ave.}}{1.25 \text{ Ave.}} \\ = 1 - \sqrt{1.25} \sqrt{\frac{\sum (S_i - \bar{X})^2}{\text{Ave.}}} = \underline{\text{連帯度}}$$

第5章 開拓部落における連帯性の特色

—測定結果の分析—

序 説

前章において明らかにした開拓社会並びに既存農村における連帯性をめぐる測定結果はただそのままの状態では、開拓社会におけるこれが特色を明らかにしたことにはならない。従つて、この測定結果を様々な角度より分析し、開拓社会における連帯性の特性を解明する操作が加えられなくてはならない。とりわけ、分析の為に設定した単位「連帯度」を駆使して、比較分析につとめることは、尺度化の本来の使命からして当然要求されることである。

しかるに、この分析には、尺度化によつて求められた測定値そのものの分析と、この尺度化以外の調査によつて得られた特色をこの測定結果とクロスさせることによつて展開される分析との2つの分析が要求されると思う。前者は、尺度化内部における所謂「内延的課題」であり、後者は、この尺度化以外的事实との関連についての所謂「外延的課題」に外ならない。本章におけるこの測定結果の分析研究の仕事も、問題の範囲を一応この様な2つの課題に区分した上で展開する必要が認められる。

先ず、尺度化による測定値そのものを中心とした内延的課題についてであるが、ここでは次の如き点を分析する必要があると思われる。即ち、

- (1) 開拓と既存との比較による開拓社会における連帯性の一般的特色或いは傾向の分析——地点別比較分析。
- (2) 領域 (area) 別にみた開拓社会における連帯性の特色——既存農村との領域別比較分析。
- (3) 一つの開拓社会内部における小部落の連帯性の比較分析——部落別比較分析。
- (4) その他——例えば、連帯性の類型化とこれによる部落の分類。

等々がそれである。これ等はもとより内延課題の主なるものであるが、本稿においては、このうち、(1)、(2)、(3)の課題について分析することにする。又「外延的課題」として、取上げることの出来る主なる課題として、次の如きものをあげることが出来る。即ち、

- (1) 開拓社会における社会経済的特色と連帯性との関連。
- (2) 開拓社会内における階層区分と、各階層内における連帯性の特色 (既存農村との比

較による分析も可)。

- (3) 開拓部落における連帯性の変動過程の分析。
- (4) 開拓農家の年令集団別出身地別連帯性の分析。
- (5) 連帯性の尺度化方式を転用することによつて求められる開拓部落における農家の意識構造の把握と分析。
- (6) その他——例えば、立地条件集落形態の相違、或いは出身地別連帯性の分析。

以上が外延的課題の主なるものである。しかしこれ等の課題を分析するためには、この調査以外の調査によつて得られた確実な資料がなくてはならない。とくに、この外延的課題の分析においては、このような外的資料の蒐集が必要とされる。

しかし現在の段階ではこれ等の外的資料を充分求めることが出来なかつたので外延的課題については以上の課題のうち、その若干の問題について分析するにとどめざるを得ない。以下この課題について分析解明したところを明らかにする。

第1節 連帯性をめぐる「内延的課題」の分析

1 平均値による開拓部落の連帯性の一般的特色

8つの典型的な開拓地域社会と、4つの代表な既存農村における連帯性を比較して、開拓社会に共通なる連帯性の一般的特色、従つて開拓社会における連帯性と既存農村における連帯性との一般的な相違を明らかにすることが、この節における第1の課題である。この一般的特色を明らかにする為に、ここでは、測定値を、「平均値」について分析する方法をとる。

今、連帯性をめぐる測定値、即ち、平均スコアや、連帯度及び S.D. 等々を、開拓と既存の2つに分け、夫々その総平均を出して有意差を検定すると、次表の如くなる(第9表)。

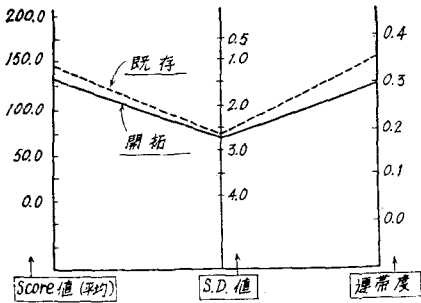
第9表 既存・開拓別連帯性の比較
(平均値による)

連 帯 値	開拓社会 (185戸)	既存農村 (244戸)	差	有 意 差
スコア値(平均)	128.4	139.5	11.1	t検定の結果有意差あり(14.40)
S. D. 値	2.76	2.61	0.15	分散によるF検定の結果有意差なし
連 帯 度	0.298	0.364	0.066	—

更に第9表によつて、既存と開拓との連帯性の測定結果の相違を図にあらわしてみると第5図の如くなる。

第5図

平均値による既存と開拓との連帯値の相違



第9表の示めすところによれば、連帯性の測定値（平均スコア、S.D. 連帯度、この3者を合せて、「連帯値」と呼ぶことにする）のしめす傾向は、明らかに、既存農村の方が開拓社会におけるよりも連帯性がまさっていることである。即ち、規範体系に対する好ましい傾向の存否を判断する素材となる取得スコアの平均値についてみると、既存農村では139.5点であつて、中間値の120点を遙かにオー

バーしている（理論上の最高点は200.0となる）。又「ばらつき」の程度をしめす、S.D.についてみると、既存は0.261であり、また「連帯度」は0.364であつて、いずれも既存は開拓社会における当該測定値を遙かに凌駕している。従つて数値の絶対値を機械的に比較するならば、一般に開拓社会における農家の連帯性は既存農村におけるそれよりも、可成り劣つているということが出来る。

しかし、この相違については、果してそれが有意なものであるかどうかを検定にかけて吟味してみる必要がある。

先ず「平均スコア」についての、開拓、既存の有意差についてであるが、これは平均値の差の有意検定であるから、普通の検定を施せばよいことになる。

計算の結果は、 $t_0 = 14.40$ となつた。よつてこれをt検定表にかけてみると、

$$t(427; 0.05) = 1.960 \text{ (5\%水準)}$$

$$t(427; 0.01) = 2.576 \text{ (1\%水準)}$$

となるから、5%、1%のいずれの水準においても、 t_0 はtよりも大であるから、この「平均スコア」をめぐる。開拓と既存との各々の平均値の差には有意な差のあることが認められた。

次に、「ばらつき」をあらわす「S.D.値」について両社会の差の有意性を検定してみる。方式は、既存農村における標本の分散と開拓社会における分散との差を、F検定にかける方法をとる。計算の結果は、

$$F_0 = 1.127 \text{ となる。}$$

これをF検定表によつてみると、

$$F(243; 184; 0.05) = 1.20 \dots \dots \dots \text{ (5\%水準)}$$

$F(243; 184; 0.01) = 1.35 \dots \dots \dots (1\% \text{水準})$

となるから、5%水準をもつてしても F_0 は 1.20 より小さいから、有意な差は認められないことになる。即ち、「ばらつき」や「まとまり」の点においては、開拓と既存の間にはさほど大きな差はないということになる。

以上2つの連帯値についての有意差の検定結果は、一見相互に矛盾するようにみえるが、果してそうであろうか。

この関係は、次の特性の存在を意味している。即ち、或る規範体系（共通の規範）に対する既存農家の肯定性向と、開拓のそれとの間には、はつきりした差があり、開拓社会における肯定性は、128.4であつて、中間値の120.0に極めて近いから、規範に対する肯定性は一般にあまり強いとは云えない。

しかるに、S.D. 値は、両者間に大きな有意差がなく、どちらの社会も、「まとまり」の点においては優れていると云えるから、結局既存農村では、比較的好ましい肯定性的のもとに意見（反応）が集中しているのに対し、開拓社会では、比較的弱い肯定性的のもとに成員の意見（反応）が集中しているということになる。

これ等の性向を一層顕著にせしめているのが「連帯度」である。何故らば、連帯度は、上記の2つの連帯値の相関値を基調として成り立っているからである。

今、開拓社会における連帯度の平均値を取り出してみると、その値は 0.298 である。これに対し、既存農村における平均連帯度をみると 0.364 である。連帯度は、最高が1.000であるが、いずれにせよ、連帯度は、開拓よりも既存の方が高いということになる。この連帯度についての差は、単位の性質からして検定を施す必要ないと思うが、検定をしても、有意性は認められる。

これを要するに、平均値によつて把へられる連帯性の傾向としては、開拓社会では安定した既存農村にくらべて可成り成績はおちるものと認められる。

Ⅱ Community のサイズと連帯性

「Community のサイズ」は社会的には極めて重要な意味をもつた概念の1つである。今、community のサイズを部落内における収容戸数であると仮定して、部落のサイズと連帯性の関連を分析、追求してみる。先ず、各部落の総戸数と総平均連帯度を素材にして、調査地点を整理してみると、第10表の如くなる（次頁）。

Community のサイズと連帯性の関係は、傾向的には、community のサイズが小さくなればなる程、連帯性は高くなると云えるかどうか、この点を検証することによつて明ら

第 10 表 CommunityのSizeと連帯性との関連
(連帯度による)

開 拓 部 落	Size (戸数)	Sizeの 順 位	連帯度	連帯度 順 位	S. D.
赤 井 川	50	1	Ave. 0.122	VII	3.09
大 与 地	42	2	0.322	IV	2.66
鬼 志 別	35	3	0.373	II	2.44
岩 尾 別	33	4	0.266	VI	2.80
ニセバロマナイ	24	5	0.289	V	2.74
共 和	18	6	0.132	VIII	3.48
拓 北	16	7	0.317	III	2.79
新 内	11	8	0.467	I	2.08

かにされる可能性をもっている。
そこで、第 10 表によつて、部落の
サイズと連帯度との間にどのよう
な相関関係があるか、両者の相関
比を求め、これによつて、この命
題に応へることとする。

先ず、community、サイズに順
位をつけ、これと、連帯度の大きい
ものから順につけた順位との2つ
の系列を引き出し、両者の相関関
係数を求めると、次の如くである。

a, 「Community の Size の順

位」と「連帯度の順位」との相関関係

$$r=0.413$$

(但し、順位はどちらかを逆順位としてとる。以下同様)

次に communityの大きさの順位と連帯度の数値との相関比を求めてみると、

b, 「Community の Size の順位」と「連帯度」との相関関係

$$r=0.429$$

となる。この場合、比較の前提として community のサイズの順位が、戸数の大小の順によつてきめられているので、この両者の相関をみる必要がある。また連帯度の順位と連帯度値との関係もみておく必要がある。この2つを計算してみると、

c, 「community の Sizeの順位と「戸数」との相関比は、

$$r=0.911$$

d, 「連帯度」と「連帯度の順位」との相関比は、

$$r=0.962$$

となつて出た。これによつて「順位」を要素 (factor) として、この関係をみても大過のないことが容認される。

更に進んで community のサイズと S.D. とを対決させて、両者の相関比を求めてみると、

e, Community の Size の順位と「連帯値S.D.」との相関比は、

$$r=0.522$$

となつて出た。

これを要するに、本調査に関する限り、community の大きさと連帯性との間には、一応の関係があるものと認められる。即ち、community サイズが小さくなればなる程、連帯性も高くなるという、両者の反比例的関係について、相関比は 0.4 程度の数値をしめし「やや肯定すべき傾向が存在する」と云える。

しかし、このことは community のサイズ、従つて部落の戸数が連帯性を決定するということを意味するものではない。ただ、戸数の少い場合は多い場合よりも多少とも意見がまとまりやすいという傾向が見られるということとどまる。しかもこのことは開拓部落についてのみいえることであつて、既存農村の場合は必ずしもこの限りではない。

Community のサイズがより大きな既存農村では、前述の如く一般に開拓よりも連帯性は高いのであるから、一般に農村社会では community のサイズが大きくなれば、連帯性も低くなるという様な結論はこの調査に関する限り、一応出し兼ねると思われる。ただ開拓地「新内」の如き特殊な過小 community における連帯度だけは異常に高く安定的な既農村におけるそれを軽く凌駕している事実を見のがすわけには行かない。このことは、他に特殊な事情があり、しかも僻地の開拓地において、極く少数の開拓者によつて集団社会が営まれている場合は、非常に連帯度（性）の高くなることを物語るものであり、この様な開拓地における連帯性については、既存農村などは到底及ばないのである。

しかし個別的にみれば開拓地には「新内」の如く規模が小さくて、まとまりの良い社会が存在する反面、規模が小さいにも拘らずまとまりが悪く、連帯性に欠ける社会もある。「共和」などはその典型的な例である。これ等各地点についての連帯性の特色については、後にあらためて論ずるが、要するにサイズの大小が連帯性の様相を一次的に決定するものではないが、開拓社会では、他に特殊な事情がなければ、あとはサイズだけでまとまる可能性がある程度存在すると推定される。

「Community のサイズと連帯性との関係」の問題にからんで、ここで今1つ触れておかねばならない問題がある。それは「連帯度」の分散の問題である。前掲第7表及び第8表によつてみると、開拓社会における各部落の連帯度は高低様々であつて、最高と最低の格差は非常に大きい。これに対して既存農村における連帯度はいづれも近似的であつて、上下の差が極めて少ないことがわかる。今、これを数値によつてみると、

	開 拓	既 存
(各部落における) 最高と最低との差	0.335	0.080
平均値との差	最高との差	0.170
	最低との差	-0.166
		0.024
		-0.056

となつて、最高と最低との差は既存農村（4村）では、僅か0.080に過ぎないのに対し、開拓社会（8部落）では、実に0.335という大きな差がみられる。また開拓社会の総平均値と最高最低値との格差をみても、これを既存農村におけるそれと較べると、そのひらきは、開拓の方が非常に大きいことがわかる。

開拓社会における連帯度がこのようにして、高低まちまちであり、部落相互間において較差が激しいということは、この8つの開拓部落がいずれも北海道における典型的な開拓社会でありながら、総じて、各開拓部落の内容に可成り異つた特性が存在しているからである。この点、既存農村では、たとえ土地利用形態や経営様式を異にしているとしても、社会的には可成りの安定性があり、連帯性も或る程度近似したレベルを保持しているとみることが出来る。

以上ここでは、主に平均値をめぐつて開拓社会における連帯性をその特色を、既存農村におけるそれとの比較において考察した。之を要するに、開拓と既存との間には、連帯性をめぐつて可成り大きな相違が認められるのであつて、一定の行動規範や価値観念についてのまとまり、凝集の程度は、開拓よりは既存の方が一般に高いと見られる。このことは、開拓社会にあつては、部落そのものの歴史が浅く、しかも構成員がまちまちであつて、その短い共存生活の中においてこれ等の異質的要素が完全に融合しておらず、その為に一定の規範体系に対する判断の共通性や相互連繫も容易に期し難いことから生ずるものと思われる。それだけに、開拓社会には既存農村にみられるような安定性に欠除している面がみられ、これが尺度化による測定にも見事にあらわれているのである。

Ⅲ、領域（Area）別にみた連帯性の特色

既にのべた如く、連帯性をとらえる尺度文章は8つのエリアに分かれている。そこで、各エリアごとに、開拓社会における農家の連帯性の特色について、若干の考察を試みることにする。

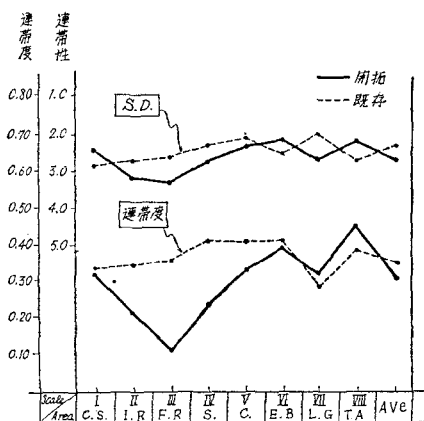
この分析を展開するには、あらかじめ、各領域（area）の意味を明らかにしておく必要がある。ことに Fessler はこのエリアの設定の問題について、詳細な説明を施していないので、各領域が如何なる行動領域を意味するか必ずしも明確ではない。中には、既に社会学上の通則的概念として、わかり切つたものもあるが、しかし然らざるものもある。例えば Community Spirits, Economic Behavior 等々の如きはわかつた様でわからない領域

である。そこで各領域について、これを構成している尺度文章を唯一の手がかりとしながら、一応の概念規定を施し、しかる後にその領域における連帯性の特色を分析して行かねばならない。

この分析を展開する前に、あらかじめ考察しておかねばならない問題は、開拓と既存との領域別連帯性の一般的特色についてであろう。そこで先ず、連帯値のうち、連帯度と、S.D. とをとり出し、これを素材として、開拓社会と、既存農村における領域別連帯性のちがいをとらえてみる。第6図はこの差を各地点における各領域の平均値によつてあらわしたものである。

第6図 開拓・既存の領域別連帯性の比較

第6図によれば Area VII の Local Government, VIII の Tensin Area の2つの領域を除けば、開拓社会における「連帯度」はいずれの領域においても、既存農村におけるそれよりも劣つていますが、明らかである。もつとも、このうち Area I の Community Spirits, II の Economic Behavior と VII の Local Government の領域における開拓と既存との差は極めて僅少であるから、開拓と既存とに大きな差異をもたらしている領域は、



これを除いた領域即ち Area II の Interpersonal Relations, III の Family Responsibility, IV の Schools, V の Churches の4つの領域となる。就中 III の Family Responsibility (F.R.) のエリアにおける連帯度は、開拓社会では非常に悪く、既存との差が最もはげしいのが注目される。一方、開拓の方が既存よりも極端に優つているエリアはVIII の Tension Areaのみである。このエリアでは S.D. についてみても既存の方が劣つている。ただ S.D. については、この外 Area I の C.S. の領域では開拓の方が既存よりもわずかに良い成績をおさめているが目立つが、その他の領域ではいずれも、既存の方がより好ましい S.D. 値 (より高 S.D. 値) を保つている。

以上が連帯度並びに S.D. を通じてみた開拓、既存の領域別連帯性の一般的特色である。そこで次に、更に各領域の概念規定を施しながら、それぞれの領域における開拓社会の連帯性の特色を描写してみる。

(1) Community Spirits (C.S.)

Community Spiritsと称せられるこの領域はこれを構成している5つの尺度文章の意味内容から解釈して、それは当該 community に対する成員の「気風」といつた意味のものに近いと考えられる。これを「共同社会の精神」と訳しても差しつかえはないが、その精神といわれるものの内容は、community の成員が自己の community に結びついている場合におけるその community の地域及び成員に対する愛着心に外ならない。例えば或る成員が他の成員からその community 内における生活を通じて、常に大切に取扱われる様なことがあれば、その人にとって、その community は、かけがえのない社会として、これに対する愛着も強くなってくる。community の成員がそれぞれこのように待遇されている時は、その community に対する成員全体の愛着心は強くなり、皆がその社会を愛するようになる。部落や community に対する成員のこの愛着心や愛郷の精神が即ち、Community Spirits であつて、そこには「住めば都」的な気風も内包されている。ただこの場合には、我国の府県におけるが如く、氏神や郷土神を中心とした結合感、一体感ではなく、あくまでも、人間関係を通じてもたらされる要素を Community Spirits の中核においている所に特色がある。

しからば、このような意味をもつたこの Community Spirit の領域において、開拓社会における連帯性には一体如何なる特色がみられるであろうか。

今これを既存農村との比較において考察してみるに、先にも触れた如く、このエリアにおける連帯性は、開拓と既存との間にさほど大きな差を形成していない。即ち、その連帯度は開拓の方が既存よりもわずかにまさるが、S. D. の方もまた開拓の方が既存よりも僅少ながまさっている。しかし、そこには有意な差は殆んど認められない。

所が、これ等の連帯値のうち、「連帯度」をとりあげ、連帯度の数値を他のエリアにおけるそれと比較してみると、開拓社会におけるこの Area I (C.S.) の連帯度の高さは割合高く、8つのエリア中において第3位をしめている。しかるに、既存農村におけるこの Area I の連帯度は8つのエリア中、第7番目である。

このことは、連帯度そのもののレベルが、たとえどうであろうとも、開拓社会における Community Spirits のエリアにおける連帯度は他のエリアにおけるそれと比較して必ずしも低いものではないが、既存農村におけるこのエリアの連帯度は他のエリアにおけるそれにくらべて可成り低いことを物語っているといわねばならない。従つてこのエリアにおける連帯度は他のエリアにかけるそれとの比較において、開拓の方は既存より相対的にも絶対的にもまさっていると云える。今、これを平均連帯度を中心にして吟味してみると、

開拓社会における8つの「領域」の平均連帯度 = 0.298

Community Spirits の連帯度 = 0.353

差 = +0.055

となることに対して

既存農村における8つの「領域」の平均連帯度 = 0.364

Community Spirits の連帯度 = 0.330

差 = -0.034

て、となつ、既存農村では、平均値を下廻るのに対し、開拓社会ではその平均値を遙かにオーバーする水準をしめしている。従つて、連帯度の絶対値そのものは開拓、既存の間に大差ないとしても、各々の社会の内部構造において占める位置は開拓の方が既存よりも優位にあるのがこの C.S. の連帯性の特色をなすということになる。

次に、この平均値を中心として、このエリアにおける連帯度を部落別に検討してみる。

先ず、開拓社会における総平均(Area I=0.353)の連帯度に対し、これをオーバーする成績をおさめた部落をあげてみると、

「新内」……………0.604 「拓北」……………0.537

「ニセパロマナイ」……0.460

の3部落である。

これに対し次に平均値を下廻る部落を列举してみると、

「岩尾別」……………0.122 「大与地」……………0.248

「鬼志別」……………0.337 「共和」……………0.162

「赤井川」……………0.350

の5部落である。そして、その最高と最低の差は、実に0.482（最高「新内」0.604、最低「岩尾別」0.122）という大きなひらきとなつてあらわれている。

この点、既存農村における最高最低差は0.258であり、また4つの既存農村における平均値(Area I=0.330)との差は、開拓におけるほど極端ではない。

このことは、開拓社会の場合、この Community Spirits のエリアにおける連帯性は、部落によつて著しく違うことを意味する。即ち開拓社会における Community Spirits の内容は、部落によつて区々であり、その連帯性には、良い所は極端によくて既存を凌駕するほどであるが、悪い所はまた極端に悪いという特色がみられる。このような両極分解或いは両極偏向は、既存農村では殆んどみられない所であり、ここに開拓社会そのものものもつ1つの宿命的な特色が見られる。

何故に開拓社会がこの様な特性をしめすか、その原因は、これを軽々に論ずることは出来ない。しかし、既存農村の方が、その長い歴史と農家の比較的長い居住生活とによつて、その地域社会に対する結合心や愛着心が極めて自然な形において徐々に形成されてきたであろうことは事実である。これに対して、開拓では、入植当時は少くともその土地に対する将来の夢を中心とした執着心が異常に強い形において形成されながらも、その土地に対する経験の浅さと居住年限の短かさから、人間に対する執着を充分強めることを許さないものである。更にまた、営農が安定しないうちに屢々訪れる凶作は、他の経済的圧力とともに、この土地に対する開拓農家の愛着心を容易に奪却してしまうのであろう。これ等のことが、恐らく Community Spirits のエリアにおける開拓農家の連帯性を著るしく低いものにしてしていると推定される。

ただ開拓地でも「新内」の如く以前（戦前）に入植した多数の入植者の中の僅かに残る残留者と、再入植者とによつて占められる様な特殊な開拓地では、この土地に対する執着は非常に強い。しかもこの様な部落は戸数も少いので、少数の人々が構成するこの開拓部落はまさに1戸の家族同然であり、これ等の人々が形成している Community Spirits もまた当然、異常に高く強くなる。しかし、一般的には、開拓地の立地が極めて辺境地におかれ、構成員が混成旅团的であればあるほど、この Community Spirits のエリアにおける連帯性も低いものになるという傾向がみられる。

(2) Interpersonal Relations (I.R.)

このエリアの意味については別段註釈を試みる必要はないと思われる。5つの尺度文章は、community 内部における成員相互の交渉関係は対すを規範意識の連帯性を把えようとしている。ところが、対人関係をめぐつて community 内部に好ましい傾向のあるときは、何人も概ね自己の community 対して愛着を抱くものであるから、この様な意味において、このエリアは、前にのべた Community Spirits のエリアと一面の関連をもつことになる。例えば No.27 の尺度文章の如きがそれで、「貴方はこの部落の1員であつたことを大変よかつたと思つているか」という項目がある。この尺度文章は明らかに部落内における対人関係を通じて、その部落に対する愛着心の存在をある程度尋問するものでもある。従つてこれは、対人関係についての価値観念の所在を問題にしていると共に、部落そのものに対する執着心の帰趨をたしかめようとするものである。

この Interpersonal Relations のエリアにおける連帯性の特色として特記に値することからは、この領域においては、連帯値を構成する「S.D.」「連帯度」ともに、開拓社会では、既存農村におけるそれより遙かに劣ること、並に、開拓部落によつては、中にマイ

ナスの連帯度をしめすものがあらわれているということの2点である。

「負の連帯度」とは、先にも述べた如く、連帯性に欠ける疑があるばかりでなく、場合によっては反連帯性傾向すら存在するのではないかと疑われるものである。十勝・大樹町の「共和」がそれであつて、その連帯度は -0.259 をしめている。この部落については後にも述べるが、連帯度 -0.259 は明らかにこの部落の「近所仲の悪さ」を反映している。

この部落が介在する為に、開拓社会全体のこのエリアにおける連帯度の平均はかなり落ちてきている。その平均値は 0.208 であつて、エリアIのC.S.の平均値 0.350 よりも若干悪くなつてきている。またこれを既存農村における当該平均値とくらべてみると、既存では 0.340 であつて、両者の差は 0.131 となり、C.S.のAreaにおけるそれよりも隔差が大きくなつてきている。

これを部落別に比較してみると、その差はまた極端に大きい。開拓部落において最も高い連帯度にしめすものは「鬼志別」の 0.468 であるが、これに対して最低は前述の「共和」の -0.259 である。そこには実に 0.727 という大きな隔きがみられる。そしてこの格差は開拓部落における他のエリアについての部落差を含めて最高のものであつて、最高と最低の差がこれほどひらくものは他に例がない。

しからば、対人関係のエリアにおいては何故にこのような地域差（部落間の最低差）が出来るのであろうか。

まず、連帯度の極端に低い開拓部落についてみる。開拓部落が出身地や経歴その他を異にする異質者の混成旅団であることは先にのべたが、対人関係のエリアにおいて連帯性に乏しい部落には、殆んど常にこれ等の異質的要素を社会的に統一する人間的要素に欠けている点が指摘される。真の指導者がいなかつたり、leader and follower の関係体系が未形成であつたりすることが、これ等の人間関係における融合と統一の実現を阻止している。またこの様な部落では殆んどといつてよいほど、経済上、営農上の利害関係を内容とした葛藤がつねにひそめられている。これはもとよりその社会の社会経済的不安定性から来る friction であり、conflict であるが、これに敗れた開拓農家は屢々煮湯を飲まされ、その憤懣やるかたなく日々の生活を送つていたのである。

この点において、既存農村における連帯性の傾向にはかなり安定性がみられ、地域による差はさほど極端ではない。要するに、対人関係をめぐる連帯性の強さは、歴史と社会の古い既存農村の方がまさつているといわねばならない。

次に、開拓部落でもこのエリアにおける連帯性の高い部落について検討してみる。「鬼

志別」「新内」はその例で、いずれも連帯度 0.4 クラスを保持し、既存の平均値 0.341 を凌駕している。「新内」の如く、特殊事情のある部落は別としても、「鬼志別」の如き不安定な開拓地において、何故に比較的に高い連帯度が保持されているのであろうか。

これについて、我々は、一般に経済的に安定性に欠ける開拓部落でも、各農家が占める立地条件に大差がなく類似しており、しかも成員の前歴、年令階層等が近似的であり、部落民に統一を与えるような何等かの関心が存在すれば、このエリアにおける連帯性は高くなる可能性があるとする。「鬼志別」はそのよい例であつて、ここにはよい指導者がおり、又役場の開拓に対する取扱も公正であつて、不平が少い。このほか、開拓に対して外的な敵が存在するという共通の意識のある時も、対人関係における連帯性は強くなる。その例を我々は屯田兵村に求めることが出来るが、「鬼志別」には山林の大地主（某製紙会社）という開拓に対する共通の敵（？）があるとす意識の外、開拓政策に対しても共通の強い不満がある。このような場合は、常に開拓農家の団結が要求されるから、当然このエリアにおける連帯性は高くなるのである。

(3) Family Responsibility toward Community (F.R.)

連帯性を表示する 8 つのエリアの中で最も重要な問題を内包するのがこの「community に対する家族の責任感」という領域である。この領域の意味はいうまでもなく、各家族がその家族員について負わねばならない所の community に対する責任の意識に外ならない。この責任感とは、ここでは主に家族の子弟に対する監督、しつけ、子供のことを中心とした紛争、子供の安全に対する関心等々を素材としてとる様になつてゐる。従つて、このようにして把へられる責任感とは、その内容からみてかなり一般化されたものであり、どの社会に於ても（例えばある程度都市でも）共通するような極めて普遍的な性格をもつた行動規範によつて裏付けされたものと解釈される。

このエリアにおける開拓社会の連帯性について、とくに問題として注目しなければならぬことは、「連帯度」の極端な低位性にある。どの開拓部落における連帯度をみても、このエリアにおける連帯度は非常に低い。即ち、このエリアにおける 8 つの開拓部落の連帯度の平均値は、僅かに 0.162 をしめしているにすぎず、しかもそのうち 2 部落はマイナスの連帯度をしめしている。「拓北」「共和」がそれであつて、とくに「共和」は低く、 -0.343 をしめしている。これ等のものを除いても、連帯度 0.400 以上をしめす部落はつ 1 もなく、最高の「大与地」ですら、0.381 にすぎない。この為に最高と最低との絶対差は実に 0.724 という大きなひらきとなつてあらわれ、Area II の Interpersonal Relations. の領域におけるこれが絶対差に次ぐ大きなひらきとなつてあらわれている。

しかし乍ら、このエリアにおける高低格差のはげしさは、既存農村においてもみられるところであつて、ひとり開拓社会のみの特殊現象とは思われない。即ち既存農村における最高は「発足」の0.425であり、最低は「大野」の0.283であつて、そこに0.142の格差がみられる。この格差は一般に安定した形相をもつて特色とする既存農村にしては、比較的大きな差であるといわねばならない。

以上の如くして、このFamily Responsibilityのエリアにおける連帯性は、既存、開拓ともに所によつて格差の激しい領域の1つであるといえる。ことに開拓社会におけるこの領域の連帯性は、一般にレベルそのものが低位であつて、内部的に格差のはげしいのが目立つ。

しからば、この様な現象は一体何なるものに起因するのであろうか。その理由の1つとしてあげなければならないものに、農家の家族生活様式の特殊性がある。冬期間を別として、常に激しい労働に追われ、稼働力をもつ家族員全員が、開墾、営農に従事せねばらず、時にまた家を去つて現金収入を獲得するために農外労働にも従事しなければならない開拓農家にとつて、communityが要求する家族に対する監督その他の所業をまつとうすることはむしろ至難である。開拓農家の多くは、かかる理由から家族員のことを十分顧みるいとまがないのであつて、このことが、このエリアにおける連帯性を著しく低位なものにしている。他のエリアについてかなりよい成績をおさめている「新内」地区の如き特殊な部落においてすら、このエリアだけは低く、僅か0.238という連帯度を保つてにすぎない。労働がきびしく、家族員に稼働力に乏しい欠点があればあるほど、このエリアにおける連帯性は高くなるらない。

この点、既存農村の「仁木」の如く、安定した多くのリンゴ園から成り立つ部落では、そこから湧出する生活のゆとりによつて、communityに対する家族の責任感も決して低いものにはならない。しかし、普通の一般既存農村では、このような意味における生活のゆとりはまだ十分期待されるほどになつていない。将来、機械化などが十分に進めば事情は変わると思われるが、現在では、やはり最大限の努力を傾注して日々の営農に従事して行かねばならない事情にあるから、家族員に対する監督や「しつけ」もそれだけうとくなる傾向がある。

このことは開拓農家にしても既存農家にしても、家族員(子弟)のことがらについて外見的にはたとえ無頓着であるからと云つて、実質的にも無関心、無責任であるということの意味するものではない。関心はあるけれども、なかなか実施できないというのがその真相である。

(4) Schools(S.)

Schools と複数形で表現されているこのエリアの意味は、もとより学校そのものについてではなく、「学校関係」あるいは「文教」を通じての、農家子弟の行動に対する規範的意識の連帯性を取扱はうとするものである。

この領域でも、開拓社会の連帯性は、既存農村のそれに較べてかなり劣っている。いま、これを連帯度の平均値についてみると、8つの開拓部落の平均値は0.234であるのに対し、4つの既存農村における平均値は0.414をしめし、両者間に0.179という大きな差がみられる。この文教に対する意識の連帯性は、開拓では部落によつてかなり良いものとかかなり悪いものとの両極に分解する傾向がみられる。すなわち「鬼志別」のごときは0.487をしめし、また「拓北」では0.377をしめして良い方に属するが、「岩尾別」のごときは0.003という低さであり、また「赤井川」「新内」のごときは0.100クラスであつて低位のクラスに属する。

従つて、全体としてみると、開拓社会におけるこのエリアの連帯性はかなり低く、地域差も激しいということになる。この連帯性は僻地になればなるほど低くなる。しかるに農家父兄の教育に対する関心そのものは、僻地になればなるほど逆に強くなる傾向があるから、僻地におけるこのエリアの連帯性の低くさは、むしろ教育に対する強い関心があるにも抱らず、学校の施設、教師あるいは学校の授業そのものが、これ等の開拓者の要求を十分満たしえないことからくるものとみられる。その証拠に、この領域における連帯性の低さは、反応意見の「ばらつき」の激しさからくるものではなく、規範に対する強い否定的傾向に由来していることが、S.D.およびスコア値の2つから容易に認めることができる。

知床半島の「岩尾別」なぞはその典型的な例であり、開拓5カ年計画によつてようやく地区の営農に安定性がみえてきたにもかかわらず、文教の面では実に悲しむべき問題が未解決のまま累積されている実情であり、連帯性のスコアも、僅か13.1という低さである。また上川の「ニセバロマナイ」のごときもそのよい例であつて、規範意識の肯定性は低く、僅かに13.3であり、この低い水準に農家の意見が集中している。

とくに注意を要することは「鬼志別」の連帯度であつて、0.487という高さをしめしながらも、スコア値は僅かに12.7であり、規範に対する肯定性が極度に低い。しかも意見のばらつきをしめす、S.D.は1.83という少なさであるから、この部落における文教に対する開拓農家の意識は「不満」であるという点において強い連帯性があり、これに対する集中性が強いと解釈される。この点はとくに注意を要す。

續へつて、既存農村におけるこのエリアの連帯性についてみると、ここでは、意見の肯定

性をしめすスコア値、「ばらつき」をしめす S.D. そして「連帯度」とともに、開拓に比べれば、問題にならないほど好ましい状態にある。すなわち、8つの開拓地の平均スコアが14.4であるのに対し、既存の平均は16.5であり、少なくとも1段階だけ好ましい肯定性があるとみられる。しかも既存農村では、このような好ましい意見に対する集中性が強く、全く開拓の場合と別の傾向にあることがわかる。

これを要するに、開拓社会におけるこのエリアの連帯度の低位性は、明らかに僻地教育の貧困性を如実に反映しているものといわねばならない。僻地教育についての現状は少くとも開拓者に多くの不満を抱かせる一つの要素になつている。勿論そのかげには、開拓社会の恵まれな立地条件、開拓農家の経済的貧困性等からくる学校施設、教育活動、教育内容等々の非充実性が指摘されなければならない。しかし、さればといつて、これを止むをえないものとして簡単に処理し、この教育を中心とした開拓農家の意識を無視したり、あるいは軽視したりするのでは、開拓社会の統一と発展を期待することはできない。

ここにわれわれは僻地教育の振興、社会教育の普及の必要性を認めざるをえないのである。

(5) Churches (C.)

原文ではChurches となつているが、ここでは当然「宗教関係」とすべきであり、宗教関係についての規範意識の統一性をみるのがこのエリアの目的である。Fessler は宗教を信ずる者が community の内部に存在することを前提として、宗教を信ずる者にとって当然要求される可成り普遍的な行動規範を尺度文章の中に取り入れている。

しかし開拓社会においては、既存農村におけるほど宗教は普及していないし、また宗教団体の勢力も開拓社会にまで伸展していないので、尺度文章に対して積極的な反応をしめさず「判らない」と答えるものが少なくない。そこでこのエリアには、該当事実がないという問題がおきる可能性がある。しかし宗教ということを広義に解釈して、人々の「敬神崇祖の観念」であるとみるならば、開拓農家の内面生活の中に、この要素が全く介在しないとはいえない。事実、どの開拓地でもその開拓地の氏神が祭られている実情であり、従つて、開拓者の間に宗教的関心が全くないとは考へられない。たとえ無信教の者があつたとしても、他の信仰をもつ者に対して、その者が全く関心をもたないなぞということは、殆んどあり得ないのである。それ故に、積極的、消極的の差こそあれ、開拓農家もまた、何等かの形において宗教に対する関心はあると云つても決して過言ではない。

このような推論を前提として、このエリアについての連帯性の測定を試みたのであるが、その結果は次の如くである。

先ず、連帯度によつて開拓社会と既存農村との相違を分析してみると、8つの開拓部落のその平均値が0.319であるのに対し、4つの既存農村の平均値は0.406であつて、その較差は0.087である。従つて、ここでも開拓社会における連帯度は既存のそれよりも劣つてゐることが判る。

次に8つの開拓部落相互間における相違についてみると、最高は「大与地」の0.645に対し、最低は「拓北」の0.080である。ところが「大与地」における連帯度の高さは、宗教の対する規範的肯定の積極性の故に高くなつてゐるのではなく、むしろ比較的に関心のないものが多いために消極的な面において関心が統一されている為とみられる。第1、この奥地にある開拓地には宗教団体なぞ入つておらず、これについての関心は積極的には存在しない。第2に宗教的行動についても、各人の内面における現象は別として、他人がみて外的に判断評価出来る様な明白なものに殆んどあらわれてこない。これ等の理由から、この尺度文章に対しては「判らない」と答えるものが圧倒的多数を占め、意見はその水準に集中してくるので、計算の結果一応連帯度だけは高くなつて出てくるのである。

しかし、「大与地」の如きを例外はあるが、開拓社会におけるこのエリアの連帯性は一般に決して高いとは云えない。既存農村では、殆んどが、0.4台の連帯度をしめしているのに、開拓では、常にスコア・レベルが低く、低い点において非常によくまとまつてゐるというネガティブな連帯性しかみられない。

これは宗教団体そのものの活動が既存農村において活潑であるということと共に、宗教的行動様式そのものが、開拓社会ではまだ慣習化されていない結果に外ならない。いずれにしても、この領域における開拓部落の平均連帯度は、8つのエリアのうちで最低値をしめしていることが注目される。

(6) Economic Behavior (E.B)

「経済上の行動様式」についての規範的意識の連帯性をとらえるのがこの領域の目的であるが、ここで「経済的行動」というのは、農家の営農観念とか経済的合理性とか云う様な観念形態とは若干異つた意味をもつてゐる。むしろそれは部落員としての農家の日常生活における極く一般的な経済的行動に対する規範意識を内容としたものと思われる。

5つの尺度文章は、かかる意味において極めて通俗的な価値観を内容としており、また経済行動をこのような面に限定していると考えられる。たとえば、市街地にある商店の農家に対する公平なサービスの期待などは、極めて日常的な性格をもつた規範的意識であつて、経営行動の如きビヘビアーとは異なる。

しからば、このエリアにおける開拓社会の連帯性の特色は如何なるものであろうか。

先ず特記に値することは、このエリアにおける連帯性だけは、開拓社会も既存農村も両者に大差がなく殆んど同一の水準を保っているということである。

今、連帯度によってこの間の事情を解明してみると、各地域における連帯度の平均は、

開拓部落平均……………	0.395
既存農村平均……………	0.405
<hr/>	
較差……………	0.010

となり、相互の差は僅か0,010にすぎない。また S.D. やスコア値の如き連帯値を較べてみても両者の差は僅少であつて、有意な差は認められない。

かくして、一般に開拓社会におけるこの領域の連帯性は、既存農村におけるそれに極めて近似しているが、開拓が既存にかくの如く近接した連帯度を保っているエリアは、8つのエリアのうちこの Economic Behavior のエリアのみである。

しからば、既存との比較ではなく、開拓社会内部においてはどの様な特色がみられるであろうか。今この点について検討してみると次の如き特色がみられる。

先ず、近くに市街地をもつた開拓部落についてみるに、このエリアにおける連帯性は高い。「新内」「ニセパロマナイ」「拓北」等はその例であつて、その連帯度はいずれも0.400を越えている。近所にある市街地の各商店は、これ等の開拓地における農家を最も大事な顧客として取扱わねばならない関係におかれているから、市街地の商店の公平なサービスに対する開拓農家の判定は当然好ましいものとなつてあらわれる。反面、市街地を可成り遠方にもち、遠くの商店に依存しなければならない開拓地では、概してこの様な公平なサービスを期待することが出来なくなつてくる。例へば「赤井川」などはその最も代表的な例であつて、近辺に市街地をもたず、それを約8kmも離れた本村市街地に求めなくてはならぬ所では、市街地の商店そのものが、開拓地などをあてにして商売はしていないから、どちらかといへば開拓農家に対するサービスは悪くなつてくる。また空間的に距離が遠くなればなる程、社会的接触も疎遠になるのがこの開拓地の一般的特色であつて、このことが商店のサービスに偏向を生じさせる原因にもなる。

もつとも、この Economic Behavior のエリアは、このような商店のサービスに対する反応のみで構成されているものではない。このエリアにおける連帯性を規定する素因は他にもある。その1つとしてあげられるものは、部落内における経済的な階層分化の存在である。まだ部落の歴史が新しく、そこにまだ経済的な階層分化が発生していないうちは、開拓社会における経済的意識或いは経済概念にも分化が生じない。多くの開拓部落は極めて貧困で、この種の類型に属する。このような状況にあるうちはこのエリアにおける連帯

性も決して低くならない。皆が困っているのだという共通の観念は、1つのまとまった連帯感に外ならないからである。

所が、開拓農家の間に、いつしか経済的な優劣ができはじめると、この連帯感は次第に崩壊していく。「赤井川」はその1例である。この部落におけるこのエリアの連帯度は僅か0.187であつて、8つの開拓部落中最低である。それは、部落内に生じた階層差に対する意識の故であつて、上層農家に対する反目がここでは明らかにその1つの要因となつている。部落の規模が小さいだけにこの現象はとくによく目立つと思われる。

この点、既存農村においては等しく階層分化があつても、それが連帯性に及ぼす影響は、開拓とは異つた形をとる。長い歴史と生活のうちに形成されて来た階層差は、既存農家の個人の立場からすれば、差の生ずるのが当然であるとも意識されており、従つて階層差は、このEconomic Behavior のエリアにおける連帯感を決定的に悪いものにはしない。しかるに開拓社会では、入植した当時は誰しも殆んど裸一貫であつたという意識が強い。それが短期間のうちに富農と貧農とに分かれる。この現実に対して富農も貧農も互に相手に対して、それなりの経済的規範意識にもとづく反撥心を抱くのはむしろ当然であつて、ここから経済的行動に対するお互の評価の違いが生じてくる。そしてこの喰いちがいが、結局このEconomic Behaviorの領域における連帯性を低位なものに規定してしまうのである。

それ故に、開拓社会でも短期間の間に著しい階層分化が生ずれば、このエリアにおける連帯性は低くなるという可能性が潜在しているものとみられる。しかし現在のところ、このような開拓地は極めて少いであらうし、また本調査の範囲内ではわずかに「赤井川」にその例をみるにすぎないので、一般にこのエリアにおける開拓社会の連帯度は、既存農村のそれにくらべて極端に低くはならないものと解される。

尤も「共和」はやや「赤井川」に類似した性格をもつているので、この点を考慮する必要があるが、このことは、以上の論旨をくつがえすことにはならないばかりか、かえつてそれを正当化する素材としてむしろ注目に値する。

(7) Local Government (L.G)

地方自治即ち、村政や部落内の自治についての規範的意識を素材として、その統一性や連帯性を抱えようとするのがこのエリアの意味である。このエリアを構成する5つの尺度文章は、村政町政に関するものが3項目、部落内の自治に関するものが2項目という編成になつている。従つて農政や開拓行政に関する規範は尺度文章の中にとり入れられていない。

このエリアにおける連帯性の第1の特色は、(平均連帯度によつてみると、)開拓の方

が既存よりもまさっているということである。但しこれは、規模の小さな特殊開拓部落である「新内」が0.501という極めて高い連帯度を保っているからであつて、この特殊部落を除外して、平均を出してみると、開拓の平均は0.277となり、既存の平均連帯度0.295と略々同一数値となるのである。しかし、既存でも函館の「大野」の如きは、僅か0.123という低い連帯度を保っているに過ぎず、これ程低いものは、開拓の部落にはどこにも見当らないから、結局、このエリアにおける連帯性は、既存よりも開拓の方がまさっているとみられる。このことはまた、既存の方が、地点によるばらつき或いは格差がはげしいが、開拓の方は「新内」の如き特殊部落をのぞけば、大体において似た程度の連帯性をしめすものであることを物語っている。

第2の特色としてあげられることは、一般に、開拓部落では部落による格差は極めて少ないが、しかし、連帯性の水準そのものは決して高いものではないということである。いま5つの尺度文章を分解して、その反応をしらべてみると、開拓農家には、開拓地で望ましい政治が行われていないとする不満が多く、また真の指導者についても、その存在を否認する傾向が強い。しかし、このような傾向はひとり開拓地のみにおける現象ではなく、既存農村においても同様或いはそれ以上にあらわれていることを注意しなければならない。就中、既存の連帯度の平均値0.295は、8つの領域中最低であつて、既存農村がこれほど低い連帯度をしめたエリアは他にはない。

従つて、地方自治や村政をめぐる連帯意識は、相対的ではあるが、既存農村に大きな問題を残していると言える。もつとも、さればとて、開拓社会には問題がないというのではなく、「赤井川」「大与地」「岩尾別」等の開拓部落における連帯性の水準は、満足するに足るほど高いものでは決してない。それ故にこの問題は、既存・開拓ともに共通する問題とみる事が出来る。

かくして、Local Government のエリアにおける連帯性の問題は、村政・町政或いは開拓行政にたずさわる者にとつて充分考慮しなければならない問題である。この問題を解決するためには、農民に納得のゆく政治を実施することが必要であり、自治体の行政活動についてのP・R・の普及徹底、部落内における非民主的勢力の根絶等々一連の対策が必要とされる。これとの関連において、とくに開拓地で問題になるのは、開拓農協をめぐる紛争がこれからんでいることである。このことが、開拓農民の政治意識を可成り不明朗なものにしていることは覆うことの出来ない事実である。この問題と役場の開拓に対する積極的な行政効果の実現の問題が解決されれば、このエリアにおける連帯性は可成り高まるものと推定される。

この点、既存農村におけるこのエリアの連帯性の低劣性にはむしろ救い難いものがあると思われる。長い生活経験の中から湧出した村政に対する不満は恐らく一朝にして解消することは出来ないであろう。とすれば、このエリアの連帯性をめぐる連帯性の問題は決して開拓地におけるような方法では解決しえないであろう。

この外、一地点における開拓と既存との政治的対立が両社会のこのエリアにおける連帯性を低める一つの重要な要素になつていることも決して見のがすことは出来ない。「赤井川」などはその一例であつて、開拓農家の政治意識の内容には近隣の既存農家に対する村政との関連において極めて微妙なものがある。

(8) Tension Area (T.A.)

個人ないしは集団相互間の要求或いは意志の相互矛盾・葛藤などによる不和・反目・抗争等々の諸関係についての規範的意識をみるのがこのエリアの目的であり、また意味でもある。ここでは、その代表的な契機をなすと思われるものを尺度文章中にとり入れ、「部落への仲間入り」「男女関係の葛藤」「ものわりの程度」「反目抗争関係」「人種差別」等5つの項目が用意され、これによつて緊張関係についての意識の連帯性が測定されるようになってゐる。

このエリアにおける連帯性の特色として注目に値することは、開拓社会における連帯性が非常に高く、その平均連帯度は、既存農村におけるそれを遙かに凌駕していることである。ことに、「新内」の如き開拓地では、連帯度0.727という最高の値をしめしており、既存・開拓を合せて、これ程高い数値をしめたエリアは外にはない。「新内」のように極端に高い連帯値をもつ地点があるために、開拓地の平均値は、既存よりも高くなつてゐるわけであるが、しかし「新内」を除外して、平均値をとつてみても、なお開拓の方が既存よりも可成り高い数値をしめしている。

いま前掲第7表、第8表より、連帯度のみをとつて、その数値を明らかにしてみると、次の如くである。

8つの開拓部落の平均連帯度	0.441
4つの既存農村の " "	0.375
較 差	<u>0.066</u>
「新内」を除いた7つの開拓部落の平均連帯度	0.403
4つの既存農村の平均連帯度	0.375
較 差	<u>0.028</u>

これによつても明らかなる如く、この領域における開拓社会における連帯性の優位性は殆んど疑うべくもない。

またこの0.441という開拓部落の平均連帯度は、8つのエリアにおける平均連帯度中最高であつて、0.4以上の値をもつものはこの Tension Area のみである。

このようにして、開拓社会における連帯性が、このエリアにおいてだけ特に高いのは、開拓社会そのものが極めて新しい社会であり、幾世代にもわたつて根にもつような葛藤や反目を生み出すだけの時間的余裕がないためである。この点、既存農村とは異つた事情にあると云わねばならない。既存農村では、その古い歴史とともに、昔からの諸般にわたる「わだかまり」「しこり」等が各戸の間に累積している場合が少なくないのであつて、このことがこのエリアにおける連帯性を低いものにしてゐる。軌中水田農村における土地と水をめぐる対立は、屢々この緊張関係を拍車をかける可能性があり、「大野」の如き古い水田農村の場合、このエリアにおける連帯性の低くなるのは容易に背ける。

所で、この緊張関係のエリアは、人間関係を媒介としてゐるから、理論的には、Ⅱの Interpersonal Relations の領域と密接な関連をもつ筈である。そこで、この緊張関係のエリアにおける連帯性と、対人関係のエリアにおける連帯性とを比較検討して、両者の関連を明らかにしてみる。

先ず、既存農村について、この2つのエリアにおける平均連帯度を比較してみると、Tension Area における連帯度は平均並であるのに対し、Interpersonal Relations のエリアにおけるそれは、0.340であつて、Tension Area の方が0.034だけ高く、大差のないことがわかる。ところが次にこの比較を開拓社会について行つてみると、そのTension Area についての連帯度の平均は0.441であるのに対し、Interpersonal Relations におけるそれは、0.208であつて、前者の方が実に0.233だけ高いことが明らかであり、両者間に一応大差のあることが認められる。

之を要するに、開拓社会における対人関係の領域における連帯性の低さは、その対人関係における好ましからざる傾向が緊張関係に発展するほど深刻なものではないが、既存農村では両者の間に関連をまねくほど、対人関係の内容そのものが好ましくないという見方が成り立つ。しかし、5つの尺度文章の意味、内容をより厳密に解釈すれば、このような判断を下すのは些か早計であるとも考えられる。蓋し、この Tension Area の領域における人間関係と、Interpersonal Relations の領域におけるそれとは、人間関係の可成り異つた局面を取り上げて尺度文章にしてゐるからであつて、両者の一応の有機的関連から、直ちにこの2つのエリアにおける連帯性を結合させて判断することは必ずしも適当と

は云えない。

従つて、このエリアにおける連帯性については、これをこのエリアにおける独自の現象として、率直に受取る方がむしろ妥当と思われる。

以上、ここでは、8つの連帯性のエリアについて、開拓社会における連帯性の特色を既存農村との比較において検討した。これを要約してみると次の如くである。即ち、

- (1) 一般に開拓社会における連帯性は2, 3の例外を除けば、どの部落、どのエリアをとつても、既存農村における連帯性より低い傾向がみられる。
- (2) 開拓社会において、高い連帯性をしめしているエリアは、Ⅷの Tension Area 及び Area I の Community Spirits の2つの領域のみであつて、この2つのエリアだけは、既存よりまさつている。
- (3) 開拓、既存ともに略々同一水準の連帯性を保つとみられるエリアはⅥの Economic Behavior のエリアだけである。
- (4) 既存農村において、とくに開拓より目立つて高い連帯性をしめしているエリアは、Ⅱの I.R., Ⅲの F.R., Ⅳの S., Ⅴの C. の4つのエリアである。

以上の4点が、エリア別連帯性の特色としてあげられる点である。

しかし、この特色は、本調査に関する限りにおいて扱えられた特色であり、将来より多くの標本をえらんで調査しなければ、これを一般化するわけにはゆかない。

また、同一部落、同一地点について、時点をこことにする調査を繰返して行えば、連帯性についての変動過程が一層明白になる。この点についても、今後の調査と研究にまたねばならない。

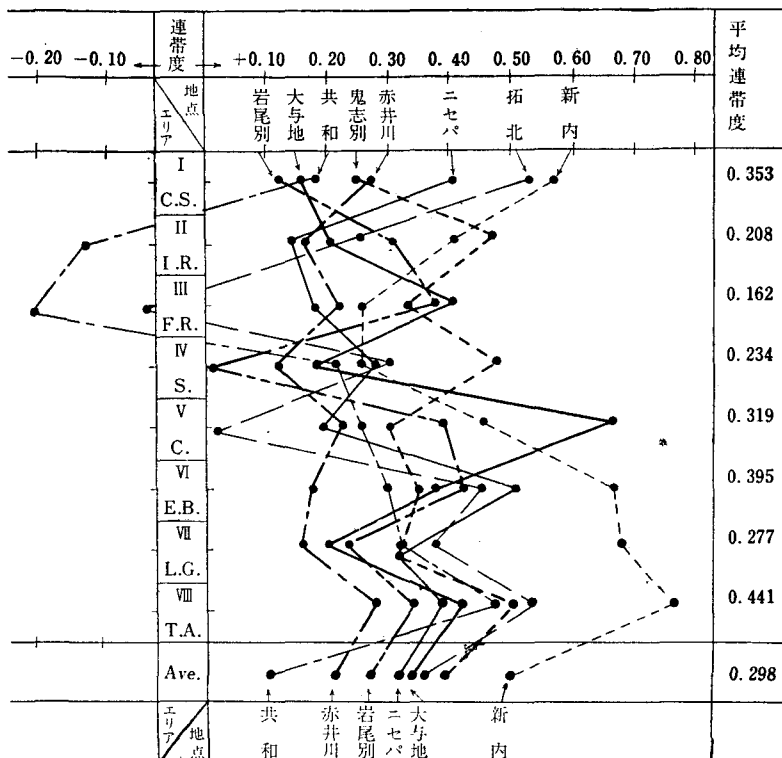
Ⅳ 部落別連帯性の特色

各々の開拓部落において、その連帯性に如何なる特色がみられるかについては、前項のエリア別分析においても若干触れた。しかし乍ら、この調査において選ばれた8つの開拓部落の一般的特色については殆んど触れるところがなかつたので、ここでは、各々の開拓部落の概況を明らかにすると共に、各部落における連帯性をめぐる特色について、とりまとめてみることにする。

最初に、8つの開拓部落における連帯性を、単位「連帯度」によつて、地点別、エリア別に比較して図示してみると、第7図の如くなる。

第7図によつても明らかなる如く、今、平均連帯度（8つのエリアの連帯度の総部落平均値）の最も高い部落から順序にランクをつけてみると、次の如き配列となる。

第7図 開拓部落のエリア別連帯度



順位 (rank)

1. 新内 (0.467) → 2. 鬼志別 (0.373)
3. 大与地 (0.322) 4. 拓北 (0.317)
5. ニセバロマナイ (0.289) 6. 岩尾別 (0.286)
7. 赤井川 (0.224) 8. 共和 (0.132)

即ち、最高は「新内開拓部落」の0.467から始まり最低は「共和開拓部落」の0.132に終り、8つの開拓部落は、この間にそれぞれのランクをとつて位置する。そこで、ここでは、この順序に従つて、各部落の概況と、その連帯性をめぐる諸特性について分析を試みることにする。

(1) 新内開拓部落

先にも触れた如く、十勝の新得町北西部に位置するこの「新内開拓」は、開拓部落とし

ては特殊な性格をもつた所である。狩勝峠のすぐそばに位置するこの地は全く人里離れた僻辺の地であるが、戦前にはかつて、90戸に及ぶ開拓農家が入植し、2つの部落を作つて可成り栄えたことがある。それが部落内部の組合の債務不履行にともなう部落員の連帯責任の問題を契機として、崩壊の一途をたどるところとなり、部落民は自己の担つた連帯債務の怖しさにたえかねて、いつしか1人去り2人去りして、数年を経ずして90戸に及ぶ開拓農家の殆んど大部分は離脱した。組合の責任者の或る者は責任を痛感して自殺したとも伝えられている。しかし、それでも10戸程度の開拓農家が残留していた。ところが、戦前の満州開拓が国策として喧伝されるや、この残留組の大半は新内をあとにして満州にわたり、僅かに2、3戸の農家がここに残るにすぎなくなつた。当然、小学校は閉鎖となり、売店はなくなり、地区は全く荒廃した。終戦となつて緊急開拓が焦眉の急務とうたわれ、再び新内地区に開拓の脚光が浴せかけられたが、満州で失敗した渡瀧組のかつての入植者達の中には、やはり新内が忘れられず、再びここに戻つて来たものもあつた。これと開拓農家の分家なぞも加わつて、現在はようやく15戸程度の開拓農家が、1000町歩以上もある広大な未墾地の中に、点々として開拓営農にいそしんでいる。

このようにして、新内地区は全く戦前に入植跡地であつて、戦前より住む草分けの存在が現在の部落の中核を成している。

この開拓地区についての説明は、拙稿「北海道十勝川上流開拓地区における未墾地開発と集落設計」（昭和33年）において詳細に亘つて展開したので、ここではこれ以上は触れないが、いずれにしても、この地区は極めて特異な歴史的背景と特殊な社会的自然的環境をもつ地区と云える。しかし、北海道の戦後開拓地には局部的ではあるけれども、案外このような性格をもつた開拓地がある。「大与地」や「赤井川」にもこの種の性格がみられるし、またこの外にも類似の歴史的背景をもつ開拓地が案外多い（例えば、胆振の大滝開拓地区の如し）。かかる意味あいからすれば、「新内」あまりを特殊扱いにすることは当をえないと思われる。

さて、しからは、新内地区における連帯性には如何なる特色がみられるであろうか。前述した如く、この部落における連帯性は、「学校関係」のエリアにおける連帯度0.182、及び「家族の責任感」のエリアにおける連帯度0.237の2つをのぞけば、残りの6つのエリアにおける連帯度は非常に高い。とりわけ「緊張領域」における連帯度は、極度に高く、実に0.727をしめし、本調査中最高値をしめしている。又、「経済行動」「地方自治」等の領域にかける連帯度も可成り高く、それぞれ、0.644、0.501をしめしている。この外、「共同社会の精神」「対人関係」「宗教関係」の領域における数値も高く、いずれも

0.400 をオーバーしている。かくも多くのエリアについて高い連帯度を保っている部落は開拓は無論のこと、本調査の対象となつた既存農村のどこにもみることが出来ない。

また連帯度ばかりでなく、S.D. やスコア値の如き他の連帯値についてみても「新内」は極めて好ましい内容をもつていると云へる。ただ規範意識そのものにやや積極的肯定性にかけるうらみがあるが、しかしこれとても、他の開拓部落に比較すれば、決して劣等なものではない。

しからば、新内地区における開拓農家の連帯性が、かくも高いのは一体如何なる理由に基づくものであろうか。

その主なる理由として、

- (1) この部落が過去において共通の運命と経験とをもつ同一経歴の極く少数の農家によつて占められていること。
- (2) 戦前入植の残留者によつて占められているこの開拓地は、これ等の人々にとつてはかけ甲斐のない楽土であること。
- (3) 立地条件からして、社会的には可成り孤立した社会であるが、成員の数が少なく、生活もシンプルであるために相互依存が成り立ちやすいこと。
- (4) 新しく、開拓計画が樹立された為、将来に対する期待が、成員の共通の関心事として、成員に統一をあたえていること（現に建設工事が進められ各種の試験が行われている）。

等々をあげることが出来る。

これ等の理由によつて、この部落の連帯性は一般に高いものになつているが、このような特殊性があるにも拘らず、なお「新内」は普通の開拓地同様、これに共通する欠点を持つている。即ち「学校関係」「文教」に対する悩みがそれである。かつては地区内に小学校があつたが、現在はそれが無い。この地区は最寄の小学校まで約8kmの距離があり、冬期間の通学は積雪のために困難を極める。高校は新得町まで行かなくてはならない。教育に熱心な地区の父兄の中には、これに悩みながらも、新得の高校に子弟を通学させているものがある。このような人々に対して、一部には開拓者には学問なぞさせる必要はないとする人々もあつて意見が対立するので、ためにこの「学校関係」のエリアにおける連帯性は低位なものにならざるを得ない。これは開拓地に共通の現象である。

また日々の営農と開墾とにこそがれる労力には決して余剰を生ずる可能性がない。開墾に集中すれば営農はおろそかになり、営農に集中すれば開墾はそれだけ停滞し、近々に実施される成功検査に不合格となり土地を所有しえないことになる。そして営農を軽視すれ

ば、喰つて行くことが出来なくなる。その双方に対して余力に乏しい家族労働力を完全に燃焼させて行かねばならない。それでも喰えない場合は出稼による現金収入をあてにしないでならず、乏しい労働力はこれによつてますます不足になり、どうしても開墾は遅れ、畑は荒廃し勝になる。日々の生活がこのような状態では、当然、家族員就中子供たちに対する監督やしつけに十全を期することは不可能となり、「家族の子弟に対する責任感」は不如意ながら低いものとなつてしまうのである。これは何も、「新内」のみに限られた独自の現象ではなく、開拓社会に共通する現象の1つである。

之を要するに「新内」は開拓地としては一応特殊な性格と、極めて一般的な性格との両者兼ねて合わせ併有している。そしてこの様な社会的特性が、その連帯性の上で以上の如き形をとつて如実に反映している。

(2) 鬼志別開拓部落

北海道の北部オホツク海側に展開されている猿払原野に設営されているのが、この鬼志別開拓地区であり、地区は3つの部落(団地)に分かれている。この調査ではそのうち2つの部落について測定を試みた。

この鬼志別開拓は天北地区における開拓地としては最も問題の多い、典型的な戦後開拓地である。地区は蛇行した猿骨川に流れ、これによつて2分され、芦野市街地寄りの芦野第1・第2部落と、豊里部落から構成されている。調査年度(昭和32年、1957年)におけるこの地区の総農家戸数は、芦野第1第2が56戸、豊里が14戸、豊里が14戸で、合せて70戸に及んでいる。入植は昭和25年に第1回目が実施されており、主に樺太よりの引揚者が入植している。その後昭和30年迄、毎年継続的に入植がなされてきたが、この項より天北地区総合開発の一環として、この地区の農業開発が再計画に付せられるようになったので、一時入植はとめられた。

地形としては、「豊里」は酸性の強い湿地帯に立地する部落であるが、土地が非常に悪く、しかも猿骨川は、春夏秋の3回にわたつてほとんど毎年の如くこの地区に大洪水をもたらす。営農はその為に安定せず、不振地区たるをまぬがれない実情にある。この点「芦野」の方は立地的には「豊里」よりはややめぐまれている。しかしここは起伏のはげしい丘陵地帯であつて、地味は瘠薄な重粘土からなつていてよくない。市街地としては、「豊里」の場合は約3kmはなれた所に鬼志別の市街地があり、「芦野」は約4kmはなれた所に芦野市街地をもつ。両市街地ともに鉄道駅をもつ比較的に立派な市街地であつて、鬼志別はこの地方の civic center を形成している。

この調査では、「豊里」全戸と「芦野一区」とを悉皆調査し、これを「鬼志別、A B」と表現して必要な分析を加えた。

この「鬼志別開拓部落」における連帯性の特色として、先ず指摘しなければならないことは、Tension Area, Schools, Family Responsibility 等々の3つのエリアにおける連帯度が可成り高く、それぞれ、0.483, 0.487, 0.468という0.400をオーバーする数値をしめしていることである。また低いものとしては、とくにきわ立つて低いエリアがないということ、従つて、概してどのエリアも円満な連帯性を保っているということがその主なる特色としてあげられる。ただ、Community Spirits のエリアにおける連帯度だけは0.337にとどまり、平均水準0.353を下回る成績でやや低目である。しかしこれとても、他の開拓部落におけるこのエリアの連帯度にくらべれば決して極端に低いものではない。

ところが、連帯度が概して高いからと云つて、これのみに依つてこの部落の連帯性を判定することは些か危険である。例えば、「Schools」のエリアにおける0.487という連帯度にしても、数値そのものの水準からすれば決して低いものとは云い得ないが、これを他の連帯値 S.D. やアコフ値によつてみると、このエリアにおける鬼志別の連帯性は、むしろ規範に対する低い肯定性をしめしており、その低い肯定性において、強いまとまりがあるという傾向みられる。即ち、このエリアにおける取得スコア(平均)は僅かに、12.7で規定の最高値の半分以下であるが、これに対する「ばらつき」は非常に少く S.D. は僅かに1.83であつて、否定的な反応の点に意見が集中していることがわかる。

従つて、意見に統一性があるから連帯度は高くなるが、このことは現在の文教の状態に対して満足していることを意味するものではなく、逆に大部分の開拓農家が一致して不満に思つていることを意味する。「学校関係」のエリアについては、他の開拓地におけるが如く、ばらばらなる意見の反応がみられないところに、この鬼志別の特色がみられる。学校関係の問題についてはこの開拓地もやはり開拓地特有の悩みを多分にもつているといえる。

次に Community Spirits のエリアにおける連帯性についてみるに、このエリアにおける連帯性の低さ(相対的)には、「豊里」と「芦野」の2つの小部落を一緒にしたことから来る問題がある。即ち、「豊里」では、極めて諦観的にこの不毛の地に執着する者と、然らざる者とが鋭く対立しているが、「芦野」では、諦観論者は割合に少い。この様な構成要素の異質性は、連帯性を極めて中途半端なものにしてしまうのであつて、このことがとくにこのエリアにおける連帯性の低位性を決定づけているとみられる。

この外、Local Government, Churches 等のエリアにおける連帯性についても、規範に対する肯定性が弱く、その割にまとまりの方はやや強いという傾向がみられる。

(3) 大与地開拓部落

大与地開拓部落は十勝川上流の一大支流、利別川流域の山麓高台地帯に位置し、その地点は足寄町（本町）の北東約 30 km、達別町の南西約 10 km のところに位する。地区の西部は約 20 km にて大雪山系的高峰キトウシ岳に接し、また東は約 25 km を経て、雌阿寒、雄阿寒岳の雄姿を望むことが出来る。地名「大与地」は、もともとアイヌ語の「オヨチ」或いは「オイ・オチ」からきたもので、その意味は「熊の害の多い所」或いは、「川口に蛇の多い所」（事実そうである）という意味があると云われている。また一説によると、「オヨチ」は「狩猟の神が集まるところ」でもあるとも云われている。

この開拓地区の最寄のセンターは網走本線の大与地駅所在の大与地市街地であつて、開拓農家はこの市街地と足寄町本町の 2 つの市街地に依存している。地区の中央には、大与地川が流れており、これを境として、地区は「北大与地部落」（9 戸）「共栄部落」（8 戸）「上大与地部落」（24 戸）の 3 つの小部落に分かれている。

地区は概ね、標高 350 m に及ぶ高台地となつており、起伏ははげしく表土が粘土質であるために地味は瘠薄にして排水が悪く、所々に湿地を形成している。加うるにこの地区は典型的な無水地帯であつて、農家は年中これに悩まされている。この地区は 1,120 町歩に及ぶ開拓予定地をもつており、今後積極的に開拓建設工事が進められる計画となつてい

る。初期の入植は意外に早く、大正 6 年頃府県よりの団体入植が行われ、その後引継ぎ開拓がなされている。また昭和 8 年には根釧原野より 32 戸の農家が集団移住しているので、一時は可成りの盛況を呈した。しかし乍ら、開墾の不振と営農の失敗とは、この地区の将来を暗いものにし、爾来、脱落者を続出するところとなつて終戦当時迄には、僅か 10 戸たらずの農家しか残らなかつた。しかし、戦後引揚者を中核とした再入植が行われたので、調査当時（昭和 31 年）では、前述の如く約 40 戸に及ぶ農家が 3 つの小部落に分かれて定住するところとなつた。

その 1 戸当りの平均耕地面積は 5.08 町であつて、うち作付が行われている面積は平均約 3 町歩程度である。作付は主に大豆、菜豆の如き豆類が多く、作付面積の 3 分の 1 はこれに当てられている。しかし土地が瘠せている為に、耕種のみには依存したのでは生計がたないで、馬の飼育が盛んに行われ、殆んどどの農家も年間放牧による馬の飼育を行つており、為に 1 戸当りの馬の所有頭数は、平均成馬 2.4 頭、仔馬 1.3 頭となつている。牛の飼育も部分的には盛になつているが、全般にわたる普及は将来をまたねばならぬ状態で

ある。まだ安定化しない現在では、農家の農業収入よりも他への出稼による農外収入の方が大きい状態であつて、経営の合理化を1日も早く実現しなければならない。

地区には、大与地部落に唯一の小学校と青年会館とがあるが、この外神社や火見槽などを除けば公的施設はほとんどない。公共施設は、あまりよくない道路によつて結ばれている大与地市街地と足寄本町に依存しなければならず、目下地区計画についても再検討が要求されている。

以上、概説した如く、大与地地区は北海道の典型的な開拓地として、1つの類型を形づくると云わねばならないが、その過去の歴史には、前述した「新内」のそれに類似したものがみられる。

尚、この「大与地開拓」については、拙稿「北海道十勝川上流開拓地区における集落設営計画に関する研究」（昭和32年）において詳しく考察したので、ここでは概略の説明にとどめる。

次に、大与地開拓部落における連帯性の特色についてみる。

先ず、8つのエリアにおける連帯度の総平均値についてみると、その値は、0.322であつて、開拓地の平均0.298を上回っている。しかし、これを各エリア別にみると、8つのエリアのうち、SchoolsとLocal Governmentとのエリアにおける連帯度はあまり高くなく、それぞれ0.160、0.192をしめしているにすぎない。またとくによいものを拾つてみるとArea VのChurches(宗教関係)における0.645が目立つだけであつて、その外には極端に高いものはない。ただ、Family Responsibility, Economic Behavior, Tension Areaの領域における連帯度は比較的に高く、それぞれ0.381、0.365、0.383をしめている。ところが、このChurches(宗教関係)における連帯度の異常な高さは、スコア値平均14.7がしめす如く、尺度文章に対して「わからない」と答えたものが圧倒的に多く、その為にS.D.が僅か1.36という徹底したまとまり振りを発揮しているからであつて、それは規範意識の肯定性に由来するものではない。この点については、既に前項の「領域別連帯性の特色」のところでも触れた通りである。

これを要するに、大与地における連帯度の高さは、むしろcommunityの成員全体が宗教に対して無関心であること、宗教団体はこの奥地にある開拓まで勢力を伸していないこと、宗教的行動についてそれが外的に表現されるようなものはみられないこと等によつて、機械的にもたらされたものである。それ故に、このエリアにおける連帯性の高さは、これをもつて宗教心の篤い好ましい現象とみることは出来ない。しかし、そこに積極的な肯定性がみられないとしても、部落全体が「無関心的である」という点において非常に強

い一体感のあることは否定出来ない。この点において大与地は1つの代表的な存在ということが出来る。

次に、学校関係(Schools)のエリアにおける連帯性の低さであるが、この地区にある小学校は、中学校を併存しておらず、これを市街地に仰がねばならない。バスの便がないこの地区では、児童の通学の問題はまさに頭痛の種であつて、学校を中心とした問題について、種々なる規範意識や価値判断が部落内に湧出し、その為に極度に連帯性が低下するのは容易に肯首しうるところであり、開拓地共通の欠陥がここでも明瞭にあらわれているということが出来る。また Local Government のエリアにおける連帯性の低さは、開拓行政に対する不満もさることながら、林業勢力の優位をもつて支えられているこの足寄町市政に対する彼等開拓者の憤懣が、その根底に流れているためともみられる。このことはまた或る程度、開拓部落内における対人関係のエリアにおける連帯性の低下を余儀なくしている。多少とも政治的な色彩をもつた部落の指導者の言動に対する各人の評価は、甚だ区々であつて、更に土地の再配分をめぐる問題の困難性は、部落内に喧噪をもたらすところとなつている。そして、このことが対人関係の内容を可成り悪くしているとみられる。

連帯度 0.202 という対人関係のエリアにおける連帯値は決して望ましいものとは云えないのである。

以上が大与地開拓部落における連帯性の特色の主なるものであるが、これと比較的に類似した性格をもつた開拓部落に、「岩尾別開拓部落」がある。しかし岩尾別は大与地よりも全体として連帯性は可成りおちる。この点、大与地は全般にわたつて、やや円満な連帯性を保つ開拓部落であると云わねばならない。

(4) 拓北開拓部落

拓北部落と、後にのべる共和部落とは調査年度が最も古く、昭和28年に調査を実施しているので、現在では可成り変化していると思われる。

「拓北部落」は十勝・大樹町に所在する戦前入植地であつて、昭和のはじめ、密居制をとつて集落が設営された畑作開墾部落であつた。入植当時は約20戸の農家があつたが、この密居制による方式は、営農の拡張をさまたげたから、これを疎居制に切り替え、ようやく経営規模拡大の途をきり開いた。ところが、その後たまたま太平洋戦争に遭遇、大部分の男子が出征したために、労力不足におち入り、せつかく拡大・安定のきざしをみせた経営も再び不振におち入り、婦女子の労力によつて細々と経営が営まれた。終戦となつてから復員によつて経営体勢も一応恢復したが、しかし当時既に入植以来20年を経過したに

も拘らず、経営は必ずしも直ちに立ち直らなかつた。

調査当時は17戸の農家が畑作と酪農との混同経営を営み、1戸当りの平均耕地面積は、13町6反、最高が18町、最低が6町6反を経営していた。土地柄と面積からすれば、この開拓地は本道でも上層農村の部類に属する勘定となるが、実績は全くその名に値するものではなかつた。比較的平坦な立地に恵まれたこの開拓部落では年によつて異なるが、毎年豆類が最も多く作付され、続いて馬鈴薯、麦類等が作付された。機械化、家畜の導入等も、当時としては割合進んでいた方で、1戸当り平均、プラウ2.5台、ハロー1.8台、カルチベーター1.8台を所有していた外、発動機、カッターその他の農機具も可成り普及していた。牛は平均1.6頭、馬は2.0頭を所有していたから、さほど悪くはない。

前述の如く、現在部落は疎居性をとつているが、これもアメリカ農村におけるが如き疎居性ではなく、むしろ集団農場制の色彩をもつた散居性に近い。これより2~4kmのところ「尾田村」という市街地があり、「拓北」はこれを集落のセンターとしている。

家族の構成は世代が比較的若く、所謂発展型に属するものであり、世帯主の年齢はいずれもそろつて40才代であつて、家族員中には15才未満の子弟が多かつた。これ等の子弟の教育に対する関心は非常に強く、また、近接する「拓北実習所」の影響もあつて、農業技術に対する関心にも可成り強いものがあつた。

以上の如き状況から判断するならば、他の僻地の開拓部落にくらべれば、「拓北」は一応開拓に成功した所とみるべきであらう。しかし、その内部には社会的にも経済的にも未解決な問題点が累積しており、開墾は終了しながらも、まだ既存農村並に安定化し得ないという悩みをもつところであつた。

しからば、この様な特色をもつたこの拓北部落における連帯性には如何なる特性がみられるであろうか。今その主なる点について明らかにしてみると、次の如くである。

先ず第1に指摘しなければならない点は、この部落における連帯性のスコアが非常に高いことである。開拓地におけるこのスコアの平均は15.7であるが、拓北では、17.1をしめ、8つの開拓部落中第1位をしめている。このような特色は他の開拓部落には見られないところであり、既存農村に近い性格をしめしている。

第2に注目しなければならない点は、Area IのCommunity Spirits領域における連帯値が非常に高く、その連帯度が0.537をしめして、これまた8つの開拓部落中第1位をしめていることである。これと共にTension Areaにおける連帯性のスコア値が非常に高く、実に20.7という最高の数値をしめしていることも注目される。S.D.が多少悪い為、連帯度は0.516となり、開拓地では第2位となつているが、しかしそのスコア値は20.7

であり、開拓はもとより既存においてもこれを凌駕する実績をもつ地点或いは領域は1つもない。

第3に、この部落は一方において、以上のような極端に高い連帯性を発揮するエリアをもちながら、他方極端に低いエリアをもっているということがいま1つの特長としてあげられる。即ち、Area IIIのFamily Responsibilityの領域における連帯性の如きはスコア値、15.1、S.D. 3.93であつて、その「ばらつき」ははげしく、結局、連帯度は -0.010 となつている。また“Churches”（宗教関係）のエリアにおける連帯度も可成り低く、僅かに 0.080 をしめすに過ぎない。

以上の3点がこの拓北部落における連帯性をめぐる主なる特色であるが、学校関係、経済行動、共同社会の精神等々の領域における連帯性の高さは、既存農村を思わせるものがあり、結局この部落は入植以来歴史が長いだけに次第に既存農村の性格を具現してきているということが、この連帯性の測定結果からつかみとることができる。これに加えて、もし、Family Responsibility, Churchesの2つのエリアにおける連帯性が高まれば、既存農村と殆んど変わらない性格のものになるであろう。

しかし、連帯性の高いエリアは極端に高く、また低いエリアは極端に低いというこの拓北部落の連帯性の偏向現象は、なおこの部落に内在する社会経済的諸問題のむずかしさを示唆するものがあると思われる。

(5) ニセバロマナイ開拓部落

上川郡士別市に属するニセバロマナイ開拓部落は、現在22戸の開拓農家によつて構成されている。入植は昭和20年頃から、主に神奈川県下の戦災疎開者による集団帰農によつて開始され、当時は69戸の入植をみたが、その後脱落するものがあとをたたず、現在迄に47戸の脱帯農家を出し、結局22戸の農家が残留するにとどまつている。

地区の標高は平均180m程度であるが、小沢の多い複雑な波状性の傾斜地であつて、1戸当りの耕地面積は狭小である。地区営農計画では近い将来に耕地面積の拡大をはかり、耕地・附帯地合せて15町程度にする方針であるが、現在は、双方合せて1戸当り平均約9町にすぎない。土地は重粘土質で酸性が強く、又一部には乾燥地帯もあつて概してよくない。ただこの部落として恵まれていることは標高があまり高くないということと、約1kmの地点に温根別市街地があり、市街地迄の距離が、開拓地にしては珍らしく近いということである。従つて大方の社会的・生活的必需はこの市街地に依存することによつて充すことが出来るという便益がある。しかし、開拓農家の生活は農業所得のみによつて維持することは

出来ないので、農家家族の大半は、現金収入を目当てとした出稼、或いは農外労働に従事しなければならない。この為に、農業上の労力が不足勝になる傾向があり、この点において他の開拓地と同様の悩みをもっている。

とくに注意を要することは開拓農業協同組合をめぐる不正事件であつて、現在では一応解決されているが、この事件が開拓者の団結と志気に及ぼした影響は少なくなく、現在でもそれが何等かの形においてしこりとなつて残つている。もつとも、開拓農協をめぐるトラブルは、開拓地によく見受けられるところであつて、ひとりニセパロマイのみの現象ではない。

さて、連帯性についてであるが、この開拓部落では、Community Spirits, Economic Behavior における連帯性をのぞけば、残りの6つの領域における連帯性は可成り低い。就中 Interpersonal Relations, Family Responsibility, Churches の3つの領域における連帯性は、非常に低く、それぞれ、0.143, 0.135, 0.135 をしめすにすぎず、いずれも0.1台にとどまる。また、Area IV の Schools の領域における連帯度も0.267であつて決して良くない。

Interpersonal Relations のエリアにおける連帯性は、共和開拓部落の如き特殊な社会関係をもつところを除けば、開拓部落中では最も低い。その原因には種々なるものがあるが、前述の如き、開拓農協をめぐる過去の紛争が、この人間関係の局面における連帯性に直接間接の影響を与えていることは否定出来ない。

この外、Family Responsibility, Churches における連帯性も低いが、その低位性も他の開拓部落におけると同様の理由に基づくものと思われる。とくに宗教関係のエリアでは規範に対する肯定性がなく、むしろ否定的な反応が強い。

高いエリアとしては、Community Spirits, Economic Behavior の2つがあげられ、前者は、0.460、後者は0.480という連帯度を保つている。Community Spirits における連帯度の高位性は、やはりこれ等の開拓農家が残留組であることに起因するものであつて、土地に対する執着心が強いからである。この執着心は、対人関係における紛争を相殺して余りあるものがある。

また Economic Behavior の領域における連帯度が高いのは、部落内にさほど極端な経済的階層差がまだ形成されておらず、全開拓者が貧乏であること、市街地が近く、市街地の利用度が多いと共に、商店の開拓農家に対する依存度も高いためにもたらされたものとみられる。

これを要するに、ニセパロマイ開拓部落における連帯性の特色としては、土地に対す

る執着心を中心とした、Community Spirits の領域における高い連帯度と、Economic Behavior のエリアにおける連帯度の優位性の2つをのぞけば、一般に連帯性は可成り低いという特性をもっている。それだけにこの開拓部落は、社会的に未だ安定した境に達していないとみられる。

(6) 岩尾別開拓部落

北海道の最東北端につき出た知床半島のオホツク海側(北側)の半島中央部の高台地に位置するのがこの岩尾別開拓部落である。我々は、この開拓部落を最果の開拓地とし、また人間の生活の marginal land とみて選択し調査に入つたが、環境は思つたほど悪い所ではなかつた。

ここは典型的な戦後開拓地で約2,000町歩に及ぶ可耕地が未墾地のまま残されている。部落は250m程度の平坦な高台地に位置しているが、中央に岩尾別川が流れているために事実上部落は2分されている。この川の川口には孵化場と小学校があるが、他の公共施設は、約6kmはなれたウトロ市街地及び20kmはなれた斜里町市街地に負っている。現在、約⁴0戸の開拓農家が定住し、中には補助金でブロックの住宅を建てたものもあるが、最近、開拓計画(地区の)の進捗にともない簡易水道、青年会館、澱粉工場等が部落内にもうけられる。

土地は可成り肥沃であつて、最果の地ながら、気温は割に高く、毎年西瓜が収穫されるほどである。ただ交通の便が悪く、調査当時は斜里に通ずる唯一の幹線道路が建設中の為不通、最近になつてようやく開通した。冬期は陸上、海上ともに交通は全く朴絶し、この為に、急病人なぞの処置をめぐつて再三悲劇が展開されてきた。入植者は道内及び樺太よりの帰農者が大半を占めている。

知床はまた魚の宝庫と云われるが、オホツク海側は高さ200～300m位の断崖を形成しており、従つて開拓者は漁撈にはほとんど従事していない。ただ、冬になると農外労働として造材の山労働に従事する。

経営は現在畑作に重点がおかれているが近い将来に酪農化する計画で、現在、ショート・ホーン等を入れて検討している。その開墾面積はまだ不足で、1戸当りの平均耕地面積は3町未満であり、しかも充分熟成していない。

岩尾別開拓部落における連帯性の特徴として、先ず第1に指摘しなければならぬことは、Community Spirits と Schools のエリアにおける連帯性が極度に低いことである。これを連帯度によつてみると、前者は0.122、後者は0.003である。従つて、Community Spirits

の面からすると、前述したニセパロマナイとは正反対に、岩尾別は非常に低いということになる。これは交通の不便な、しかも人間が生活をいとみうる限界地に位置していることから来る一つの結果であつて当然なことであろう。しかしこの Community Spirits の領域における連帯性をよく分析してみると、スコア値は 17.1 という高さを保つており、決して悪くはない。ただ S.D. の値が大きすぎるために、連帯度もおちて来るのであつて、このことはこの土地を非常に良い所と思つている開拓農家と、この土地に愛想をつかしている開拓農家との 2 つの相反する性格をもつた農家が部落を構成していることを意味する。しかし、いずれにせよこの、C.S. のエリアにおける連帯性は可成り低く、その連帯度 0.122 という数値は、8 つの開拓部落中最低であつて注意を要す。

或る開拓者はこの土地のことを人生の終着駅であると表現したが、確かにこの部落の開拓者の中には本道の各地を流転し、遂に行く所がなくなつてここに定住したという者も少くない。このような開拓者の中にはなかば諦観的な気持をもつものもあるが、しかし中にはこれ以外に行く所がないからという覚悟で、営農と開墾に邁進しているものもある。このような意識構造からしても、当然このエリアにおける連帯性は微妙なものとな。

次に「学校関係」の領域における連帯性の問題であるが、この領域における連帯性は、反応の肯定性が低く、しかも「ばらつき」が激しく、問題の複雑性を示唆している。学校教育をめぐる第 1 の問題は、教員の問題である。教員は居るには居るが、非常に勤続性がなく、すぐやめて行つてしまう。このことが児童の教育に大きな影響を与え又 1 つの支障となつている。第 2 の問題は、通学の問題で冬期は無論のこと、夏期間でも通学は決して容易ではない。第 3 は、これ等のこととの関連において、勉強が遅れていることであり、小供達もあまり勉強に熱心ではない。Schools のエリアにおける連帯性の低位性はこれ等の理由に基づく。

翻つて、連帯性のレベルが比較的に高いエリアについてみる。Economic Behavior. Churches, Family Responsibility の 3 エリアにおける連帯度は比較的に高く、夫々 0.415, 0.383, 0.375 をしめしている。このうち、宗教関係の領域における連帯性は、他の一般の開拓地におけると同様、関係事実が稀薄なためと、関心がうすいことから、このような高さを保っているわけであつて、特記に値するようなことは全くない、また、Economic Behavior のエリアにおける連帯性の高さも、開拓地に共通する原因によるものであつて、別に異とするに足らない。

問題は、Family Responsibility における連帯性の特色である。その 0.375 という連帯性は決して低いものではない。該して無頓着なるをもつて 1 つの通有性とする点からすれば

ば、この家族の子弟に対する関心は、この開拓部落では他より可成り高いとみられる。これはこの部落に、地区と農家の子弟の将来を思う優秀な指導者がいる為であつて、この指導者の努力によつて、家族員に対する農家の配慮も可成り高くなつていとみられる。また、この寂しい北辺の開拓地では互に家族員が慰め合い励まし合うだけの余裕をもたなくては暮して行けるものではなく、隣人との間においてもまた同様である。年々幾度か開催される部落の催しものには、部落員殆んど全部が参加しているが、このようなことがこのエリアにおける連帯性を高いものにしてゐる。

このことは、ひとり F.R. のエリアにおける連帯性を高めているばかりでなく、或る程度、対人関係のエリアにおける連帯性も高いものにしてゐる。また僻地であるだけに児童の将来に対する父兄の関心も強く、このことは、一方において、この F.R. のエリアにおける連帯性を高めていると共に、他方においては、そのはね返りとして、現実の学校教育の実態に対する強い不満となつてあらわれ、Schools のエリアにおける連帯性を低いものにしてゐる。

いずれにしても、この開拓地は将来よくなる可能性を多分にもつてゐるとみられる。尚、この開拓地にも開拓をめぐる問題があり、調査当時はいまだ未解決であつた。

(7) 赤井川開拓部落

—常盤、落合開拓部落—

余市郡赤井川村に所在するこの調査地点は、実は「常盤部落」と「落合部落」の2つから成り立つてゐる。赤井川村にはこの外にも開拓部落があるので、この2つを赤井川開拓部落と呼ぶのは適當ではない。しかし常盤、落合の両部落は赤井川の開拓地でも最も代表的な開拓部落であり、行政上も重要な意義をもつ地区であるので、便宜上、これを赤井川開拓と呼ぶことにした。

地区は、赤井川市街地の東方約 20 km の地点にあり、その大部分は標高 1,014 m の阿女鱒岳の山麓地帯の波状性丘陵地帯にひろがつてゐる。地区の西部に位置するのが落合部落（25戸）であり、北東部に位置するのが常盤部落（25戸）である。落合部落は殆んど畑作開拓農家によつて占められてゐる。ただ立地が山麓末端部に当り、低部には川沿の平坦地がみられ、大体において標高も 200 m 前後であるので、中には低部で水稻を主作する農家もみられ、古く入植した少数の稲作既存農家もある。これに対して、常盤部落は生粋の開拓部落で、中には水田を試作する開拓農家もあるが、これは問題にならず、全部が畑作又

は酪農に依存している。ここは落合部落よりも標高も高く約400mの緩傾斜地をなしている。両部落とも積雪の極めて多い所であつて(約2.5m)、従つて融雪期もおそい。しかし地味は概して良好で、気温は大陸的であるので夏は暑く植生は良好である。

地区の入植は、昭和22年7月の緊急入植に始まるが、大正時代は一時拓けたことがあり、その頃の残留者が1～2名あると云われている。しかし戦後の地区開拓計画の進捗によつて、昭和33年迄に一応両部落合せて102戸の農家が入植する所となつたが、その後47戸が脱落、現在は小学校の教員の如き非農家を合せて55戸の世帯が定住している。入植者は主として樺太よりの引揚者及び現地既存農家の二、三男の分家、或いは拓殖実習場の卒業生等々によつて占められているが、農業経験のある者は、全体の40%にみえない有様である。

また、これ等の入植した当時はまだ土地配分計画もたてられておらず、支庁の技師がさかんに測量していたというから、入植しても土地の割当がなく計画的な開墾に従事出来ない者が多く、為に生活に窮迫して、処置に困り、衣類や夜具等を売り払つて喰いつなぎを行い、全く裸一貫になつたものが少なくなつた。正式に入植の許可のおりたのは5年後のことで、この間、土地の定まらない開拓者たちは、地区内を点々と移動し、開墾しやすい土地をみつけて、僅かに自給用の食糧の生産にたずさわり、他方、山林労働やその他地方の仕事に出稼するなぞして細々と暮しを立てていた。

しかし乍ら、このような困難があつたにも拘らず、その後の朝野一体の協力によつて現在では往時にくらべてまさに隔世のかんがある程地区は発展した。現在では、耕地296町歩(1戸当り平均5町3反)附帯地337町(1戸当り平均6町1反)を擁すにいたり開拓道路、農道等が完成をみたほか、ブロック中学校校舎の落成、橋渠、神社、電話設備の整備、更には雑貨店まであらわれるにいたつている。就中、中学校は、自慢のもので、北海道の開拓地中3校しかないといわれているブロックの校舎をもつている。

しかし、地区の中央を走る幹線道路は余市―赤井川本村―この開拓地―小樽市を結ぶ大事な道路であるにも拘らず、その構造が悪く、とくに開拓地と小樽市との馬車・トラックによる連絡を不可能ならしめていることは、非常におしまれる。この道路の問題をはじめ、小樽市に供給する水の水源の問題、酪農化にともなう諸問題、電気導入、住宅改善の問題、無水地帯解消の問題、配偶者問題等々が、今だに山積されており、将来の解決を待っている。

以上がこの開拓地の概況であるが、この地区は「不振開拓地」としての指定を受けている。しかし今迄はそうであつたとしても、現在では、この地区は、北海道の各地に散見さ

れる不振地区にくらべるならば、あらゆる点において優れており、既に「不振地区」を脱却しているものとみて差しつかえないと思う。この点につき1つの実証方法として、我々は Socio-economic Status Scale による開拓農家の測定を行い、これを他の開拓地における農家や既存農家のそれと比較してみたが、その成績は良好であり、他のどの不振地区における status level よりも赤井川の方が高いことが判明した。これ等の点については、拙稿「開拓農家の不安性と不安定要因の整序」(「北海道農業の転換に関する研究」矢島武編)において考察したので、ここでは触れない。

しからは、赤井川のこの2つの開拓部落における連帯性については如何なる特色がみられるであろうか。その特色については「常盤」と「落合」とを別々にして考察することも出来るが、ここであらかじめ両部落を合体し、1つの地域社会とみることによってその特色を把へることとする。

先ず最初に指摘しなければならないことは、全体として、この赤井川の2つの開拓地における連帯性は可成り低いことである。前述の如くこの開拓地は、経済性からみてもその他の諸条件からみても、他の開拓地にくらべて決して悪いところではなく、それを上廻っているが、それにも拘らず、連帯性はさほど高くない。即ち、これを「連帯度」についてみると、平均連帯度は、僅か0.224であつて、本調査の対象となつた8つの開拓部落中、第7位である。

しかし、これは、規範に対する肯定性が低いからではなく、比較的の高い肯定性を保ちながらも、なお、意見に大きな「ばらつき」がみられる為であつて、この点は、今迄ここで分析してきた6つの開拓部落における傾向とは異つている。即ち、今迄分析した6つの開拓部落では、連帯性をあらわすスコアが、赤井川よりも一般に低いが、しかし低いながらも「ばらつき」が少なかつた為に、連帯度も高くなつて出たが、赤井川では丁度これと反対の傾向がみられるのである。

しかし乍ら、これをエリア別に比較してみると、Community Spirits, Churches, Tension Area 等の領域における連帯性は、他のエリアにおけるそれよりも可成り高い。就中Community Spirits のエリアにおける連帯度0.350という数値は、開拓部落としては決して悪い方とは云えない。しかし Tension Area の0.285 という連帯度は、他の開拓部落におけるこのエリアの連帯度にくらべると決して高いものとは云えない。

従つて、ここで強調しなければならない点は、エリア別には、連帯性の低いものが目立

つて多いということである。

即ち、Interpersonal Relations, Schools, Economic Behavior, Local Governmentの4つのエリアにおける連帯度は、いずれも0.1程度であつて可成り低い。そして、このような0.2未満の連帯度をもつエリアが4つもあるような開拓部落は、本調査の対象となつた農村（開拓部落）にはみられなかつた。

他の部落に比較して、とりわけ低いのはEconomic Behavior及びLocal Governmentの2つのエリアにおける連帯度であつて、各々0.187、0.168と0.200を割つており、この2つのエリアについて、これほど低い連帯度をとつた開拓部落は、本調査の範囲内においては他にはない。まさに最低である。

これ等のことは、赤井川のこの開拓地における社会的連帯性が、北海道の他の開拓地におけるそれに較べて、様々なる点において異色があることを物語るものであつて、とくに注目を要す。

しからば、これ等の特異性は一体何に起因するものであろうか。

先ず、第1に対人関係のエリアにおける連帯性の低位性につき、これを落合部落と常盤部落の双方に分けて比較分析してみると、「落合」の連帯度は0.206であるに対し「常盤」のそれは0.175であつて、あまり大きな差がないことがわかる。しかし、規範意識の肯定性においては、逆に「落合」はスコア値14.9であるのに対し「常盤」は16.6であつて、「常盤」の方がややまさつている。ただ「常盤」は比較的の高い肯定性を持つにもかかわらず、意見の（反応）「ばらつき」の程度が「落合」よりややはげしいという欠陥をもつている。

このような欠陥は「常盤」の方が「落合」よりも入植年度が新しく、部落内の対人関係が安定していない為とみられる。今1つは、開拓地でありながら、既に「常盤」においては、農家の階層分化が生じており、このことが対人意識を好ましくしないものにしていても思われる。この現象は他の開拓部落にはみられない特色の1つである。またこの部落が建設期にある発展途上の部落であつて、開拓事業をめぐつて激しい競争と若干の対立抗争のあることもその1つの理由である。また入植以来の苦闘が、或る程度、お互の対人関係を悪くしているのではないかと疑われる余地もある。

しかし、これ等の対人関係のエリアにおける1種の対立的、独善的、非融和的性格は、表面的なものであつて、それが内面的に強い「しこり」となつて、常に部落内に葛藤を生ずるほど強いものではないとみられる。いずれにせよ、性格的にこの部落の開拓農家が、比較的に独善的、懐疑的であることが、このエリアの連帯性を低いものにしていてと思わ

さるが、反面、独立自営の精神にとんでいという長所もまた否定出来ない。

次に、Economic Behavior のエリアにおける連帯性の低い理由についてみる。既に論じた如く、この部落の最寄のセンターは約16kmも離れた本村市街地に位置しており、距離が遠いために利用度も低く、また市街地の商店が、遠く離れた所にある開拓農家等をあてにせず、近辺の裕福な既存水田農家を最も大切な顧客としている関係があり、このことがその1つの理由としてあげられる。また、前述した部落内における経済的優劣の分化も、その1つの理由としてあげられる。更に、個人意識と競争心の強いこの開拓地では、常に他人を利用してまでもとくをしよとするムードが形成され勝であり、この様な空気が、このEconomic Behavior における開拓農家の姿勢を非連帯的ならしめる理由となっていると考えられる。

しかし、この Economic Behavior の領域において連帯性が低いということそれ自体は、必ずしも、彼等の経済的合理性の低さを意味するものではない。何故ならば、それには常に機会平等と公正を期待する気持が基調となつているからであつて、これ等のことが、彼等の経済的価値観を近代的なものにしているからである。

次に、Local Government のエリアにおける連帯性について考察する。

このエリアにおける連帯性についてはとくに、これを「常盤」と「落合」との2つに分けて分析する必要がある。双方合せた場合には、その連帯度は0.168であつて、8つの開拓部落中、最低であるが、別々にすると、「常盤」0.197、「落合」0.200となる。従つて連帯度は両部落ともに同じ程度である。しかしそのスコア値は、常盤は16.5落合は15.3であつて、約半段階だけ肯定性にずれがみられる。このエリアの尺度文章は、村政に対する一部の支配者の存否、村会議員の仕事振り等々がその内容に入つているが、これ等の点については、「常盤」の方がやや好ましい肯定性をもつている。また、真の指導者の存在についても「落合」の方がその存在を否定する意識が強い。村政に対する疑惑もまた然りであつて、これに疑惑をもつものは「常盤」より「落合」の方がその数が多い。

このようにして、このエリアの連帯性は「常盤」より「落合」の方がいくらか悪く、また他の開拓地にくらべれば、全体としてこの開拓地の連帯性は極めて低い。

その理由には様々なるものがあると思われるが、決定的な原因は容易につかめない。ことに村当局の開拓に対する熱の入れ方には可成り熱心なものがみられ、比較的短期の間によくこの開拓地の実績向上につとめて来た。また部落出身の村会議員や組合長にしても、この開拓地の発展に献身的な努力を傾注しており、これ等の点において村政を非難する理由は発見されない。ただ従来村政がややもすれば既存農家本位になり、本村において

大きな比重をしめる開拓は不利な施政がながらく続けられて来たことは事実であり、これと開拓農協と既存農家の組織する一般農協との利害関係の対立に由来するトラブルとが、いまだに解消せず、それがこの Local Government のエリアにおける連帯意識を低いものにしていないかと思われる。従つて、開拓をめぐる村政についての彼等の意識は、実際においてその経済的發展に見るべきものがあるにも拘らず、依然として、明るいものに変遷しないという傾向がみられ、常に一種の不安と焦燥とがつきまといつていと云われねばならない。

しかし、このような開拓者の意識は、一面懐疑的たるをまぬがれないけれ共、この開拓地が現在建設途上にあり、将来の發展が期待され得る所であるだけに、これに関連する村政一般についても、可成り強い関心をもち、批判的となるのはむしろ当然のことと云われねばならない。ここに、このような開拓地を抱え込んだ赤井川村政のむずかしさと、開拓者自身の村政に対する姿勢の微妙さを認めざるを得ない。

次に、「学校関係のエリア」における連帯値であるが、これも他の開拓部落の例にたがわず、可成り低いのが目立つ。ブロックの立派な中学校をもち、別に小学校をもつこの開拓地は学校施設の点では、他の開拓地におけるよりも遙かに恵まれている。しかるにこの Schools のエリアにおける連帯度が僅か0.118にとどまるのは何故であらうか。村当局も、この開拓地の児童の教育については可成り大きな配慮をめぐらしており、従つてこのエリアにおける連帯性は例外としてでももつと高くなつて然るべきであると思われる。しかるに、依然としてこの Schools エリアにおける連帯性は、他の開拓部落におけると同様に、甚だ低位であるのは理解に苦しむ。恐らくその原因は学校そのものの施設に対する不満にあるのではなく、学校自身の教育活動、或いは教育を受けた子弟の部落に対する関心の薄さから来るものと思われる。

以上は、とくに連帯性の低いエリアについての考察であつた。しかし、この様に連帯性の低いエリアを多く持ちながらもなお Community Spirits のエリアにおける連帯性だけが低くないのは注目に値する現象である。

この部落の開拓者が、戦後の苦境の克服して、兎に角これ迄の状態に地区をもちあげてきたという過去の経験は、当然ここの Community Spirits のエリアにおける連帯性を高いものにしていない。ことに「常盤部落」におけるこの C.S. の連帯性は高く、その連帯度は実に0.579をしめしており、「落合」では0.340となつている。

従つて、Community Spirits のエリアにおいて高い連帯意識がしめされていることは、この開拓地に対する開拓者の愛着と将来の發展に対する彼等の実質な期待が大きけれ

ば大きいほど、他のエリアにおける評価もきびしいものとなつてあらわれるのであつて、この点において、この赤井川開拓部落の連帯性には可成り特色があると認められる。

(8) 共和開拓部落

共和開拓部落は、十勝国大樹町字尾田に所在する開拓部落で、前述した拓北部落の隣りに相接している。しかし部落の構成や歴史は、拓北部落とは全然異つており、可成り特殊な性格をもっている。或る見方をすれば、この部落は2つに分裂していると云える。1つは、戦前入植農家の群で、開拓に成功し所謂安定農家群であつてやや既存農村化している。他の1つは戦後入植した不安定農家の1群である。この戦後の入植農家群は更に、最近2～3年間に入植したものと、入植以来既に7～8年経過したものとに分かれる。安定化した戦前入植組の農家は土地条件にめぐまれた土地の肥沃な所に位置しており、戦後入植の農家は、高台よりの立地条件のよくない所に位置している。その中には、戦前入植農家からの分家もみられる。従つて、この部落内には本家分家の関係が存在するわけであるが、しかし両者の社会経済的地位には余りにも大きなひらきがある。為に相互の融和は少なく、しかも部落内には、外来の単独入植農家が介在しているから、総じて部落内の統一は隣りの拓北部落の如く強くないようにみえる。

部落にはまた、これと云つた共同施設もなくセンターは尾田市街地が事実上、その役割を果している。経営は畑作本位で拓北部落におけるが如く、酪農化は進んでいない。耕地面積も5町未満(平均)で、中には2町程度のものもあり、独身世帯もまた少なくない。従つて、経営もいまだ安定していないものが多い。

この共和部落の連帯性は、本調査の対象となつた8つの開拓部落中では、最低である。その連帯度の総平均は、僅かに0.132という低いものであつて、開拓部落の平均値0.298を可成り下廻る。

とくに、Interpersonal Relations 及び Family Responsibility の2つのエリアにおける連帯性は低く、それぞれ-0.259、-0.343 というマイナスの連帯度をしめしている。この外 Community Spirits のエリアにおける連帯度も低く、僅かに0.163にすぎない。

前述の如く、マイナスの連帯度とは、連帯性に対して反逆的な性質をもつことを意味し、場合によつては敵対的意識が存在するのではないかと疑われる可能性をもつ。このようなマイナスの連帯度を保つエリアを2つも持つているような開拓部落は、他にはみられないのであつて、これがこの部落の連帯性の第1の特色をなす。

しかし乍ら、このマイナスの連帯度を示めた2つのエリアを、それぞれ仔細に検討すれば、同じくマイナスをしめしながらも、両者は相互に若干性格を異にした内容をもっていることが明らかである。即ち Interpersonal Relations (I.R.) のエリアにおける連帯性は、スコア値が17.7と可成り高いが、Family Responsibility (F.R.)におけるそれは13.8で可成り低い。従つて、「対人関係」の領域における規範意識についての連帯性は、可成り肯定的方向をとつているということが出来るが、これに対して、「家族の責任感」の領域における連帯性は、規範に対するやや否定的な傾向が強い。しかるに、意見の「ばらつき」反応の分散の程度ということになると I. R. が5.30 (S. D.値)に対して、F. R.は4.99というS. D. 値をしめし、両者間に10%程度の差しかみられない。このS. D. の絶対値はいずれにしても非常に大きなものであつて、これが為に連帯度は双方ともにマイナスとなつてあらわれているわけであるが、結局I.R.の方がF.R.の方より肯定性向の高いところに両エリアの相違がある。

対人関係のエリアにおける連帯性の低位性は、既述の如く、この部落が、立地条件のよいところに先行入植した安定組と、新規入植を行つた不安定組とが、同一部落においてはげしく対立している為であり、また本家分家の仲が基だよくない為でもある。一方家族の責任感の領域における連帯性の低位性にも、この種の理由が附帯する。他方立地条件の劣悪性と、部落内部における非統一傾向は、community に対する子弟の行動そのものに対する責任を低位なものにする素因となつている。部落内にはこのような一般的な空気はやくから感知し、これを憂慮する者も若干みられるが、この事實は、我々外来者のくわだてた測定結果にも如実にあらわれている。

このような事情にある為に1部の人をのぞき、この部落に対して強い執着と愛着とをもつ人の少ないことは当然であり、このことが、連帯性の最も重要なエリアの1つである Community Spirits の領域における連帯性をかなり悪いものにしてゐる。その連帯度0.163は平均値の0.353をかなり下廻るものであり、その劣性振りを左証している。少くとも、近所仲の悪いこの部落には「我等意識」という様なものは感ぜられないのであつて、この点は、前述した赤井川の場合などは可成り異つたものがある。

この3つのエリアにおける低い連帯性を除くと、残りの5つのエリアにおける連帯性は、極端に低くはない。ことに Tension Area における連帯性は可成り高く、連帯度0.451のが記録されている。他は概ね0.2台の数値をしめしており、マイナスのものはない。

これを要するに、一般に共和開拓部落における連帯性は、円満さに乏しく、また安定性にも欠けていると云へる。このことは、部落内の統合力の点に疑をはさむに足る事柄であつ

て、部落そのものが直ちに disorganize しない迄も、これについての可成り危険性を胎んでいるとも云える。少くとも部落内には常に何か知らぬ面白からぬ雰囲気はただよっているようにみられる。

ところで、この部落は調査当時より、今日に至る迄既に8年の才月を経ている。この間に共和部落には様々な問題が生じたが、幸いにして部落は崩壊しなかつた。この間、部落内部における連帯性がどのように変化したかは、もとより不明であるが、今後重ねてこの種の測定調査を繰り返すならば、この部落の社会的特色がどのように変化したかを視知することが出来ると思う。

以上、本節においては、連帯性をめぐるエリア別の分析と、部落別分析とを展開した。これ等の分析を通じて判明した点は、もとより多様多様である。中には分析不十分なものもあるが、しかし8つの開拓部落の社会的特色はそれぞれの形において、この連帯性に反映しており、従つて連帯性を分析することによつて、開拓社会のもつ社会的特質を可成りのところまで把握することが出来る。これを一層正確なものにするためには以上の1つ1つの発見的事実 (findings) に対して、より綿密な深層に及ぶ分析をつけ加えて行く必要があると思う。しかし、ここでは、既存農村との比較において、或いは、各部落相互間の比較において、開拓社会における農家の社会的連帯性の特色を、一応の範囲において解明することが出来たので、次に、この発見的事実との関連において、はじめに企図した「外延的課題」について若干の考察を試みることにする。

第2節 連帯性をめぐる「外延的課題」の分析

連帯性をめぐる外延的課題の意義については、既に本章序説において触れた所である。ここでいう外延的課題の分析とは、本測定調査の結果を、他の調査による findings とクロスさせて、内延的分析によつては解明し得なかつたことがらを分析する仕事に外ならない。

もとより、このような外的資料との接合的な分析の仕方は、無条件に可能なものではなく、当然取扱可能な接点と、しからざるものとに区別されなければならない。取扱可能なして有意義な問題の主なるものについては、既に本章の序説において例示したのであるが、ここでは、そのうちでも特に重要と思われ、かつ興味に値する少数の問題のみに限つ

て分析することにする。

即ち、ここで取扱う問題とは、「開拓社会内部における階層的連帯性」換言すれば、開拓農家の形成する各階層内部においては如何なる連帯性があるかという問題と、「新しい開拓部落と古い開拓部落における連帯性の相違」の問題の2つである。

前者の階層内の連帯性の分析に当つては、既存農村におけるそれとの比較において考察することとし、後者の新旧開拓部落における連帯性の比較については、入植以来の部落の経過年月を基準にして分析する。尚また、前者の階層内の連帯性の測定に当つては、後述する如く、この測定調査と平行して実施した、Socio-economic Status Scale による測定結果を素材とし、必要な分析を行う。

1 開拓社会における階層内の連帯性

連帯性が、階級の内部や階層の内部においても生ずることについては、既に諸学者によつて指摘されているところである。その一々の学説についてはここでは考察しないが、一般に農村における階級的連帯意識は低いものとされ、このことが一応定説の如くなつてゐる。そこで、ここでは果して農村における階層的意識、就中、階層的連帯性が、定説の如く低劣なものであるかどうかを、この測定結果を素材として検討してみる。

その為の分析の手續としてはじめに明らかにしなければならぬことは、素材の選択をどうするかという問題と、階層化の方法をどうするかという問題の2つである。

先ず、この階層内における社会的連帯性の優劣を把えるに当つて、その素材として何を求めるかという問題であるが、これについては、8つの開拓部落における開拓農家を全部合せて、1つの母集団とし、それぞれの農家が取得した連帯値を素材とし、他方、前述した Socio-economic Status Score による階層区分を行い、各階層内における連帯性を考察する方法が考へられる。しかしこの様な方法では、母集団自身が、統計的な総和となりその総和によつて作られた母集団そのものが、すなわち community でないものになってしまうので、Community Solidarity の概念から可成り逸脱したものを把えるおそれがある。そこで、いま1つの方法として、8つの開拓部落と4つの既存農村の中から最も代表的な地点を有意的に選定し、それぞれの集団社会内部における階層内の連帯性を分析する方法を考へねばならない。この方法であれば、Community Solidarity の概念が崩れるおそれがないと思われる。しからば、より具体的に、如何なる部落をその典型的な例として求めるべきであろうか。幸にして我々は北海道の開拓地については長期間に亘る調査と比較的豊富なる知識をもつことが出来たので、これ等の経験に基いて、この8つの開拓部

落の中から、代表的な素材を選択することは不可能ではない。既存農村についてもまた然りである。

ここで、慎重考慮の結果、諸般の事情を充分参酌して判定したところ、開拓部落については、後志の「赤井川部落」が、既存農村については、函館の「大野」が最も適切であるという結論に到達したので、この2つを取り上げることにした。もつとも調査時点からすると、赤井川は昭和34年の調査であり、大野は昭和30年度における調査であつて、そこに4年の調査時点のずれがある。しかし乍ら、この時点のずれを一応疎外して、農家の Socio-economic Status の一般的水準をみると、開拓部落赤井川は、大野のそれに最も近接した傾向をしめしており、昭和34年当時における赤井川開拓部落の、Socio-economic Status (S.E.S.) の一般的水準は、4年前の既存農村「大野」におけるそれに比適する所まで上昇している。かかる意味において、この2つの集団社会を標本として選択することはあながち不当とは思われない。また赤井川以外の開拓部落においては、社会経済的地位が一般に低くすぎて殆んど全部が下層に集中するという所が少くないので、階層的連帯性をとらえるに適しない。

次の問題は、如何なる方法によつて階層化を行うかということである。この問題は、前述した素材選択の問題と共に極めて重要である。それは、この階層化と階層化の基調となる階層的地位のとり方如何によつて、異つた結果があらわれる可能性があるからである。ここでは尺度化の方法によつて連帯性を把えたのであるから、農家の階層的地位の規定に当つても、尺度化の方法をとり入れ、その結果をクロスさせるべきであると思う。

ところで、社会的地位の尺度化による測定の例としては、W.L. Warner, Zeleney, F. S. Chapin, T. Geiger, W. H. Sewell 等が展開した手法をあげることが出来る。これ等の方法は、被験者をして、その者が所属すると思う階層、又は階級的地位に対する帰属意識による方法と、或る客観的な標識を求めこれによつて地位の序列を定める方法及び参与者による評定等をあげることが出来る。しかし、これ等の方法のうちで、最もひろく用いられているのが、Chapin, Sewell 方式の Socio-economic Status Scale であり、或る客観的な一連の標識を用いて判別する方法である。

本研究においても、早くからこの尺度による農家の社会経済的地位の測定の必要性を認め、これによる調査を平行して実施してきたので、これを活用する。即ち、Sewell の方式による農家の社会経済的地位の測定がそれであつて、これによつて対象農家の Status の決定を行い、これに独自の階層化の方式を適用することによつて、開拓部落及び既存農村における階層化を行うのである。

Sewell の Socio-economic Status Scale は、農家の居間の調度、主なる耐久文化財、社会的参与、教育程度等々をその標識中にとり入れて構成されたものである。本調査においては、この Sewell の方式に若干の修正を加え、更に Chapin の方式の長所もとり入れた改訂尺度を編成し、これを統計的に管理したものを使用した。この修正尺度を、開拓、既存を合せて 400 戸に及ぶ農家に適用し、各農家の status score を求めた。はじめは、56 の尺度項目を用意したのであるが、臨界比による検定の結果、15 項目が不合格となつたので、結局、41 項目からなる尺度を最終的に使用した。各項目については、一応原則として、“possession” と “non-possession” とにわけられ、各項目に対してシグマ法による荷重を施し、農家の status score を採点した。その詳細にわたる方法についてはここでは説明を省略する(詳しくは、拙稿「Socio-economic Status Scale とその応用価値」「調査と技術」1961年6月号参照)。この方法によつて、調査対象となつた農家は、理論上最高値は 411.5 点、最低が 114.0 点、間隔 297.5 点の間にそれぞれのスコアをとつて位置することになる。

次に、各農家の階層的地位を定めるには、次の如き方法をとる。即ち、階層的地位は、この場合、status score の「量」と、各農家の母集団(部落或るいは農村)における status score の「順位」(ranking)の両者を相関させることによつてきまると仮定する。この仮定は単なる仮定ではなく、階層的地位に関する諸学説を減る程度満足させる可能性をもっている。階層的地位を、スコアの「量」と「順位」との相関性によつてきめるには具体的には、次の如き手続を踏めばよい。

先ず、階層の数を、「上層」「中層の上」「中層の下」及び「下層」の 4 つに区分することにする。この階層化の規定は、操作の前提となるものであり、この区分概念は、私共の生活感情の上で先天的に与えられたものとし、何故に、階層が上、中、下に 3 大別されるかについてはここでは論議しないことにする。次に、各母集団における当該全農家の Status Score (S.E.S.) を点数の高いものから順にならべ、同一点数のものは同一順位になるようにして、順位の中位に位置する農家のスコアをみる。そのスコアと最高スコアとの間隔を算出し、これを 2 で除した数値をもつて、最高スコアより間隔をとり、それを上層区間とする。次に下に同様の間隔を繰返しとつて、夫々中層の上の区間を定める。更に先の中間値のスコアと最低スコアとの差を同様に 2 で除し、その値を中間スコアより差引いた区間をもつて、中層の下とし、残りを下層の区間とする。このようにすれば、スコアの「量」と「順位」とをうまく相関させて、階層区間を仕切つたことになり、農家は各区間のいずれかに位置してそれぞれその階層的地位を占めることになる。

第11表

既存開拓農村別 S.E.S. 取得スコア

地 点	戸 数	最低 Score	最高 Score	平均 Score
栗 山	120戸	129.0点	258.5点	215.5点
大 野	79	126.5	245.0	177.0
小 計 [平均]	199	[127.8]	[245.0]	[200.3]
赤 井 川	50戸	151.5点	240.0点	182.8点
ニセパロマナイ	20	140.0	206.0	168.6
鬼 志 別	34	127.5	186.5	153.4
※新 内	12	138.0	231.5	180.0
知 床(岩尾別)	16	125.0	164.5	150.1
大 与 地	33	121.5	218.0	164.8
※発 足	36	139.0	235.0	181.6
小 計 [平均]	201	[134.6]	[211.6]	[168.7]
総 平 均 [計]	[400]	133.1	220.6	184.5

※「新内」には既存農家が若干入っている。これを除くと最高 Score は 191.0 にしかならない。「発足」も然り。

○「栗山」「大野」は既存農村、それ以外は全部開拓、但し「発足」は若干既存農家が混入している。

○平均値は総戸数平均。

第11表は、この Socio-economic Status Scale によつて、既存・開拓合せて400戸の農家を測定して得られた S.E.S. スコアの地点別最高・最低並びに平均値をあらわしたものである。これによると、既存の総平均スコアは200.3点であるが、開拓のそれは168.7点である。ここでは開拓・既存の中間的な性格をもつた「発足」を一応開拓の部に入れたので、もしこれを既存に廻わすと、開拓の平均スコアは168.7より更に低くなる。ところで、第11表によると、「赤井川」は、既存の「大野」に極めて類似した構造をもつていことがわかる。次に、上述した階層区分の方式に従つて、400の農家を上層、中層の上下、及び下層の4つの階層に分けた場合における、各地点農家の各階層所属戸数を明らかにすると第12表(次頁)の如くなる。

これによれば、既存農村では上層及び中層を占める農家が圧倒的に多いことが判るが、開拓では、下層農家が約半分を占め、上層に該当するものは5%にも達しない。ただ「赤井川」では、中層を占める農家が全体の80%をしめており、他の開拓地とは可成り異つ

た性格をしめし、どちらかと云えば既存の「大野」に極めて類似していることがわかる。このような類似性から「赤井川」と「大野」をとりあげ、これについて比較することが最も適当であると認められるのである。

第12表 地点別階層所属農家戸数

地 点 名	戸 数	上 層	中 層		下 層
			上	下	
栗 山	120戸	58戸 48.3%	48戸 40.0	11戸 9.2	3戸 2.5
大 野	79	5 6.3%	21 26.6	28 35.4	25 31.6
小 計	199	63 31.7%	69 34.7	39 19.6	28 14.1
赤 井 川	50戸	3戸 6.0%	15戸 30.0	25戸 50.0	7戸 14.0
ニセパロマナイ	20	0 0%	3 15.0	7 35.0	10 50.0
鬼 志 別	34	0 0%	0 0	9 26.5	25 73.5
新 内	12	2 16.7%	2 16.7	3 25.0	5 41.7
知 床 (岩尾別)	16	0 0%	0 0	2 12.5	14 87.5
大 与 地	33	1 3.0%	2 6.1	15 45.5	15 45.5
※発 足	36	3 8.3%	11 30.6	11 30.6	11 30.6
小 計	201	9 % 4.5	33 16.4	72 35.8	87 43.3

※ 既存農家混入

しかし前述の如く、ここでは、階層内の連帯性を400戸の農家母集団とした mass-society を基本として把えようとするものではなく、各地域社会内部における階層分化に基づく層内連帯をみようとするものであるから、以上の操作とは別に、「大野」及び「赤井川」各々について、その部落内における階層構造を解明しなければならない。

今「大野」77戸(79戸中開拓2戸をのぞく)、「赤井川」50戸について S.E.S. スコアをもとにして(上述した階層区分法を適用して)求めた結果を明らかにすると、第13表の如くである。

第 13 表

「赤井川」「大野」における
農家の階層別所属戸数

地 点	上層	中 層		下層	計
		上	下		
赤井川 (開拓)	12戸 24.0%	11 22.0	13 26.0	14 28.0	50 100.0
大 野 (既存)	16 20.8%	23 29.8	16 20.8	22 28.6	77 100.0

第 13 表においても明らかなる如く、開拓部落「赤井川」では総農家戸数 50 戸中、12 戸は上層に該当し、中層は上下合せて 24 戸、下層該当農家は 14 戸となる。これに対して、既存農村「大野」では、上層 16 戸、中層 39 戸、下層 22 戸となり、各層の配置分布は「赤井川」のそれに極めて似ていることがわかる。

そこで次には、開拓と既存をそれぞれ別々にして、上層、中層、下層の各層に該当する農家の間には、如何なる連帯性が存在するかを各層別に把えてみることにする。

各層内における、所謂階層内の連帯性の算出方法は、既述の部落別、エリア別連帯性の測定方法を援用すればよく、別に特殊な方法を用いる必要はない、ただ各層が母集団になるから、計算は全部やり直さねばならず、それぞれ層別、エリア別に、連帯値、即ち、スコア値（平均）、S.D. 値、並びに連帯度を算出しなければならない。

今、その算出結果を明らかにすると、第 14 表の如くなる（次頁参照）。

（尚、前述した S.E.S. による、開拓、既存農家の社会経済的地位をめぐる分析的考察については、拙稿「開拓農家の不安定性と不安定要因の整序」において詳しく展開した）。

第 14 表は、階層内の連帯性の測定値をエリア別に明らかにしたものであるが、その結果を、開拓（赤井川）既存（大野）別に分析し、これをとりまとめてみると、階層内の連帯性には次の如き特色がみられる。

(1) 先ず、これを「連帯度」によつてみると、開拓、既存ともに、各エリアにおける値は、激しい「ばらつき」をしめしている。これは標本数が少い為でもあるが、低いものはマイナスの値をしめし、高いものは 0.500 以上をしめすものが多数ある。

(2) 従つて、エリア別の連帯度は絶対視出来ないので、次に 8 つのエリアの連帯度の平均値を各層別に検討してみる。その結果明らかかなことは、開拓、既存に共通の特色として、一般に上層と下層における連帯度は低く、中層はやや高い。

即ち、開拓部落「赤井川」では「中層の上」が最も高く 0.369 という連帯度をしめしているが、これに対し既存農村「大野」において最も高い連帯度をしめしている階層は「中層の下」であり、その値は 0.395 である。上層、中層の上、中層の下、下層はそれぞれ等間隔のスケールによつて区分されているから、結局、開拓と既存とでは、最も連帯度の高

第14表

階層内の連帯性の測定値

大 野 (77戸)

階層	エ リ ア 連 帯 値	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	Ave.
		C. S.	I. R.	F. R.	S.	C.	E. B.	L. G.	T. A.	
上 層	スコア(平均)	17.7	16.9	17.2	15.9	14.9	17.0	17.2	18.6	16.9
	S. D.	3.73	3.27	1.94	1.93	1.96	1.70	3.74	2.80	2.63
	連 帯 度	.105	.203	.531	.514	.491	.588	.097	.349	.360
中 層 の 上	スコア(平均)	17.5	17.2	16.7	16.5	15.4	15.7	14.6	19.1	16.6
	S. D.	3.53	2.89	3.49	2.09	2.95	2.65	3.88	2.63	3.01
	連 帯 度	.155	.305	.145	.485	.520	.330	.010	.397	.285
中 層 の 下	スコア(平均)	16.4	17.6	16.5	15.1	15.1	16.3	15.8	18.1	16.4
	S. D.	2.57	2.39	1.99	1.62	2.67	2.91	2.71	2.85	2.46
	連 帯 度	.365	.429	.509	.586	.341	.279	.320	.332	.395
下 層	スコア(平均)	15.9	17.6	16.0	15.7	14.8	16.8	17.1	18.0	16.5
	S. D.	3.12	2.89	2.90	2.70	2.33	2.03	2.89	2.91	2.72
	連 帯 度	.219	.311	.279	.320	.396	.506	.300	.314	.330

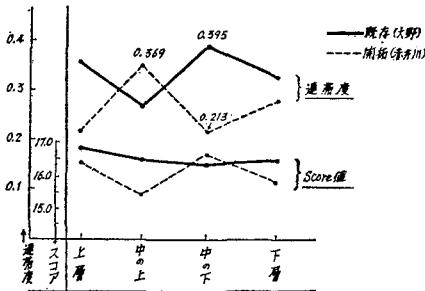
赤 井 川 (50戸)

上 層	スコア(平均)	18.2	16.2	16.3	15.1	15.9	15.0	16.9	17.8	16.4
	S. D.	2.68	4.17	3.56	3.16	2.32	3.60	3.20	2.55	3.15
	連 帯 度	.372	.038	.118	.184	.418	.075	.223	.395	.218
中 層 の 上	スコア(平均)	18.3	14.5	16.9	12.8	13.9	15.8	14.6	17.0	15.5
	S. D.	2.05	2.29	3.02	3.19	2.02	2.36	2.22	2.56	2.46
	連 帯 度	.520	.395	.264	.109	.459	.408	.419	.380	.369
中 層 の 下	スコア(平均)	19.0	16.2	18.1	14.5	15.0	14.6	17.6	17.7	16.6
	S. D.	2.35	2.85	3.00	3.65	3.18	3.56	3.43	3.11	3.14
	連 帯 度	.461	.294	.295	.042	.100	.068	.183	.261	.213
下 層	スコア(平均)	18.0	16.4	17.4	13.4	14.8	14.6	15.0	16.0	15.7
	S. D.	2.53	3.33	2.84	2.94	1.60	2.99	3.20	3.26	2.84
	連 帯 度	.402	.175	.319	.195	.586	.217	.180	.184	.282

い階層の位置が1段ずれることになる。しかし、いずれにせよ、開拓、既存ともに、中間階層である中層における連帯性が最も高くなるという共通の特色がみられる。ところが、上層になると「赤井川」（開拓）の方は0.218という可成り低い連帯度をしめすが、「大野」（既存）の方は、0.360という連帯度をしめし、さほど低くはならない。又、下層についてみると「赤井川」では、0.282であるのに対し「大野」では0.330という連帯度をしめし、これまた既存の方は開拓ほど極端に低くはならない。

第8図

開拓既存別の階層内連帯性の比較



めし、これまた既存の方は開拓ほど極端に低くはならない。

今、これ等の事情（傾向）を図示してみると、第8図の如くである。

第8図によれば、既存農村「大野」における階層内連帯性は「中層の上」をのぞけば、他の階層は全部、開拓（赤井川）におけるそれよりも高い。従つて、既存開拓ともに、一般に「中層」における連帯性が相対的に高いと云えるが、全体として

は既存農村の方が、開拓部落におけるよりも比較的円満な連帯性を保持しているということが出来る。

(3) 次にエリア別に、各階層の連帯性を比較してみると、Community Spiritsの領域に於ては、開拓「赤井川」の方が各階層ともに、既存「大野」よりも可成り高い連帯性をしめしている。即ち、上、中、下を総和した平均値についてみると、開拓では0.439と可成り高いのに対し、既存では僅かに0.211にすぎない。わけても、開拓「赤井川」のこのエリアにおける中層の平均値（連帯度）は0.445をしめして高いが、これに対し既存「大野」の中層のそれは0.240に過ぎない。何故にこのCommunity Spiritsのエリアにおいて、既存の中層の連帯度が、開拓のそれよりも高いかということについては、種々なる理由があると思われる。その1つに、赤井川の開拓地は目下建設途上にある所であつて、その将来の発展と成功とが中層農家によつて最も大きく期待され、かかる観点から、この開拓地に対する中層農家の関心も極めて強くなるということが出来る。

この傾向は、Interpersonal Relationsのエリアにおいてもみられる。即ち、このエリアに於ても、開拓既存共に「中層」の連帯性が、残りの他の層におけるそれより遙かに高く、また強い。このエリアについても「中層」は円満な連帯性を保っている。しかし、「上層」になると極めて特異な傾向があらわれる。即ち、開拓「赤井川」の上層農家のこのエ

リアにおける連帯性は、 -0.038 の連帯度をしめし、意見の「ばらつき」が非常にばげしい。また下層の連帯度も可成り低く、僅かに 0.175 すぎない。既存の「大野」ではこれほど極端な低位性はあらわれていないのであつて、兎に角、開拓における上層と下層の各階層内における連帯意識、ことに対人関係をめぐる連帯意識は、目立つて貧困であるのが目立つ。

次に Area Ⅲの Family Responsibility の領域における連帯性についてみると、ここでは既存「大野」の上層と中層の下における連帯度の高いのがとくに目立ち、それぞれ、 0.531 、 0.509 をしめしている。これに対して、開拓「赤井川」では、 0.500 以上の連帯度を保つような階層は皆無であつて、各階層ともに連帯度は低く、その平均は 0.298 である。ただ開拓の場合、このエリアでは、下層に向うに従つて連帯性も次第に高くなるという傾向がみられるのに対し、既存ではその様な傾向はなく逆に、上層に向うに従つてやや高くなるという傾向がみられる。

このことは、安定した既存の上層農家では、家族に対する配慮も行き届くが、不安定でその日に追われる中層以下の農家では繁忙のため家族のことなぞかまつておられず、下層の開拓農家になるに従つて、無関心が普通になり無関心が一般化するために意見のばらつきも少くなり、無関心だという点において連帯性もやや高くなるものとみられる。

Schools のエリアについては、既存「大野」では、各階層共にその連帯性は非常に高い。その階層平均連帯度は、実に 0.476 であるが、これに対して開拓「赤井川」では各階層ともに非常に低く、その平均連帯度は僅かに 0.143 であつて、既存とはまさに対蹠的である。これは連帯度ばかりでなく、スコア値についても云えることであるから、開拓地では各層ともに、この学校関係についての意見には不満が潜在しているとみられる。

次に Churches (宗教関係) の領域についてみると、ここでは、既存、開拓ともにどの階層も比較的連帯性が高いということを除けば別に特色はない。ただ開拓地「赤井川」の「中層の下」だけは非常に低く、その連帯度は、 0.100 にとどまつている。この層だけ連帯性が極端に低いのは、たまたまこの層に宗教について様々の意見をもつものがあらわれたためであり、とくに、S.D. 値の大きいのが注目される。

更に、Economic Behavior のエリアにおける階層内の連帯性の特色についてみると、既存と開拓とでは可成り異なつた傾向がうかがえる。即ち、既存「大野」では、上層と下層という両極の連帯度が非常に高く、それぞれ、 0.588 、 0.506 をしめしているが、中層は上下ともに低く、 0.330 、 0.279 をしめすにすぎない。これに対して、開拓「赤井川」では、比較的の高いのは、中層の上だけで、他は全部低い。従つて、既存と開拓との間には

やや反対の傾向が存すると云うことが出来る。

就中、大野の上層の0.588という連帯度はこの階層内連帯の測定値としては最高のものであつて、これ程高い連帯度をしめしたエリアは、他にはどこにもみられない。

これは裕福な上層農家の間においてはその Economic Behavior にゆとりがあり、統一が存在するためであつて、同じ上層農家でも開拓部落においては、既存農村とは全く異つたビヘイビアをもっているためである。しかし、既存でも大野の中層はさほど経済的には裕福ではないので、その連帯性は低下するが、下層では、下層農家同志の間で共通の規範意識をもつため、その連帯性は反対に高くなつてくるのである。

この点、開拓では、階層相互間において極めて複雑微妙なビヘイビアをとることが明らかで、中層の上をのぞけば、他は低い連帯度しか保ち得ない。そこに、既存とは全く異つた Economic Behavior をめぐる連帯性の特色がみられる。

次に、Local Government のエリアにおける各層の連帯性についてみる。このエリアにおいてとくに注目しなければならない点は、「大野」では「上層」及び「中層の上」の連帯度が著しく低いことである。ことに「上層」は規範意識に対する肯定志向が高いにも拘らず、意見のばらつきが可成り大きく、その為に連帯度は可成り低くなつてくる。これに対して「中層の上」ではこの規範に対する肯定性も低く、しかも意見のばらつき(S.D.)が、非常に大きいので結局、連帯度は負の値(-0.010)となつて出る。他方、開拓部落「赤井川」では、まさに「大野」と反対の傾向があり「中層の上」と「下層」が低く、上位2層は割合高い連帯度を保つている。もつとも「中層の上」が高いといつても、これはS.D.が低いためであつて規範に対する肯定性は可成り低い。この「赤井川」の「中層」のスコア値を平均すると、14.6で、「大野」15.0がであるから、意見のばらつきの相違を別とすれば、その規範意識の傾向は似ている。

之を要するに、Local Government のエリアにおける連帯性には、既存農村「大野」では、その上位層に、開拓部落「赤井川」では、下位2層にその低位性がみられる。しかし残りの各層、即ち、既存では「中層の下」と「下層」、開拓では上位2層(上層と中層の上)は比較的に安定した連帯性がみられる。

最後に、Tension Area の領域における連帯性について検討してみる。このエリアにおける連帯性については、既存、開拓ともに非常に高い連帯度を保つているところに共通の特色がみられる。開拓「赤井川」の下層の連帯度0.184が最低であつて、これを除くと、各階層ともに比較的の高い連帯性をしめしている。

しかも、規範に対する肯定的意識が強く、上記の赤井川の下層をのぞけば、他は既存、

開拓にかかわらず、可成り高いスコアをしめし、0.170以下のものはない状態である。しかし、意見のばらつきは案外大きく、既存、開拓ともに2.500以下のものは皆無であるために、連帯度も0.400を越える階層は皆無という結果となつてあらわれている。その為、連帯度はスコア値が高い割によくはない。

このエリアにおける問題は、開拓「赤井川」における「中層の下」と「下層」における連帯度の低位性にあるであろう。他の階層におけるこのエリアの連帯性がさほど低いものでないのに、何故にこの「赤井川」の下位2層のそれだけが低いか。ことに、開拓「赤井川」では、上位2層の連帯性が可成り高いのに、下位では何故に低くなるかということは、興味ある問題である。ちなみに「赤井川」における上位2層の連帯度の平均を出してみると0.388となるのに対し、下位2層の平均値は0.223である。

Tension Area は、既に述べた如く、部落内部における対立、抗争、反目的な関係を暗に示唆するような尺度文章から構成されているのであつて、「この部落は平和で秩序正しいか」、「部落の人達はもの判りがよい方か」、「男女関係についての悩みが青年にあるか」、「部落の仲間入り」、「人種的差別」等々についての質問が展開されている。これ等一連の尺度文章に対して、開拓部落「赤井川」の下位2層においては、比較的意見のばらつきがはげしく連帯性も低い、このことは、この下層部分に統一的な意識に欠けるきらいがあるということの意味するものである。この意見の喰いちがいは、開拓地において、普通の開拓農家とは可成り異つた生活様式をとつている下層農家の当然の帰結であつて、生活や営農様式のちがひ、又様式ばかりでなく、そのレベルの低劣性が、当然そこに非統一的な意識と感情の交叉を余儀なくさせ、このことがこの緊張領域における連帯性を低いものにしていてと解される。

このエリアはまた、Area IIの Interpersonal Relations の領域と密接な関聯をもつ領域でもある。そこで、次にこの2つのエリアについての関連をみてみると、次の如くである。

既存の「大野」においては、4層ともに、対人関係のエリアにおける連帯性と、緊張領域におけるそれとは、可成り平行している。しかるに、開拓の「赤井川」においては、事情はことなり、緊張領域のエリアにおいて最も高い連帯性をしめしている「上層」（その連帯度0.395）は、対人関係のエリアにおいては極めて低劣な連帯性をしめしている（その連帯度は-0.038）。しかし、この開拓の上層の非平行現象を例外とすれば、残りの3層における連帯性はよく平行していることが明らかである。従つて、開拓、既存ともに1つの例外を別とすれば、この緊張領域における連帯性と対人関係における連帯性

とは極めて密接な関連を有し、かつ平行的に一致する傾向をもっていることが明らかである。今、参考迄に、両エリアにおける連帯性を階層別に比較してみると、第15表の如くなる。

第15表

「緊張領域」と「対人関係」のAreaに於ける開拓・既存の階層別連帯性の比較
(連帯度による)

階層	開拓 既存別	比較の Area	
		「緊張領域」	「対人関係」
上層	開拓	0.395	差 0.433 -0.038
	既存	0.349	差 0.146 0.203
中層の上	開拓	0.380	差 0.015 0.395
	既存	0.397	差 0.092 0.305
中層の下	開拓	0.261	差 0.033 0.294
	既存	0.332	差 0.097 0.429
下層	開拓	0.184	差 0.009 0.175
	既存	0.314	差 0.003 0.311

第15表によると、開拓の上層を例外とし、これを除いた各層における緊張領域と対人関係のエリアにおける連帯度の差の平均は、0.019であり、既存農村における4階層のそれは、0.085であつて、両社会ともに、この2つのエリアの取得連帯度が極めて近似していることがわかる。

次に、数値そのものの絶対値についてみると、両社会ともに、緊張領域における実数の方が、対人関係におけるそれよりも、やや高くなつてあらわれている。この傾向は各階層ともに顕著にみられる。このことは、対人関係のエリアにおける連帯性の低くさは、緊張領域のそれにまで及ばないことを意味している。即ち、それは緊張関係をもたらすほど悪い対人関係ではないことを物語るものである。

以上が、エリア別にみた各階層についての既存と開拓との連帯性の相違点である。

(4) 次に立場をかえて、開拓、既存の双方につき、各エリアにおける階層別連帯性を連帯度によつて、その最高値と最低値をとらえ、その絶対差を比較検討してみる。

今、これを一表にあらわしてみると、第16表の如くである(次頁)。

第16表によれば、階層的連帯性の連帯値による最高最低の格差の比較的大きなエリアをあげてみると、既存「大野」では、Family Responsibility, Churches, Economic Behavior, Local Government の4つのエリアとをあげることが出来るが、開拓「赤井川」では、Interpersonal Relations, Churches, Economic Behavior の3つのエリアがあげられる。これ等はいずれも連帯度の格差が0.300以上のものである。

次に、平均値(Ave.)についてみると、8つの領域における連帯度の最高値の平均は、既存が0.463、開拓が0.405であつて既存の方が高い。また最低値の平均について比較する

第 16 表

階層的連帯性の最高最低差（連帯度による）

Area 別	既 存 (大 野)			開 拓 (赤井川)		
	最 高	最 低	格 差	最 高	最 低	格 差
I C.S.	0.365 (中の下)	0.105 (上)	0.260	0.520 (中の上)	0.372 (上)	0.148
II I.R.	0.429 (中の下)	0.203 (上)	0.226	0.395 (中の上)	-0.038 (上)	0.433
III F.R.	0.531 (上)	0.145 (中の上)	0.386	0.319 (下)	0.118 (上)	0.201
IV S.	0.586 (中の下)	0.320 (下)	0.266	0.195 (下)	0.042 (中の下)	0.153
V C.	0.491 (上)	0.250 (中の上)	0.241	0.586 (下)	0.100 (中の下)	0.486
VI E.B.	0.588 (上)	0.279 (中の下)	0.309	0.408 (中の上)	0.068 (中の下)	0.340
VII L.G.	0.320 (中の下)	-0.097 (上)	0.417	0.419 (中の上)	0.180 (下)	0.239
VIII T.A.	0.395 (中の下)	0.285 (中の上)	0.112	0.395 (上)	0.184 (下)	0.211
Ave.	0.463	0.186	0.277	0.405	0.128	0.276
最高もしくは最低を取得した階層名とその取得件数	上= 3 中の下= 5 計 8	上= 3 中の上= 3 中の下= 1 下= 1 8		上= 1 中の上= 4 下= 3 8	上= 3 中の下= 3 下= 2 8	

と、既存が0.186であるのに対し、開拓は0.128で、これもまた既存の方がレベルが高い。しかし、この平均値によつて最高と最低の格差をみると、既存0.276開拓0.276で殆んど同じ値をしめしている。このことは、誠に興味に値することであつて、開拓、既存ともに一般に最高と最低との間隔は同じであるか或いは大差はないが、しかし、そのおかれているレベルは、既存の方が開拓より高い状態を保つていることが判かる。

そこで、更に進んで、最高或いは最低の連帯度を記録した階層を拾つてみると、最高の連帯度を取得したものは、開拓「赤井川」では「中層の上」であつて、これに最も多くの「最高値」が集中している。又最低についてみると、開拓では「上層」と「中層の下」であつて、この2つの階層に集中している。これに対して、既存農村「大野」では、最高の連帯度を記録した階層は「中層の下」であつて、「上層」はこれに次ぐ。また最低の連帯度

としては「上層」と「中層の上」の2つの階層に集中している。従つて、比較的によい傾向をもつている階層は、既存農村「大野」では「中層の下」であるのに対し、開拓部落「赤井川」では「中層の上」ということになり、いずれにしても（既存、開拓共に）「中層」にこれが集中していることがわかる。しかし、同じ「中層」でもこの成績のよい階層は、既存と開拓とでは1段ずれていることに注目しなければならない。この点をやや詳しく検討すると、既存では「中層の下」が最もよいが、開拓になるとこの「中層の下」は甚だよくない。開拓では「中層の上」が最も優秀であるが、既存では「中層の上」は、あまり良くないことが明らかである。

しかし乍ら、開拓「赤井川」と、既存「大野」との間には、ある程度絶対的な階層的地位の喰い違いが存在するかも知れず、既存の「中層の下」は、開拓の「中層の上」に最も近接しているのかも知れない。もし然りとすると、この階層的連帯性において最も安定した、しかも最も高い統一性をもつた階層は「中層」であるということになる。

この傾向は可成り大雑把な見方によるものであつて、各々のエリアについてより微視的にみれば、必ずしもその限りでない。しかし、大局的には、この「中層」における連帯性の相対的優位性は容認せざるを得ない。

この点「上層」は、開拓、既存ともに成績は極端である。最高もあれば、最低もあり玉石混淆といった感じである。また開拓の「下層」もこのような傾向がみられる。このことは「中層の上」若しくは「中層の下」が、やはり最も円満にして安定した連帯性を保っていることを物語るものといわねばならない。

以上、ここでは階層集団内部における連帯性の特色を、既存農村「大野」と開拓部落「赤井川」を比較しながら分析した。

これを要するに、両農村はそれぞれ異つた連帯性を示めすが、一般的には両農村社会ともに「中層の上」又は「下」に最も高い連帯性がみられること、開拓における「上層」の連帯性は既存のそれと共にあまりよくなく、ことに開拓の連帯性は、「下層」に行くに従つて、一般に落ちる傾向があるといへる。勿論この外にも数々の特色がみられる。

この階層的連帯は、Socio-economic Status (S.E.S.)を基準にしたものであるから、他の基準による階層化をもとにして、その連帯性を求めることも出来る。しかし、このS.E.S.による地位は、収入、自己評定 (self-identification) 或いは、経営階層等々による評定結果と極めて高い相関関係をもつているので、これ等の他の基準による階層化を前提とした階層的連帯とは、さほど大きな差は生じないものと推定される。

Ⅱ 開拓部落の入植以後の経過期間の 相違による連帯性の特質

「外延的課題」の第2の課題として、ここで取り上げる問題は、表記の如く、新しい開拓部落と比較的に古い開拓部落とでは、その社会的連帯性の点において如何なる相違があるかを、本調査における測定結果を利用して説明することである。

この問題は、入植以来今日にいたる迄の、それぞれの開拓部落における農家の連帯性がどのように変化してきたか、所謂連帯性の変動過程を説明するのに役立つ。このような問題はかなり重要な意義をもっているが、しかし本研究ははじめからこの変動過程の研究を企画したものではないから、これに答えるだけの体系を十分ととのへていない。

ただ、8つの開拓部落を、それぞれ入植以来の経過年数の長短に分類し、年限の新しいものから古いものにかけての連帯性の相違を、逐次明らかにして行けばこの種の開拓農村における連帯性の変動過程に類似したものを或る程度把えることが出来る。勿論、このような方法が方法的に可能になるためには、入植以後の経過年月を時系列的に配置した各開拓部落が、開拓部落としてある共通の要素に還元されうる可能性をもつたものでなくてはならない。しかし、無理にこのような取扱をすれば、開拓部落におけるそれぞれの特色をある程度無視することになるから、1つ1つの開拓部落の生長過程における連帯性の変動をとらえることも出来なくなる。ただ、各部落における変動過程を直接明らかにすることは出来ないとしても、開拓社会における大体の傾向を把えることは出来る。

そこで、ここでは一応8つの開拓部落をその入植開始以後の経過期間の長短によつて分類し、これによつて、新旧部落の連帯性の相違を明らかにする方法をとることにする。

ところで、開拓部落の入植開始以来の経過年数であるが、これを何によつて把えるかがまた問題である。何故ならば、各部落における構成農家の入植の時期は必ずしも全部が同じでない。草分け的な古い農家もあれば、極く最近入植したものもある。方法としては一応、各開拓農家の入植の時期を明らかにし、それから今日迄の期間を出して、全農家のそれを平均し、その値をもつてその部落の入植以来の経過期間と見做す方法が考えられる。しかし、この方法では、部落の中に極く少数の草分けがあるだけで、この部落の入植以来の経過期間が非常に長くなってしまう。部落のサイズが小さい時にはとくにそうであるから、この方法はあまり適切とはいえない。

そこで、本研究においては、一応開拓地の地区計画が設定され、これに基づいて第1回目

の入植が開始された時から、本調査の実施年度迄の期間をもつて、部落の経過期間を定める方法をとることにした。

いま、8つの開拓部落の入植時期と入植以来の経過年数（期間）を明らかにしてみると次の如くである（第17表）。

第17表 開拓部落の入植以後の経過期間（調査年度は不定）

部 落 名	入 植 年 次	経過期間	部 落 名	入 植 年 次	経過期間
赤 井 川	昭和 2 2 年	12.5年	新 内	昭 和 2 年	30.6年
岩 尾 別	" 2 5 "	5.6	ニセパロマナイ	" 2 0 "	10.8
大 与 地	{ 戦前 明治45年 戦後 昭和20年	11.8	拓 北	" 8 "	20.0
鬼 志 別			" 2 5 "	5.6	共 和
			平 均	—	13.0

第17表によれば、8つの開拓部落の入植の時期は、凡そ昭和2年より昭和25年迄の間に分布している。従つて、その入植以来の経過年数は、約5年間から30年間までにわたることになる。（この経過年数は、調査が行なわれた年度までの期間をあらわす）。

そこで次に、この第17表によつて、8つの開拓部落の入植後の経過期間を5つのクラスに区分して、それぞれ該当部落を列举してみる。

第18表 開拓部落の入植後の経過期間の区分

	入 植 後 の 経 過 期間の class 分け	該 当 部 落
I	5 年 class	岩尾別、鬼志別
II	10 年 class	ニセパロマナイ、共 和
III	15 年 class	赤井川、大与地
IV	20 年 class	拓 北
V	20 年 以上	新 内

第18表は、経過期間を5年単位に仕切ることによつて構成された各クラスの該当部落名を明らかにしたものである。

次に、このクラスわけに従つて、各クラスにおける開拓部落の連帯性の特色を拾つてみる。

先ず、比較的に新しい部落と、比較的に古い部落における社会的連帯性を対極的に観察するために、これを10年を単位として「新」「旧」2群に分けて考察してみる。

10年未満のクラスに入るものとしては、「岩尾別」（5.6年）「鬼志別」（5.6年）「共和」（8.0年）の3部落があり、10年以上のものとしては、「赤井川」（12.5年）「大与地」（11.8

年)「新内」(30.6年),「ニセパロマナイ」(10.8年)「拓北」(20.0年)の5部落がある。このうち「新内」は特殊性が強いので、これを除外し、残りの7部落について検討してみる。

10年を単位として、新旧2つの群に開拓部落を分けた場合、各エリアについて如何なる連帯性の特色がみられるか。これを連帯度の平均値によつてみると次の如くである(第19表)。

第19表 10年を単位とした新旧開拓部落における連帯度の Area 別比較

Area	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	Ave.
	C. S.	I. R.	E. R.	S.	C.	E. B.	L. G.	T. A.	
10年未満	.208	.170	.111	.393	.310	.351	.335	.414	.283
10年以上	.399	.187	.181	.230	.296	.367	.253	.391	.288
〔新内〕	.604	.405	.237	.182	.439	.644	.501	.727	.467

第19表によると、次のことが明らかである。即ち、

(1) 「10年未満の開拓部落」(以下「新」と称す)と「10年以上の開拓部落」(以下「旧」と称す)との間において、とくに連帯性の差の大きいエリアとしては、Interpersonal Relations, Economic Behavior, Tension Area の3つの領域があげられる。

(2) 「新」「旧」両部落群の間に、若干の相違がみられるエリアとしては、Family Responsibility, Churches, Local Government の3つのエリアがあげられる。

(3) 両部落群の平均連帯度において、最も大きな差をしめしているエリアは、Community Spirits と Schools の2つのエリアである。

之を要するに、10年未満の開拓部落と10年以上の開拓部落において、その連帯性に最も大きな差異のみられるエリアは、C.S. と S. の2つである。

Community Spirits のこの新旧両部落群における連帯度は、10年未満が、0.208であるのに対し、10年以上は0.399である。このことは、開拓部落が古くなるに従つて、自己の部落やその土地に対する執着も次第に強くなつてくることを物語るものと思われる。この10年以上の開拓部落における連帯度は、C.S. に関する限り、既存農村のこのエリアの平均連帯度(0.330)より遙かに高くなつており、この点は注目し値する。

これを要するに、新規開拓地における Community Spirits のエリアにおける連帯度はあまり高くないが、10年を越した開拓部落になると、非常に高くなり、更に既存農村になると、その水準は逆に低くなるという傾向がみられる。もつとも「新内」の如く、残留組が頭張つているよな特殊な社会では、この Community Spirits のエリアにおける連

帯性は極度に高く、トップレベルに達している。このことは、彼等が自分達の力で形成した部落とその土地について異常なほど強い執着心をもっていることを雄弁に物語るものといわねばならない。

次に問題なのは、Schools のエリアにおける連帯性である。8つのエリアのうち、どのエリアも大体において、旧開拓部落の方が連帯度が高いが、この Schools のエリアと Tensionエリアだけは、反対に10年未満の開拓部落の方が10年以上の旧開拓部落よりも連帯度が高い。ことにこの Schools のエリアにおける両者の差ははげしい。

このことは、新しい開拓部落では、住民の世代の若いものが相対的に多く、教育を受けさせなければならない子弟を持たないものがやや多いという事実、世代の新しい開拓部落は概して、地区開拓計画にもとずいて計画的に設営されている関係からして「文教」についてはそう大きな不満はないという事実由来するものと思われる。この点、10年以上の開拓部落では、現在及び将来の子弟の教育、学校の文教自体に対する関心も複雑微妙となつてくる関係からして、このエリアにおける規範意識の連帯性も低くなつてくるものと思われる。

これ等の点については、参考までに掲げた「新内」の連帯度をみることによつても、肯定することが出来る。即ち、「新内」の Schools のエリアにおける連帯度は0.182であつて非常に低い。このことは、開拓社会の場合、年代がたつて古くなるに従つてこの文教関係のエリアにおける連帯性も低くなることを意味している。

次に、8つのエリア全体として、新旧両開拓部落において、いかなる連帯性のちがひがあるか、この点について見るに、平均値がしめすとく、両者はそれぞれ0.283、0.288という連帯度を保つており、そこには大差はみられない。

10年未満と10年以上の開拓部落における連帯性をめぐる特色は、これにつぎのものではないが、その主なる特質は以上の如くである。

次に、先に掲げた、5年単位のクラス分けによつて、開拓部落の連帯性をみた場合、そこに如何なる特色がみられるか、この点について若干の考察を展開する。

まず、前掲第18表によつてⅠよりⅤまでの範疇に所属する開拓部落の連帯性をエリア別に整理してみると、その連帯度は第20表の如くなる（次頁）。

第20表によつて、8つのエリアの連帯度を平均値をみると、最も低いのは「10年クラス」の開拓部落で、その値は0.213である。「5年クラス」は概して高く0.320であるから、連帯性は5年より10年にかけて一旦下降し、「10クラス」以降になると次第に上昇しはじめる関係にあることが明らかである。しかし、再び上昇しはじめても「新内」の如き高さにまでには到達しないし、また、既存農村の平均値0.364までには及ばないことがわ

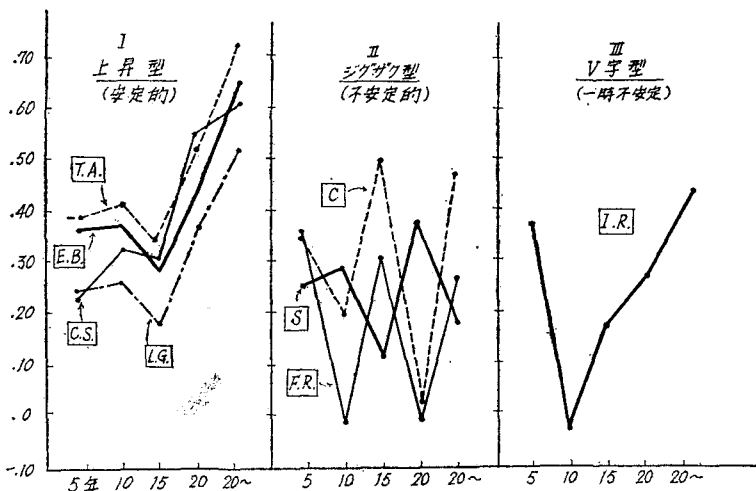
第20表

開拓部落の継続年限別連帯度

継続年限別	Area	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	Ave.
	C.S.	I.R.	F.R.	S.	C.	E.B.	L.G.	T.A.		
5年 class		.230	.385	.339	.245	.336	.380	.246	.395	.320
10 " "		.312	-.058	-.098	.273	.196	.387	.255	.415	.213
15 " "		.299	.181	.293	.138	.485	.276	.180	.334	.273
20 " "		.537	.245	-.010	.377	.080	.435	.352	.516	.317
20年以上		.604	.405	.237	.182	.439	.644	.501	.727	.467

第9図

開拓部落の経過年限別 Area 別連帯度の趨勢



かる。

次に、これをエリア別に考察してみる。今、第20表によつてエリア別の特色を図示してみると、上図の如くなる(第9図)。

第9図は、開拓部落におけるエリア別連帯度を各年代集団別に明らかにしたものである。これを他の角度からみれば、開拓部落の年数が古くなるに従つて、各連帯性のエリアにどのような変化が生ずるかがわかる。すなわちそこには、次の3つの型が存在する。

- I 上昇型……年代の古い開拓部落になる程連帯性も高くなつて行くもので、安定的、発展的傾向をもつ。該当エリアとしては、Community Spirits, Economic Behavior, Tension Area, Local Governmentの4つのエリアがあげ

られる。但し、この4つのエリアはいずれも年代「15年クラス」の部落において、一時連帯性が低下するという共通性をもっている。

Ⅱ **ジグザク型**……年代の古い新しいによつて、次第に上昇も下降もせず、不規則な特性をしめし、ジグザクな形をとるもの。この形をとるエリアは、一応不安定なエリアと見做れる。該当のエリアとしては Churches, Schools 及び Family Responsibility の3つがあげられる。所謂、この3つは「乱脈型」である。

Ⅲ **V字型**……ある年代層の部落群において、連帯性の著るしい低下がみられ、それより古い部落になると次第に急昇する性質をもつたもの。即ち一時的に不安定に陥入る可能性をもつたものであつて、該当エリアとしては Interpersonal Relations があるのみである。

本調査の結果では、以上3つの類型が扱えられるが、年代がたつに従つて、次第に低下(下降)したり、また年代の経過にかかわらず常にほぼ一定しているような連帯性をしめすエリアは発見されなかつた。2,3の例外があるにせよ、概して、開拓部落における農家のエリア別連帯性は、10年乃至15年相当の年代のところで、一旦危機に見舞われる時期があるが、これを突破した後は、次第に上昇して行くものが多いという特質が認められる。もとよりそれは、本調査を素材とした限りにおいて云い得る大体の傾向であつて、絶対普遍のものではない。ただ年代の経過と共に次第に低下して行くような傾向をもつエリアを多数もつ開拓社会は当然途中で崩壊してしまうであらう。調査対象になつた開拓部落の中には不振地区に該当するものが多かつたが、しかし、現実には何とか続存している以上、漸次連帯性が低下するようなエリアが多数あらわれないのは、むしろ当然のことと思われる。

以上、本節においては、連帯性をめぐる外延的課題として、開拓社会における階層別連帯性の特色と、開拓部落の入植後の経過期間の長短、従つて開拓部落の年代の相違にもとづく連帯性の特色の2つの問題について分析した。先にも触れた如く、分析さるべき外延的課題はこれに尽きるものではなく残された課題は少くない。

ことに外延的課題は、内延的課題よりも範囲が広いだけに、問題の局面も当然多岐にわたつてくる。これ等の様々なる外延的課題を逐次分析的に解明して行けば、開拓社会についての深層に及ぶ認識、即ちその深さのすべての層にわたる社会的現実について、興味ある分析を展開することが出来るとと思われる。ここでは、この限られた2つの課題について、ある程度の分析を展開したが、残された問題については、後日、他の調査の進展と相まつて、逐次分析を進めることにしたい。

第6章 結 論

本稿において展開してきた、尺度化による開拓部落の農家の連帯性をめぐる研究は、大きくわけて2つの目的と意義とをもっている。1つは、この計量的な方法の採択によつて、開拓社会における連帯性そのものを測定し、その特色を分析すると共に、これを通じて或る程度この社会の特殊な性格を把握することであり、その2は、このような尺度化による観察方法自体が、果してどこ迄可能であり、どこにその限界があるかを試験的に考察してみることである。この2つのことは、もとより互に相関連する事柄であつて、別々の問題とは考えられない。

そこで、ここで結論として、果してこれ等2つの目的に対して、本稿における研究がどれだけの役割を果し、またどれだけの成果をおさめることが出来たか。また、そこにはどのような未解決な問題が残されているかを反省することによつて、この研究の意義を明らかにし、今後の研究の指針とすることが肝要と思われる。

先ず、この尺度化の方法によつて、開拓社会における農家の社会的連帯性の特色が、どのように把握されたかという問題についてみる。この問題は、発見された事実の具体的な内容と、その事実の発見にいたるまでにとられた尺度化をめぐる方法論的或いは手続的な問題とにわけて考察する必要がある。

順序を逆にして先に尺度化の方法をめぐる問題から省察してみると、ここでは、Fesslerが創定した Community Solidarity の尺度化の方式の採択し、これに必要とされる最小限度の修正を加えた尺度文章を構成して、これを北海道の典型的な開拓部落及び既存農村に適用する方法をとつた。そのために、連帯性をめぐる規範的な尺度文章は、内容的に、個々の開拓社会に固有に存在する価値観念や規範体系とは、別のものになつたのではないかという懸念が生ずる。かかる意味から、尺度文章の規範的意味内容の社会的妥当性について、十分考慮する余地が残されていると思われる。ここでは、アメリカでも通ずるし、また日本の農村、ことに北海道の既存農村や開拓部落においても可成り適用性のある極めて普遍性の高い一連の規範体系を導入し、これを共通の基準として、開拓、既存の両社会に適用したわけである。従つて、このような極めて普遍性の高い規範的意味をもつた尺度文章によつて把握された連帯性は、個々の農村地域社会に固有する或る伝来的な連帯性とは必ずしも無関係ではないとしても、可成り異つた面における連帯性を把握しているということ

になるかも知れない。ただ開拓社会の場合は既存農村と異つて、その社会を基本的に規制するような固有の習慣とか習俗或いは規範意識といったものが、まだ形成されていないから、かなり universality の高い規範体系や一連の価値観念を用意してこれによる意識の反応を求め、また連帯性を測定するという方式を用いても、それはあながち間違いとはいへないと思う。ここで採択された尺度文章の規範的意味内容は、一般にかなり近代的な性格をもつたものである。現在の普通の良識をもつ社会人にとつて、当然期待されて良いと思われる規範が、その尺度文章の内容にとり入れられている。従つて、そこには封建的な身分関係にかかわる連帯性や、特殊な法律関係における連帯性についての標識化は全く行われていない。それ故に、府県にみられるような村落共同体的な範疇に属する農村に、この尺度を直接適用したところで、このような特殊な社会関係に基づく連帯性については、これを把握することは出来ないであろう。Fessler の尺度は、かなり一般化された近代的な社会関係を前提として成り立つような連帯性の所在についてのみ反応を生ずることになると思われる。しかし、以上の如き限定があるにもかかわらず、この尺度を開拓社会に適用したことには、1つの試験的実験的な試みとして意味があると思う。

次に、測定結果の分析については、本稿ではとくに Fessler の手法を一段と発展させ、あらたに、「連帯度」なる単位をもうけ、これを駆使する方法をとつた。もとより連帯度のみによつて、連帯性のすべてを判断することが出来るわけではない。

その為には、Fessler が定めた尺度文章の scale value を平均した「スコア平均値」や、八角形における Sigma Distance をとる場合の「S.D.」、意見の「ばらつき」の程度をあらわす「標準偏差」等々と、この「連帯度」との3者をからみ合わせて総合的に判断しなければ、意味はない。しかし、連帯性のある領域における規範意識に対する一致性の程度と解し、又規範に対する肯定的反応の方が、否定的反応より、より好ましい傾向があると仮定すれば、「連帯度」による結果の表示と、それによる分析は、この要求を充すばかりでなく、かなり効果のあることが認められる。

従つて、本稿における連帯性の分析に当つては、連帯度に重点をおき、スコア値やS.D.についてはこれを参考として重視するという方法をとつた。結果の表示について、Fessler が考案した八角形図表は大体の傾向をみるには適しているが、これを詳細な分析に使用することは出来ない。

次に、連帯性を把らえる8つのエリアについてであるが、このエリアの各々の意味についてはやや不確定であり、最も問題を多く残している点であろう。この8つのエリアがそれぞれ如何なる性格のものであり、連帯性と如何なる関連を有するかについて、Fessler

しい説明を与えていない。それ故に、中には一見エリアを変えた方がよいのではないかと思われる尺度文章もある程である。このエリアの設定については、今後一層の研究を必要とするとともに、少くとも各々のエリアの設定について、理論的な連絡がつけられるようにする必要が認められる。ここでは、Fessler が整序して設けた8つの領域をそのまま踏襲したのであるが、以上のべた如き意味において今後一層の考察が必要とされる。

尺度化の問題につきまとう今1つの問題として、統計的管理の問題がある。統計的管理は数量化に際して当然要求される手続であるが、妥当性の検定にせよ、信頼度の検定にせよ、あるいは factor analysis にせよ、その算出操作は、あまりにも煩瑣すぎる。計算には龐大なる労力が必要とされ、殆んど人力の限界と思われるような激しい計算の繰り返し要求される。誤算のないようにこの仕事を管理することは並大抵のことではない。繰り言にはなるが、この統計的管理の仕事をより簡便に処理しうる様な方式を考える必要があると思われる。また、統計的処理に当つては、それが、社会学的に如何なる意味をもつものであるかを常に十分考慮する必要がある。社会学的に説明の出来ないような手法は、みだりに駆使すべきではないと思われる。この点については本稿では慎重を期した。

次に、調査地点の選定と調査時点のずれの問題について述べる。調査地点については、の選定及び調査そのものの実施上の都合からして様々なる制約をまぬがれない。我々そのもっている調査能力にはもとより限界がある。それ故、もつと多くの標本を求めめる必要があるにも拘らず、これを満足させることが出来なかつた。また概ね、1年に1乃至2地点を調査したために、調査時点にずれを生じたことも問題である。

しかし、この問題は、先にも触れた如く本稿における研究に致命的な打撃を与えるものとは思われない。将来、更に調査対象を拡大したり、あるいは改めて大規模な調査を全道にわたつて企画、実施することによつて、この測定的方式は更生されるであろう。また同一の地点については、繰返し測定を行うことによつて、連帯性の変動結果をみることも出来るので、かかる意味においても本研究は少なくともその先駆的研究として価値があるものと思われる。

以上が、尺度化をめぐる方法上の諸問題として、反芻すべき点である。ところでこれらの限られた条件と、範囲内において、開拓社会の連帯性には如何なる特色が把握されたであろうか。

まず最初に強調しなければならないことは、開拓社会における農家の社会的連帯性は既存農村におけるそれよりかなり低いということである。もつとも、エリアによつては、逆に開拓の方が既存よりも高い場合もあり、又地点（部落）によつても、既存よりも開拓の

方が一般に高い連帯性をしめしているところもある。しかし、概況としては、開拓社会の連帯性の方が、既存のそれよりも一段と低いという傾向がみられる。この開拓と既存農村における差には一応有意性が認められる。また、年代の若い開拓部落においては、内部社会関係の未熟性や、外部よりの移住者の混成による集団内部の異質性等が介在する為、その連帯性は低いものとなつているのが注目される。開拓社会における連帯性は、この社会の統一性の弱さに応じた形をとつてあらわれているということが出来る。

以上、この研究において把えた開拓社会における連帯性の特色を要約、列挙すると、次の如くである。

- (1) 開拓社会における連帯性の一般的傾向を、既存農村のそれとの比較において検討すると、一般に開拓社会における連帯性は既存のそれよりもかなり低い（平均値による分析）。
- (2) 「連帯度」によつて、各部落における最高点と最低点との巾をみると、開拓部落における最高最低の格差は既存農村におけるそれよりも大きく、強い。
- (3) エリア別に連帯性の特色を分析したところ、Community Spirits, Tension Area の2つの領域における連帯性をのぞけば、他の6つのエリアにおいては、開拓より既存の方が連帯性が高い。
- (4) 8つの開拓部落相互の連帯性の特色を比較分析した結果によれば、エリア別には、どの開拓部落も Tension Area における連帯性が最も高く、続いて Economic Behavior, Community Spirits のエリアにおける連帯性が比較的が高い。また Family Responsibility, Interpersonal Relations の2つのエリアにおける連帯性はかなり低い。この点既存農村では、エリア別の連帯性の高低に格差が極めて少く、非常に円満なレベルを保っており、わずかに Local Government のエリアにおける連帯性がやや低いにすぎない。
- (5) 「部落のサイズ」と連帯性との関連についてみると、部落のサイズと連帯性との間にはやや反比例的な関係があり、部落が小さくなるに従つて、連帯性も高くなるという関係が存在する。しかし、この傾向は必ずしも絶対的なものではない。
- (6) Socio-economic Status の測定による開拓農家と既存農家との階層的地位の判定を行い、開拓社会における階層的連帯性の分析を行つた結果によると、概ね開拓、既存ともに上層と下層における各階層集団内における連帯性は低く、中層における連帯性が高い。ことに開拓社会における下層の連帯性は甚だ低い。これ等一連の階層内における連帯性については、もとより、農家自身のこれに対するポジティブな意識という形

をとつてあらわれぬ。即ちそれは潜在的意識にすぎない。

- (7) 開拓部落における入植以後今日に到る迄の経過期間の長短、即ち開拓部落の年代の相違による連帯性の差をみたところ、「10年未満」の開拓部落における連帯性は、「10年以上」の開拓部落におけるそれよりも、一般に低い傾向がみられる。しかし「10年以上」の開拓部落でも、特殊な部落をのぞけば、その連帯性は一般に既存農村における程高くはない。

またこれをエリア別に考察してみると、8つのエリアにおける連帯性の特色として、開拓部落の年代が古くなるに従つて、次第に連帯性が上昇するタイプの「発展上昇型」のもの、上下の振幅が激しく安定性のない「ジグザグ型」と、更に一時低下するが、漸次上昇する「V字型」とが発見された。概して、開拓社会では10～15年の時期に一時連帯性が低下する傾向がみられるが、その後は回復向上するようである。いずれにせよ、エリア別には「平行、不変型」と「下降漸低型」とは存在しなかつたから、概ね開拓社会における連帯性は、悲観的にみるべきものではない。もつとも、2、3のエリアにおける連帯性を別とすれば、一般に開拓部落における連帯性は既存農村におけるそれ程高くはないものとみられる。

以上が、本研究によつて把えることの出来た主なる発見の事実 (findings) あるいは傾向の概要である。もとよりこの外にも分析した問題があるが、比較的に重要と思われるのは、以上の7点である。また、この外残された未考察の問題点も多数あるが、これ等の問題については、先にも触れた如く、後日の機会に譲つて検討しなければならない。

さて、尺度化による連帯性の測定は、ここに掲げた数々の findings の内容からみて、ある意味においては極めて常識的な、当然のことしか発見されなかつたかの如くみへる。しかし、我々としては測定や分析の結果が常識と如何に合致するかについては関心がなく、またそこに問題の焦点をおいていない。科学的認識の結果が、常識と合致することもあれば、しない事もあるのは当然であつて、それによつて研究そのものの意義や価値がきめられるべきものではないと考へる。

要はこのような尺度化による社会事象の客観的数量化的認識の方法が、1つの科学的研究の手段として、又観察の手法として、どこまで可能なものであり、どこに限界があるかを究明し、その許された範囲内において、把えられた事実に対して、一定の理解と解釈とを与えてゆくことが必要と思われる。従つて数量化された尺度化の結果を無条件に絶対視することは許されないし、又その数量の分析や取扱い方法そのものも慎重に配慮されてゆかねばならない。社会現象が歴史的人間の主体的な意味的行動にもとづく人間関係より

派生するものであるとすれば、尺度化によつて把えられた数量的関係についても、そこに解釈が必要となり、これを社会的な意味関連によつて理解しなければならないのは当然である。

このような理解の可能性は、既存の社会学的な諸理論によつても与えられるし、また様々な経験法則の援用によつても可能となる。ただ尺度化によつて極めて客観化された事実が、既存の経験法則や理論と一致しない場合がありうる。このような場合には、発見された客観的事実を、経験法則や理論で説明し得くのが普通であつて、そこに理論と事実との矛盾相反があらわれる。本稿における数々の findings と既存の理論との間には、このような矛盾、齟齬はあまり生じなかつたが、しかし全然ないわけでもない。

これ等の不一致については、むしろ開拓社会の特殊性にもよると思われるが、いずれにせよ、これをもつて尺度化の方式そのものもつ効果を疑い、また理論そのものの虚偽性を主張することは許されない。というのは、理論における虚偽性と、尺度化によつて発見された事実との間には、必ずしも正当性に対する誤謬というような関係が成立するとは限らないからである。勿論、虚偽の理論は事実の真実性を表明しているとはいえないが、ある理論が虚偽であり、誤謬であることを確定するためには、誤りのない事実についての認識が理論的にも実際的にも与えられなくてはならない。そのためには、その認識が正当なものであるかどうかを積極的に明らかにしなければならない。しかるに、尺度化による事実の発見は、既に様々な理論と仮説を前提として進められたものである。その過程に重大な誤りがなければ、それによつて発見された事実とは、これ等の基礎理論や前提となつた仮説と不可分の関連に立ち、それが正しい限りにおいてのみ妥当するという制約をまぬがれない。それ故に、立論の根拠と方法とを全く異にする別の理論と、測定結果がしめす事実との間に、たとえ齟齬をきたすようなことがあつたとしても、それはむしろ止むを得ないことであろう。

尺度化による発見的事実はあくまでも一定の手続を経て把えられた事実についての大体の趨勢あるいは傾向をしめすものであつて、絶対的なものではない。それ故に、他の理論との乖離に際しても、その支梧の故に直ちにその理論の正当性を否認することは許されないと思われる。

測定結果に齟齬を来たした理論の正当性の吟味については、別に慎重にこれを検討する方法が用意され、それによる実証が必要と思われる。ただ、齟齬をきたすような理論は、測定の手続に重大なる誤りのない限り、その正当性を一応疑うだけの余地はあるであろう。しかし、これをもつて直ちに、その理論を全たく誤謬と断定し、その正当性を絶対的に

否認することは危険である。

この点、所与の理論と、測定結果がしめす事象の特性とが一致する場合は、恐らく、その理論の正当性が、これによつて実証されたと見做してさしつかえないと思われる。本研究においても、このような一致がしばしば認められたのであるが、このことは、尺度化の方法というものが、かなり信頼性のおけるものであり、又その測定結果が既存の理論とよく符合するものであることを立証するものである。

以上の如く、尺度化による観察の方法には、たとえ限界があるとしても、その限界は必ずしも絶対的なものではない。むしろ、その限界の相対的であるが故にこそ、この種の認識の方法が、1つの科学的な認識の方法として、充分駆使するに値するものだといわねばならない。

本研究においては、測定 の 目 標 であり、また尺度化の中核概念である Community Solidarity という概念の構成をめぐつて、それが既存の社会連帯についての諸理論、諸学説と如何なる関連をもつものであるかを明らかにするために、別に、連帯理論の学說的考察を展開してみた。その詳細については別の機会に明らかにするが、この考察によつて、この Community Solidarity の概念が、社会連帯について要求される様々なる要件をかなり大巾に充していることが判明した。また、本研究と平行して、開拓社会における連帯性を、北海道の開拓史上において重要な地位を占めた「大農場」や「屯田兵村」等における連帯性を分析し、これとの関連において考察してみたかつた。もつとも、これ等の集団は開拓的 community ではあるが、今日では存在しないし、またあつてもかなり変質したものになつているから、尺度化による方法は直接適用出来ない。もし、他の方法によつて、これ等の community における連帯性について考察することが出来れば、開拓社会において農家が形成する連帯性の特色をめぐつて更に興味ある事実が発見されるであろうと思われる。

この種の問題は、本研究との関連において残された課題の1つである。これについては、他の残された課題と共に、後日の研究にまつて、その特質を明らかにしたいと思う。